

令和 2 年度 自己点検・評価報告書

鹿児島工業高等専門学校

はじめに

鹿児島工業高等専門学校は、昭和 38 年に機械工学科 2 学級、電気工学科 1 学級でスタートしました。昭和 42 年に土木工学科を増設し、さらに昭和 61 年に情報工学科を増設しました。そして、平成 3 年に 2 学級あった機械工学科のうちの 1 学級を電子制御工学科に改組しました。この平成 3 年は設置基準が大綱化され、規制が緩和された年でもあり、高専においては、分野の拡大や専攻科の設置、5 年で卒業する学生に準学士の称号を与えられるようになりました。本校では、平成 12 年に機械・電子システム工学専攻、電気情報システム工学専攻、土木工学専攻からなる専攻科を設置し、平成 15 年に電気工学科を電気電子工学科に改称しました。

平成 16 年には、国立高専それぞれが独立行政法人になり、本校は独立行政法人国立高等専門学校機構が設置する国立高専になりました。平成 22 年に土木工学科を都市環境デザイン工学科に改称し、平成 27 年に土木工学専攻を建設工学専攻に改称し、現在の形になりました。

さて、第 4 次産業革命というキーワードで表現されていますが、産業技術の融合化や複合化、グローバル化、ライフイノベーション等の進展とともに最近の技術の革新は著しく、これからの産業界には、多様で新しいタイプの技術者が必要となっており、社会から求められる技術者像も大きく変化してきております。

本校は、このような時代の要請に応えるために、専門に偏らず、多面的な物事に対応できるような学際的な知識を有した実践的技術者の養成、特にこれからのグローバル化に対応できて、地域に貢献できる技術者の養成に取り組んでいるところです。

このような背景の中で、学外有識者の方々に本校の現状をご理解いただき、ご意見およびご提言をお願いするため毎年外部評価委員会を開催させていただいております。

去る令和 3 年 3 月 24 日（水）には外部評価委員の皆様にご出席いただき、本校の教職員が鹿児島高専の現状についてご説明申し上げ、貴重なご意見を賜りました。本報告書では、説明の概要と共にその際に行われた質疑応答やご提言の内容をまとめております。

ご多用の中、本校の運営状況の説明に傾聴いただき、また貴重なご意見を頂戴しました鹿児島大学大学院理工学研究科長委員長本間俊雄様をはじめ評価委員の方々に本紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。外部評価委員会で頂いたご意見、ご提言を今後の本校の運営に生かしてまいりたいと考えております。

鹿児島工業高等専門学校
校長 氷室昭三

目 次

はじめに

第 1 部 令和 2 年度 自己点検・評価報告書

1	自己点検・評価報告書総括	6
2	自己点検・評価報告書（簡易版）	8
3	自己点検・評価報告書（詳細版）	26

第 2 部 令和 2 年度 外部評価報告書

1	令和 2 年度外部評価委員会委員名簿	58
2	令和 2 年度外部評価委員会委員出席者名簿	59
3	令和 2 年度外部評価委員会列席者名簿	60
4	令和 2 年度鹿児島工業高等専門学校外部評価委員会実施要領	61
5	令和 2 年度外部評価委員会日程表	62
6	鹿児島工業高等専門学校外部評価委員会規則	63
7	外部評価委員会議事録（一部要約）	64
8	外部評価委員会講評	81

第 1 部

令和 2 年度 自己点検・評価報告書

構 成

自己点検・評価報告書総括		資料 1-1
自己点検・評価報告書（簡易版）		資料 1-2
自己点検・評価報告書（詳細版）		資料 1-3

令和 2 度自己点検・評価委員会および外部評価委員会資料

【概要】

はじめに、本年度の本校の主な取り組みと自己点検・評価報告書の概要について述べる。本校では、国立高等専門学校機構の第 4 期中期計画をベースに、年度計画および具体的な Plan を策定し、それを実現すべく、Do、Check、Action を行っている。また、その活動状況について年度ごとに自己点検・評価委員会及び外部評価委員会を開催し、自己点検・評価を行っている。昨年度、本校は機関別認証評価、監事監査、外部評価委員会による外部評価を受審した。主な指摘事項として以下のものがあった。

機関別認証評価

- ① 自己点検・評価、研究活動、地域貢献活動に関する規定の必要性
- ② 成績資料の保管状況、成績評価方法の妥当性の検証
- ③ 満足度等を把握するアンケートの必要性

監事監査

- ① キャリア教育および進路指導における学校全体としての取り組みの必要性
- ② 相互授業参観の改善の必要性
- ③ 退学率、留年率の改善

外部評価委員会

- ① PDCA に基づいた評価の必要性
- ② イノベーション人材育成への取り組みについて
- ③ 企業に対する満足度調査の実施と調査結果の検証について

各外部評価のご指摘に共通する点として、本校の自己点検・評価の PDCA サイクルはうまく機能しておらず、抜本的な改革が必要であることが指摘された。そこで、本年度は、各外部評価から受けた指摘事項をすべて改善すべく、取り組みを行った。

本年度のもう一つの大きな取り組みとして、本校の将来ビジョンの策定と具体策の検討を行った。この目的は、本校が時代にふさわしい姿へと歩もうとする道筋についてのビジョンと具体策の検討を行うことである。特に、地域における魅力ある高専を築き上げることを実現するために鍵となる項目についてまとめあげること为目标とした。また、上記二つの取り組みと自己点検・評価報告書の作成を行う組織として、鹿児島高専アクションプロジェクトチーム（以下 AP チーム）を結成した。

次に、自己点検・評価報告書の昨年度からの変更点を述べる。本年度の評価項目は、本校のミッションと取り組むべき事項を明確にするため、昨年度までの年度計画ベースの項目から本年度新たに定めた鹿児島高専のミッションをベースとした本校独自の評価項目に変更した。本校のミッションは以下である。

- I. 創造性豊かで人格が優れた国際的に通用する技術者を養成すること
- II. 開発型の教育・研究に重きをおき、社会的・経済的価値あるものを創出していくこと
- III. 地域の産業、文化さらには生活を支えていく地域に根差した高専とすること

資料 1-1 自己点検・評価報告書総括

さらに、昨年度の外部評価委員会での①のご提言に基づき、報告書を概要、簡易版、詳細版の3つに分けた。簡易版では、各評価項目の目標に対する成果を表やグラフで見える化を行った。詳細版では、従来の Plan、Do の項目に対し、Check、Action の項目を新たに追加することによって、PDCA サイクルを把握できる様式とした。また、各評価項目を S、A、B、C で自己評価した。各評価基準は以下である。

S：達成に向け特筆すべき進捗状況である

A：順調に進捗している

B：やや遅れている

C：大幅に遅れている

評価の妥当性については、各部署で自己評価した後、自己点検・評価委員会で確認を行った。なお、外部評価の対象としては、上記3つの外部評価に加え、専攻科関連の審査である特例適用専攻科の教育状況審査と、研究関連の共同推進会議である第5ブロック研究推進ボードの目標も評価項目として追加した。

【総括】

以下に、令和2年度の主な取り組みの総括を述べる。

(1) 外部評価委員会の指摘への対応状況

①AP チームによる自己点検・評価を行うことで PDCA サイクルの構築を行った。

②混合クラスの決定を行い、イノベーション人材育成の道筋を立てた。

③認証評価での企業アンケート結果を基にした検証を行った。その結果、専門知識に関しては高い評価を得ていることがわかった。一方、英語力向上については満足度が低いことがわかった。今後、英語力向上の取り組み及びグローバル教育の取り組みを充実させていく必要がある。

(2) 全体の取り組み状況

本年度は本校の教育研究活動および管理運営に関する PDCA サイクルいわゆる内部質保証システムのひな形を構築することができた。また、将来ビジョンの策定と具体策の検討を行い、本校の新たな教育の特色の道筋を立てることができた。

48 項目すべての評価項目に対し、S（特筆すべき進捗状況）は5項目、A（順調に進捗している）は37項目、B（やや遅れている）は6項目、C（大幅に遅れている）は0項目であった。また、それぞれの項目に対するチェック、アクションについての検討もなされており、本校の PDCA サイクルは機能していると自己評価できる。

やや遅れている項目は長島町での取り組みや海外インターンシップなど、新型コロナウイルスの影響が大きかった。次年度は、新型コロナウイルスの対策を講じながら、本年度の体制をより本格化させ、さらなる改善を進めると同時に本校の強みを強化していく必要がある。

以上

概要

本校では、国立高等専門学校機構の第4期中期計画をベースに、年度計画および具体的なPlanを策定し、それを実現すべく、Do、Check、Actionを行っている。また、その活動状況について年度ごとに自己点検・評価委員会及び外部評価委員会を開催し、自己点検・評価を行っている。昨年度、本校は機関別認証評価、監事監査、外部評価委員会による外部評価を受審した。これらの外部評価の指摘事項を踏まえ、本年度は大きく分けて以下の3つについての取組を行った。

令和2年度の主な取組

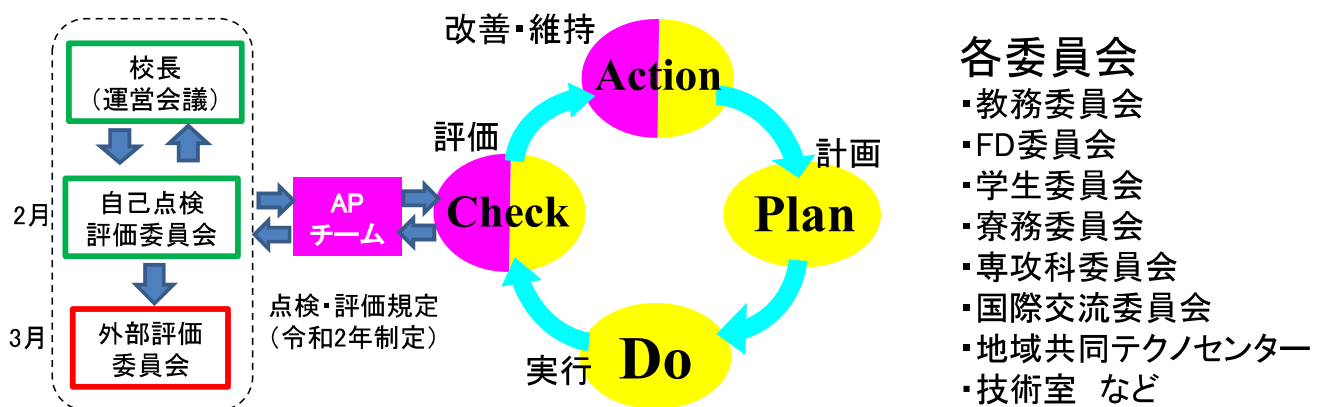
1. 各外部評価の指摘事項の改善
2. 将来ビジョンの策定と具体策の検討
3. 本校のミッションに関する取組

これらを検討する組織として鹿児島高専アクションプロジェクトチーム（APチーム）を結成した。

1

各外部評価の指摘事項

自己点検・評価のPDCAサイクル



目標に対し、PDCAを回し、客観的なデータをもとに
自己点検・評価を行う体制の構築

1. 各外部評価(R1)の指摘事項の改善
2. 鹿児島高専の特色・魅力づくり
3. 本校のミッションに関する取組み

独自の評価項目
評価方法の変更

2

自己点検・評価方法の変更点

2019年度

高専機構の年度計画を
ベースにした評価項目

詳細版:PDと評価

評価基準

S:目標以上に達成している
A:達成している
A':概ね達成している
B:一部達成している
C:達成していない

2020年度

本校のミッションをベースに
した評価項目

簡易版:ミッションや改善事項に
対する成果を見える化
詳細版:PDCAと評価

評価基準

S:達成に向け特筆すべき
進捗状況である
A:順調に進捗している
B:やや遅れている
C:大幅に遅れている

3

本校のミッション

- (1) 創造性豊かで人格が優れた国際的に通用する
技術者を養成すること
- (2) 開発型の教育・研究に重きをおき、社会的・
経済的価値あるものを創出していくこと
- (3) 地域の産業、文化さらには生活を支えていく
地域に根差した高専とすること

4

2019年度
年度計画ベース

大項目	評価項目
教育	入学者の確保
	教育課程の編成等
	多様かつ優れた教員確保
	教育の質の向上および改善
	学生支援、生活支援
社会連携	情報発信
	科研費と外部資金
	地域連携
	鹿児島高専テクノクラブ
国際交流	海外インターンシップ推進
	学生交流による海外派遣
	海外学術交流協定との研究交流
	英語力向上の取り組み
	国際交流イベント、国際会議
管理運営	校長裁量経費
	業務効率化
	研修、表彰、人事交流
	法令遵守、セキュリティ研修

自己点検・評価項目

2020年度

本校のミッションベース

大項目	評価項目
教育の質の保証	学位授与方針
	本科の教育
	専攻科の教育
教育	(1) 本科の教育の成果
	(2) 専攻科の教育の成果
研究	(2) 教員の研究業績
	科研費と外部資金
社会連携	(3) 自治体等との連携
	鹿児島高専テクノクラブ
グローバル教育	(1) 英語力向上の取り組み
	海外インターンシップ
学生支援	(1) 支援体制
	(3) 学生アンケート
管理運営	教育組織(自己点検・評価)
	FD研修、表彰、SD等



5

令和2年度自己点検・評価報告書 (簡易版)

APチーム
外部評価担当

6

目次

概要

自己点検・評価

1. 各外部評価の指摘事項の改善
2. 将来ビジョンの策定と具体策の検討
3. 本校のミッションに関する取組

総括

7

1. 各外部評価の指摘事項の改善

1－1. 機関別認証評価

- ① 自己点検・評価、研究活動、地域貢献活動に関する規定の必要性
- ② 成績資料の保管状況、成績評価方法など教育の質の保証の改善
- ③ 満足度等を把握するアンケートの必要性

1－2. 監事監査

- ① キャリア教育および進路指導の学校全体としての取組みの必要性
- ② 相互授業参観の改善の必要性
- ③ 退学率、留年率の改善等

1－3. 外部評価委員会

- ① PDCAに基づいた評価の必要性(数値目標、簡易版報告書)
- ② イノベーション人材育成への取組について(鹿児島高専のカラー)
- ③ 企業に対する満足度調査の実施と調査結果の検証について

8

1-1. 機関別認証評価

① 自己点検・評価、研究活動、地域貢献活動に関する規定の必要性への対応(下記の1, 2, 3)

自己
評価

S

詳細版: 管理運営、自己点検・評価、各規定の制定

No	認証評価(R1)の指摘事項(改善を要する点)	対応状況	自己 評価
1	自己点検・評価の基準・項目を規定として定めていない。	令和2年5月制定	S
2	研究活動に関する目的、基本方針、目標等を学校として明確に定めているとはいえない。	令和2年4月制定	S
3	地域貢献活動等に関する目的、基本方針、目標等を学校として明確に定めているとはいえない。	令和2年9月制定	S
4	準学士課程の教育課程の編成及び実施に関する方針(カリキュラム・ポリシー)において、「どのような教育内容・方法を実施するか」に関連して、各学科がディプロマ・ポリシーを達成するためにどのようなカリキュラム編成にするかが明示されていない。	対応済み	A
5	学校として、学修単位科目における授業時間以外の学修についての評価がシラバス記載どおりに行われていることを適切に把握していない。	やや遅れている	B
6	一部の授業科目において成績評価資料が適切に保管されていない。	対応済み	A
7	一部の授業科目において成績評価がシラバス記載どおりに行われていない。	検討中	A
8	学校として、成績評価の妥当性の事後チェック、複数年度にわたり同じ試験問題が繰り返されていないことのチェック、及び試験問題のレベルが適切であることのチェックに取り組んでいないなど、成績評価の客観性・厳格性を担保する措置が十分とはいえない。	対応済み	A
9	教育・生活環境の利用状況や満足度等を学校として把握し、改善するための体制の整備が十分とは言えない。	対応済み	A
10	学生や教職員のICT環境の満足度等を学校として把握し、改善するための体制の整備が十分とはいえない。	対応済み	A

(Action) 自己点検・評価の規定について。認証評価では卒業生および企業による教育の検証が求められており、今後、アンケートの実施時期についての記述の追加を検討する必要。

9

1-1. 機関別認証評価

②成績資料の保管状況、成績評価方法など教育の質の保証の改善(下記の8)

No	認証評価の指摘事項(改善を要する点)	対応状況	自己 評価
8	学校として、成績評価の妥当性の事後チェック、複数年度にわたり同じ試験問題が繰り返されていないことのチェック、及び試験問題のレベルが適切であることのチェックに取り組んでいないなど、成績評価の客観性・厳格性を担保する措置が十分とはいえない。	対応済み	A

詳細版: 教育の質の保証、本科の教育、試験問題レベルの把握、繰り返し問題のチェック

Plan	Do
・試験問題レベルの把握・繰り返し問題のチェック →科目担当者から、試験終了後にセルフチェックシートを提出させる。	・試験問題の確認について、セルフチェックシートを作成し、後期中間試験から提出させている。(12月末) ・学年末試験についても同様にセルフチェックシートを提出させる。(3月末)
Check	Action
・教務委員会、教務主事・主事補会議で議論を重ね、セルフチェックシート(紙媒体)の提出を求めることとした。 ・3月末に教務委員会でセルフチェックシートを確認し、試験問題レベルについて確認する。	・教員として基本的な部分であるため、教務主事からの指導を含め引き続き管理を強化していく。

自己
評価

A

10

③ 満足度等を把握するアンケートの必要性(下記の9)

No	認証評価の指摘事項(改善を要する点)	対応状況	自己評価
9	教育・生活環境の利用状況や満足度等を学校として把握し、改善するための体制の整備が十分とは言えない。	対応済み	A

詳細版: 学生支援、学生アンケート、在校生(追加: 4年生以下)に対するアンケート(学生の多様なニーズの把握)

Plan	Do	自己評価 A
7月に遠隔授業に関するアンケートを実施、10月に高専での学びの状況アンケートを実施した。	これまで、在学生に対してのニーズ調査を行ってなかったため、満足度調査アンケートを実施した。	
Check	Action	
学生委員会において、質問事項等を審議し、Microsoft365を活用した満足度調査アンケートを終業式までに全学生を対象に実施した。 質問内容については、グローバルアクティブラーニングセンターとも協力し、図書館、ICT等についての項目も追加した。	質問事項については、今年度の回答状況等を鑑み、更新を行う予定である。 初めてのニーズ調査となるため、学生からの要望に対して学校としてどのように対応すべきかを協議していく必要がある。	

卒業生(5年生)に対するアンケートについても対応済み

11

1-2. 監事監査

① キャリア教育および進路指導の学校全体としての取組みの必要性



就職指導のガイドライン



就職資料整理



キャリア支援マップ

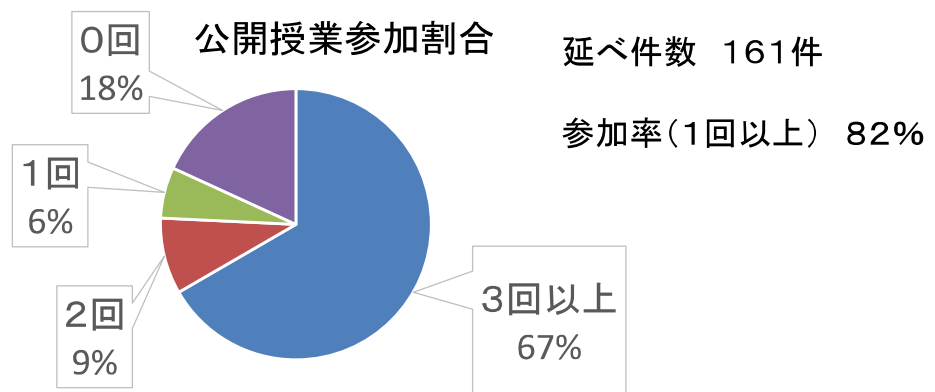
詳細版: 学生支援、支援体制について、キャリア支援、進路指導

Plan	Do	自己評価 A
令和3年度にキャリア支援室を設置する。 令和2年度はキャリア支援準備室として以下のことを実施する。 ・就職指導ガイドラインを作成する。 ・就職資料整理にアルバイトを雇用する。 ・現在のキャリア支援マップを作成する。	・就職指導ガイドラインを作成し、4年生担任に案内した。 ・就職資料整理のためのアルバイト雇用の体制を準備し、4年生担任に案内した。 ・キャリア支援マップを作成した。	
Check	Action	
・就職指導ガイドラインについては、就職活動が始まってからの活用となるので、来年度の7月頃にチェックを予定する。 ・就職資料整理のアルバイト雇用については、機能している。 ・キャリア支援マップについては、キャリア支援室で再度検討をする。	令和3年度設置のキャリア支援室において、今回の活動は継続して行う。 新たに、先進校の調査から、本校でのキャリア支援室のあり方を決定し、学生のキャリア支援に取り組む。	

12

1-2. 監事監査

② 相互授業参観の改善の必要性



詳細版: 管理運営、FD研修、教員相互の授業参観

Plan	Do
公開授業(教員相互による授業参観)を実施し、教員の授業力向上をはかる。	令和2年11月2日(月)～20日(金) 3週間で公開授業を実施した。
Check	Action
公開授業実施報告を校務連で行った。 延べ件数161件 公開授業アンケートを授業担当者へ送付した。 APチーム会議において公開授業の反省を行い、非常勤教員への案内等の不備を確認した。	令和3年度は、総務企画委員会で公開授業を計画、実施を行う。来年度は6月の実施を予定している。

自己評価

A

13

1-2. 監事監査

③ 退学率、留年率の改善

※認証評価からの指摘に対する改善にも対応
3の本校のミッションの教育の成果②にも対応

数値目標
前年度比から2割減

結果: R1前年度比
総数(退学・休学含む)
17.5%減
1～4年の単位不足
24%減

詳細版: 教育
本科の教育の成果



Plan	Do
・留年率・退学率の改善の方策 →昨年度からの留年対策の結果、H30からR1にかけて、留年者数は約2割減少していることから、当面、これまでの取り組み(低学年自学自習教育、低学年の数学補講、部活動の対外試合や体育祭応援団への参加に対し、成績(修得単位)により一定の規制をかけること、教員に対する積極的な再試験、再評価の呼びかけ)を継続する。 →今年度は、新たに体育祭(応援団)の参加に、一定の成績の基準を設けた。また、APチームと連携した積極的なFDの研修会を実施する。	・学修状況を把握するためのアンケート調査を実施した。(12月末)
Check	Action
・新型コロナウイルスの影響で、低学年自学自習教育と低学年の数学補講が実施できなかった。(今年度) ・アンケート結果は、全教員へ周知しており(12月末)、各教員は、その結果を踏まえ教育指導へ繋げている。(3月末)	今後、アンケート結果を分析し、今後の学習指導等へ活用していく。(3月末)

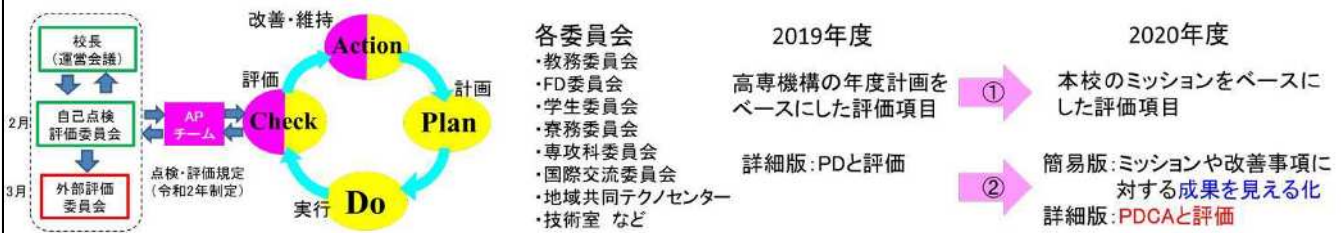
自己評価

A

14

1-3. 外部評価委員会

① PDCAに基づいた評価の必要性(数値目標、簡易版報告書)



詳細版:管理運営、自己点検・評価

Plan	Do
- 各外部評価の指摘事項を整理し、改善のための依頼事項を各部署に依頼。数値目標を掲げられるものは数値目標を依頼。 - 対応方針(P)、具体的な対応(D)、自己評価(C)、今後の課題(A)を各部署で自己評価。 - APチームでとりまとめ、自己点検評価委員会、外部評価委員会を受審する。	- 各外部評価の指摘事項をAPチームの外部評価担当メンバーで整理した。 9月9日の教職員会議にて改善のための依頼事項を各部署に依頼した。 - 各部署はPDCAを自己点検評価した。 - 各部署の自己評価をAPチームでとりまとめ、2月17日に自己点検評価委員会を開催した。
Check	Action
- これまで年度計画に基づいた自己点検評価項目をミッションベースに変更し、各部署でPDCAを自己点検評価できる体制とした。 - 各部署の自己点検評価を自己点検・評価委員会で審議することで、PDCAサイクルの構築を行った。 - また、外部評価委員会の様式を総括、簡易版、詳細に区別し、成果がわかりやすい様式とした。	- 令和2年度はAPチームで行った活動を今後、総務企画委員会で継続し、本格化させていく必要。 - また、令和2年度の外部評価委員会で指摘されたことについて対応する。

自己評価
S

15

1-3. 外部評価委員会

② イノベーション人材育成への取組について

1年生混合クラスとは

※2-1 地域における「魅力ある高専」にも対応

1年1組	1年2組	1年3組	1年4組	1年5組
機械 8名 電気電子 8名 電子制御 8名 情報 8名 都市環境デザイン 8名	機械 8名 電気電子 8名 電子制御 8名 情報 8名 都市環境デザイン 8名	機械 8名 電気電子 8名 電子制御 8名 情報 8名 都市環境デザイン 8名	機械 8名 電気電子 8名 電子制御 8名 情報 8名 都市環境デザイン 8名	機械 8名 電気電子 8名 電子制御 8名 情報 8名 都市環境デザイン 8名

一般科目 共通教育の実施 (共通試験, 共通再評価, 共通再試験)

専門科目 共通実験, PBL, リテラシー科目 + 専門科目

※共通実験では5学科の実験をすべての1年生が行う。

詳細版:管理運営、自己点検・評価、魅力ある鹿児島高専の取組

Plan	Do
令和4年度からの1年生混合クラスを実施し、鹿児島高専の教育の特徴とともに、新入生に対して新たな教育を展開する。広く工学に興味を持ってもらうことで、イノベーション人材の育成を検討する。	APチーム会議で、令和4年度からの1年生混合クラス実施に対する答申案を作成し、校長へ答申した。その後の運営会議において答申案が了承され、令和4年度からの1年生混合クラスが決定した。
Check	Action
令和4年度から1年生混合クラス実施についてのAPチームからの答申案の実施についてWGを設置し、調整する。	WGでの調整を経て、令和3年度では、令和4年度からの1年生混合クラス実施に向けてカリキュラム改定を教務委員会で行う。また、1年生混合クラスの実施に向けて、総務企画委員会において継続して検討を重ねる。

自己評価
A

16

1-3. 外部評価委員会

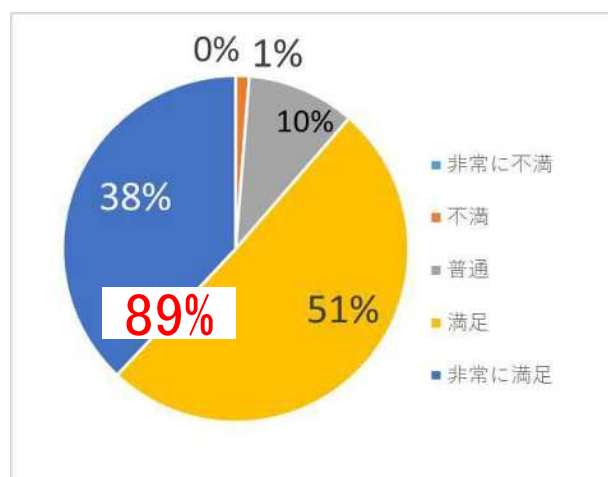
③ 企業に対する満足度調査の実施と調査結果の検証について

認証評価でのアンケート結果で自己点検・評価

平成28、29年度の就職企業先に送付

送付数 企業:159通、 回答数:108通(回答率67.9%)

本科卒業生の仕事に対する評価



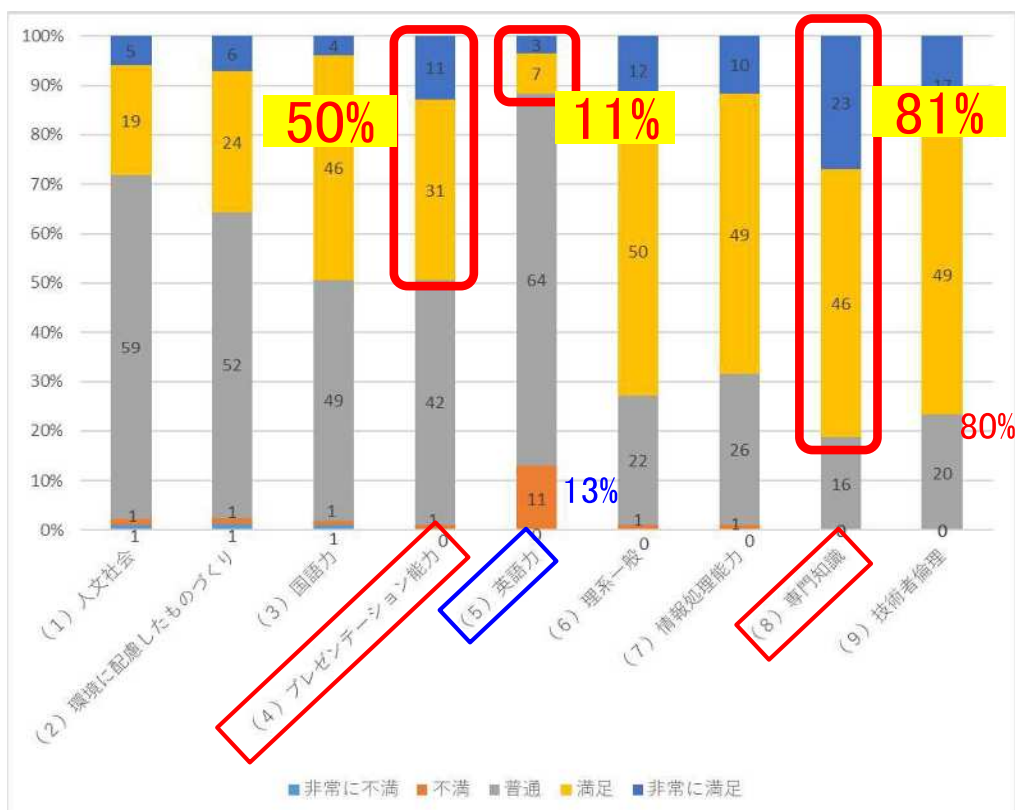
本科卒業生の採用希望



17

卒業生アンケート結果の分析

Q:貴社に在籍している卒業生の知識・能力についてお答えください。



18

③ 企業に対する満足度調査の実施と調査結果の検証について

詳細版: 管理運営、自己点検・評価

Plan	Do	自己 評価 A
R1年度の認証評価受審対応として、H30年度に実施した企業へのアンケート結果をもとに、本校の教育に対する企業の満足度調査を再検証する。	APチームにおいて、企業へのアンケート結果の検証を行った。	
Check	Action	
本科卒業生の仕事に対する評価は89%が満足という結果であった。一方、プレゼンテーションに関しては約50%、英語に関しては、11%が満足という結果で、特に英語の満足度が低いことがわかった。2年前のアンケート結果を基にした検証ではあるが、企業の評価を再検証できた。	今後、グローバル教育の取組を充実させていく必要がある。 また、企業へのアンケートを行う時期をどのスパンで定め、実施していくのかを検討する必要がある。自己点検・評価規定にも追記する必要がある。今後、グローバル教育の取組を充実させていく必要がある。	

19

※1 外部評価委員会からのご提言②のイノベーション人材育成
※2 本校のミッションの社会連携の取組にも一部対応

2. 将来ビジョンの策定と**具体策**の検討

2-1. 地域における『魅力ある高専』の実現

⇒ 1年次の**混合クラス**による共通実験、PBL教育

2-2. 社会的課題を解決し、新たな価値を創出する教育・研究機関の実現

⇒ NECと協力し、機能的な顔認証システムの構築

2-3. 地域創生への貢献

⇒ 長島町を実証実験の場として地域の活性化

20

2-1. 地域における『魅力ある高専』の実現

※外部評価委員会からの指摘③イノベーション人材育成の対応にも該当

1年生混合クラスとは

1年1組	1年2組	1年3組	1年4組	1年5組
機械 8名 電気電子 8名 電子制御 8名 情報 8名 都市環境デザイン 8名	機械 8名 電気電子 8名 電子制御 8名 情報 8名 都市環境デザイン 8名	機械 8名 電気電子 8名 電子制御 8名 情報 8名 都市環境デザイン 8名	機械 8名 電気電子 8名 電子制御 8名 情報 8名 都市環境デザイン 8名	機械 8名 電気電子 8名 電子制御 8名 情報 8名 都市環境デザイン 8名

一般科目 共通教育の実施（共通試験、共通再評価、共通再試験）

専門科目 共通実験、PBL、リテラシー科目 + 専門科目

※共通実験では5学科の実験をすべての1年生が行う。

詳細版：管理運営、自己点検・評価、魅力ある鹿児島高専の取組

Plan	Do
令和4年度からの1年生混合クラスを実施し、鹿児島高専の教育の特徴とするとともに、新入生に対して新たな教育を展開する。広く工学に興味を持ってもらうことで、イノベーション人材の育成を検討する。	APチーム会議で、令和4年度からの1年生混合クラス実施に対する答申案を作成し、校長へ答申した。その後の運営会議において答申案が了承され、令和4年度からの1年生混合クラスが決定した。
Check	Action
令和4年度から1年生混合クラス実施についてのAPチームからの答申案の実施についてWGを設置し、調整する。	WGでの調整を経て、令和3年度では、令和4年度からの1年生混合クラス実施に向けてカリキュラム改定を教務委員会で行う。また、1年生混合クラスの実施に向けて、総務企画委員会において継続して検討を重ねる。

自己評価

A

21

2-2. 社会的課題を解決し、新たな価値を創出する教育・研究機関の実現

※本校のミッションに関する取組の社会連携にも対応

NECと協力し、機能的な顔認証システムの構築



NECとの連携協定締結(10月)



図書館および女子寮での実証実験開始(2月)

詳細版：社会連携、企業との連携

Plan	Do
・NECとの連携状況 →NECとの包括連携協定を締結した。 →顔認証の実証実験や、霧島市とNECと高専の地域共創事業も計画当中である。	・毎週TV会議でアプリケーション開発について検討を重ね、2月から図書館と女子寮において、顔認証の実証実験を開始する。
Check	Action
・実証実験について、新型コロナウイルスの影響もあったが、予定通り試験運用を開始することができた。 ・試験運用期間は、年度当初の予定より短くなった。	4月以降、本格的な実証実験を実施する予定である。

自己評価

A

22

2-3. 地域創生への貢献

※本校のミッションに関する取組の社会連携にも対応

長島町を実証実験の場として地域の活性化

1. ミカンの収穫

A班: 剪定・収穫用カッター

D班: 電動アシストシステムの開発

2. ジャガイモの収穫

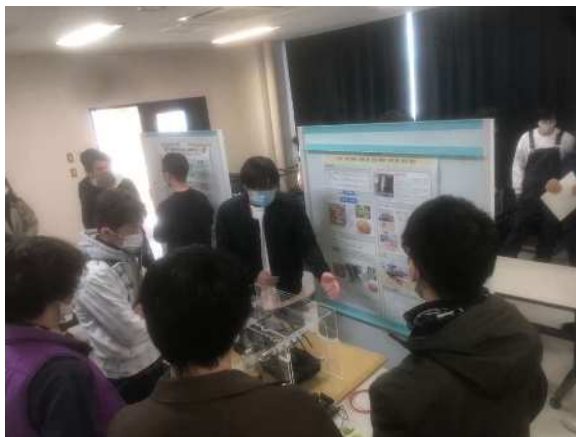
B班: 自動追尾ロボットの小型化

E班: 芋と茎の分別機

3. 水稻栽培

C班: 水田における自動追肥機

F班: 水門つまらないシステム



詳細版: 教育、専攻科の教育の成果

Plan	Do
・環境創造プロジェクトの取組 →各専攻の学生が分野を横断して複数のグループを作り、長島町の地域課題を抽出し、ものづくりを通して課題解決を目指す。本取り組みは単年度で終わらせるのではなく、継続的に実施する。成果を長島町サテライトキャンパスで発表し、発表者と参加者で情報交換を行い、問題点の改善に努め、次年度に繋げる。最終的にはパイロットスケールの試作品を作成する。	・昨年度までの課題については、単年度で終わらせることなく引き続き実施した。 ・12月から3月にかけて、長島町へ調査を予定していたが、新型コロナウイルスの感染拡大状況を踏まえ、今年度の調査訪問は中止することとした。 ・2月10日に発表会を実施した。発表会には学内の教職員のみ9名の参加であった。
Check	Action
・(長島町での環境創造プロジェクトの取組は、)コロナ感染予防により、学外での活動を自粛しているため、学外での取組はできなかった。	・(長島町での環境創造プロジェクトの取組は、)次年度以降実施検討を行う。

自己評価

B

23

3. ミッションに関する取組

3-1 教育の成果

①入試倍率

②退学率・留年率

3-2 研究の成果

①特例認定教員率

②科研費申請・採択数

3-3 社会連携の成果

KTC事業

3-4 グローバル教育

国際交流プログラムの成果検証

3-5 学生支援

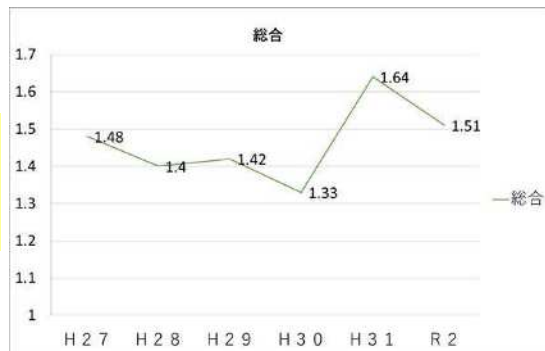
満足度等のアンケート

大項目	評価項目
教育の質の保証	学位授与方針
	本科の教育
	専攻科の教育
教育	本科の教育の成果
3-1	専攻科の教育の成果
研究	教員の研究業績
3-2	科研費と外部資金
社会連携	自治体等との連携
3-3	鹿児島高専テクノクラブ
グローバル教育	英語力向上の取り組み
3-4	海外インターンシップ
学生支援	支援体制
3-5	学生アンケート
管理運営	教育組織(自己点検・評価)
	FD研修、表彰、SD等

24

3-1. 教育の成果 ①入試倍率

志願者倍率の
数値目標
⇒1.5倍



詳細版:教育 本科の教育の成果

Plan	Do
入試倍率の把握(志願者倍率の1.5倍確保) 入試広報プロジェクトチームのメンバーによる広報活動 女子寮改修やロボギャルズの活躍をアピールし、女子学生の増加を図る。	本年度は、新型コロナウイルスの影響で、中学校での上級学校説明会なども、中止となった学校もあり、従来のような入試広報活動ができない面もあった。また、夏に実施している本校主催の一日体験入学も、残念ながら中止となった。その一方で、10月の学校説明会では、従来行っていなかった学科別の説明・見学を入れたり、本校HP上で、Web一日体験入学のコーナーを新設した他、googleと契約して、本校の内部をストリートビューの形で見られるようにするなど、新たな活動を増やし、中学生や保護者に積極的なPRを実施した。
Check	Action
新型コロナウイルスの影響で、非常に限られた範囲でのPR活動であったが、これまでにない新しい取り組みが出来た。その影響がどの程度反映したかは分からないが、当初の目標である1.5倍の入試倍率の確保ができ、 女子学生の志願者数も増加した 。県内の中学生人口が減少の一途をたどる中、昨年度の倍率を僅かではあるが上回ったことは、評価できる。	本年度は、県内の中学3年生の人口は減少していたものの、地元、始良・霧島地区は、昨年度よりは若干増加していたが、その地元の中学生も、来年度の中学校3年生人口は減少し、過去最低になるので、より積極的なPRを展開するとともに、HPの改修などで、より中学生・保護者の方にとって見やすいサイトを作っていく予定。

自己
評価

S

25

3-1. 教育の成果 ② 退学率、留年率の改善

※監事監査の1-2にも対応

1-2. 監事監査

数値目標
前年度比から2割減

結果: R1前年度比
総数(退学・休学含む)
17.5%減
1~4年の単位不足
24%減



詳細版:教育 本科の教育の成果

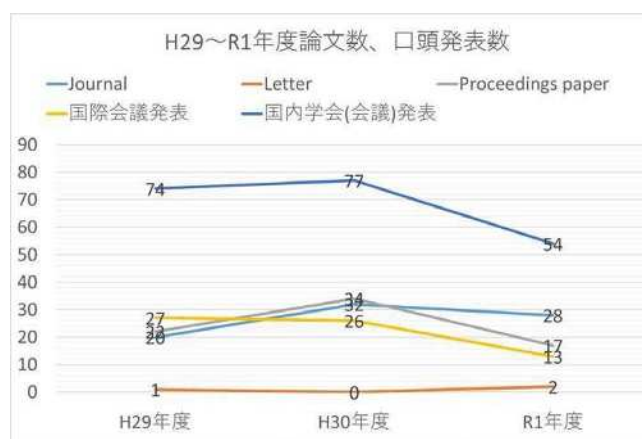
Plan	Do
・留年率・退学率の改善の方策 →昨年度からの留年対策の結果、H30からR1にかけて、留年者数は約2割減少していることから、当面、これまでの取り組み(低学年自学自習教育、低学年の数学補講、部活動の対外試合や体育祭応援団への参加に対し、成績(修得単位)により一定の規制をかけること、教員に対する積極的な再試験、再評価の呼びかけ)を継続する。 →今年度は、新たに体育祭(応援団)の参加に、一定の成績の基準を設けた。また、APTと連携した積極的なFDの研修会を実施する。	・学修状況を把握するためのアンケート調査を実施した。(12月末)
Check	Action
・新型コロナウイルスの影響で、低学年自学自習教育と低学年の数学補講が実施できなかった。(今年度) ・アンケート結果は、全教員へ周知しており(12月末)、各教員は、その結果を踏まえ教育指導へ繋げている。(3月末)	今後、アンケート結果を分析し、今後の学習指導等へ活用していく。(3月末)

自己
評価

A

26

3-2. 研究の成果 ①特例認定教員率＝特例認定教員数/専門教員数×100



詳細版: 研究、教員の研究業績について、特例適用教員数の向上

Plan	Do
・次回の特例適用専攻科の審査(2023年度)に向けて、46%程度の特例教員の割合を採用人事において研究力を備えた教員確保と若手教員(助教)の昇任により、60-70%程度まで向上させる。	・特例教員数の向上については、特例適用教員の申請時に、研究主事及び研究主事補でヒアリングを実施し、本人たちの意思を尊重しながら、申請書類の記入方法(業績の見せ方など)について、7名にアドバイス・指導を行った。
Check	Action
・特例教員数の向上については、申請した7名中、6名が承認された。特例認定教員率は58.1%となった。(今後の課題)また、特例審査は役職(教授、准教授)に応じ求められる実績が異なる(教授の場合、継続的な研究業績、研究指導実績、学生の口頭発表など)ため、研究実績の積み上げを行うよう支援していく。	・特例教員数の向上については、次年度以降も継続的にヒアリングを行っていく。 ・特に筆頭著者、責任著者としての論文執筆を増やすよう指導していく。このことは外部資金獲得にもつながり、学生の研究環境を充実させる。

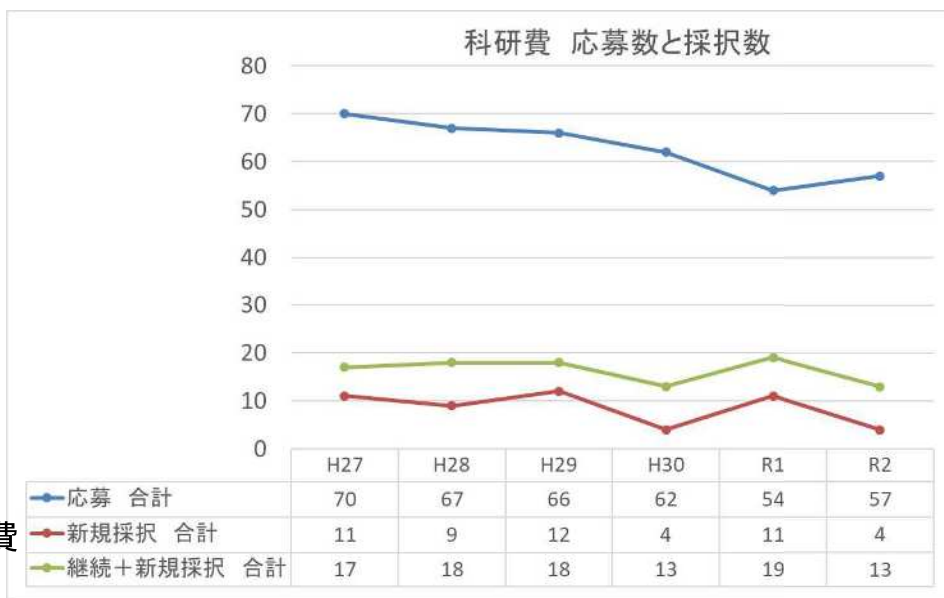
自己評価

A

27

3-2. 研究の成果

②科研費申請・採択数



詳細版: 研究、科研費と外部資金

Plan	Do
・学位取得時の研究テーマだけを推進するのではなく、自身で考え、オリジナルなテーマを発掘し、研究開発に努める。また、地域課題についての研究を推進することも必要となる。	・科研費採択率向上については、申請のアナウンスを徹底
Check	Action
・科研費は、申請のアナウンスを徹底し、申請数は54件から57件に向上した。一方、採択率は、11件から4件に減少した。	次年度以降申請のクオリティを精査し採択率の向上を行いたい。

自己評価

B

28

3-3. 社会連携の成果

①KTC事業

詳細版：社会連携、鹿児島高専テクノクラブ

Plan	Do
・KTC企業見学状況等のKTCIによるキャリア教育1年生にはKTC企業による特別講義、3年生にはKTC企業見学を例年行っているが、今年度は開催できないため、特別講義という形で代替を検討している。成果については講義の後のアンケートを実施する予定である。	・KTC企業による1年生へ特別講義、3年生への企業見学の代替として特別講義を以下のとおり実施した。 ・11月4日(3年M,E,S,I,C) ・12月9日(1年M,E,S,I,C) また、講義後はアンケートの実施・集計を行った。
Check	Action
・新型コロナウイルス禍、例年どおりの実施が困難であったため、Webを活用した新たな実施方法を検討し、感染・感染拡大防止を踏まえた形で実施することができた。また、本取り組みをきっかけに、講演された企業に興味を持った学生に対して個別の企業見学を行うことができた。	・今回のWebを活用した実績を活かし、来年度以降もそれぞれの場面に柔軟に対応しながら継続して事業を実施する。また、アンケート結果について分析し、次年度の実施に向けて事業内容等の改善を図る。

自己
評価

S

29

3-4. グローバル教育

①国際交流プログラムの成果検証

詳細版：グローバル教育、英語力向上の取り組みについて、NTI(スウェーデンの高校)との連携

Plan	Do
英語力の指標をTOEICスコアおよび英語でのプレゼンテーション力とし、以下の対応方針を策定する。 ・対応方針：NTI(スウェーデンの高校)との連携 (1)NTIストックホルム校(SWE)とのオンライン異文化交流の実施 (2)NTIストックホルム校(SWE)の講師によるワークショップ開催 →(1)、(2)ともに参加者に対し、アンケートによる満足度調査を行う。	【1】NTIストックホルム校との連携 (1)NTIストックホルム校とのオンライン異文化交流を実施した。 (2)NTIストックホルム校の講師によるワークショップ開催 新型コロナウイルスの影響により中止とし、代替として以下のプログラムを実施予定である。 ①English Presentations Workshop(学生対象) 日時：3月2日(火)～3月4日(木)の3日間(予定) ②鹿児島高専FDレクチャーシリーズ「英語力向上ワークショップ」(教職員対象) 日時は①と同様。
Check	Action
この取り組みの目標は、グローバルマインド育成や英語学習に関する学生のモチベーション向上である。 11月19日に実施した中間満足度評価では70%の学生が「満足」と回答している。「満足ではない」と回答した学生は、「ICT環境、インターネット接続の不調により、会話がうまくできなかった」、あるいは「伝えたいことを英語で表現することができなかった」等の理由である。したがって、オンライン異文化交流が目標達成のために効果的であることが確認できた。 同プログラムの参加者のTOEIC Bridge スコア(平均値)を補足資料1に示す。なお、本校の国際交流(グローバルマインド育成)の数値目標を「R04年度までに、本校在学学生のうちで1～3年次に国際交流関連プログラムに参加した人数を10%にする」としている。 補足資料2にH28～R02年度の本科1～3年生の国際交流関連プログラム参加人数推移(目標との比較)を示す。 補足資料3にH28～R02年度の高学年生の海外インターンシップ参加者数の推移を示す。	(1)新型コロナウイルスの状況にかかわらず、オンライン異文化交流は推進する価値がある。一方で、ビデオ会議システムの不調なども生じているため、円滑なコミュニケーションを実現するためのICT環境改善は必須である。さらに、NTIストックホルム校だけでなく、南京航空航天大学や台北科技大、ペトロナス工科大(UTP)、マレーシア国際工科院(MJIT)との交流プログラムを充実させる(オンラインも含む)。 (2)スウェーデンから講師を招へいするワークショップは、参加希望者も多く今後も継続する予定である。人の往来が難しい場合は、オンライン形式で開催する。時差やコロナの影響により日程調整が難しい場合は、オンデマンド形式なども検討する。

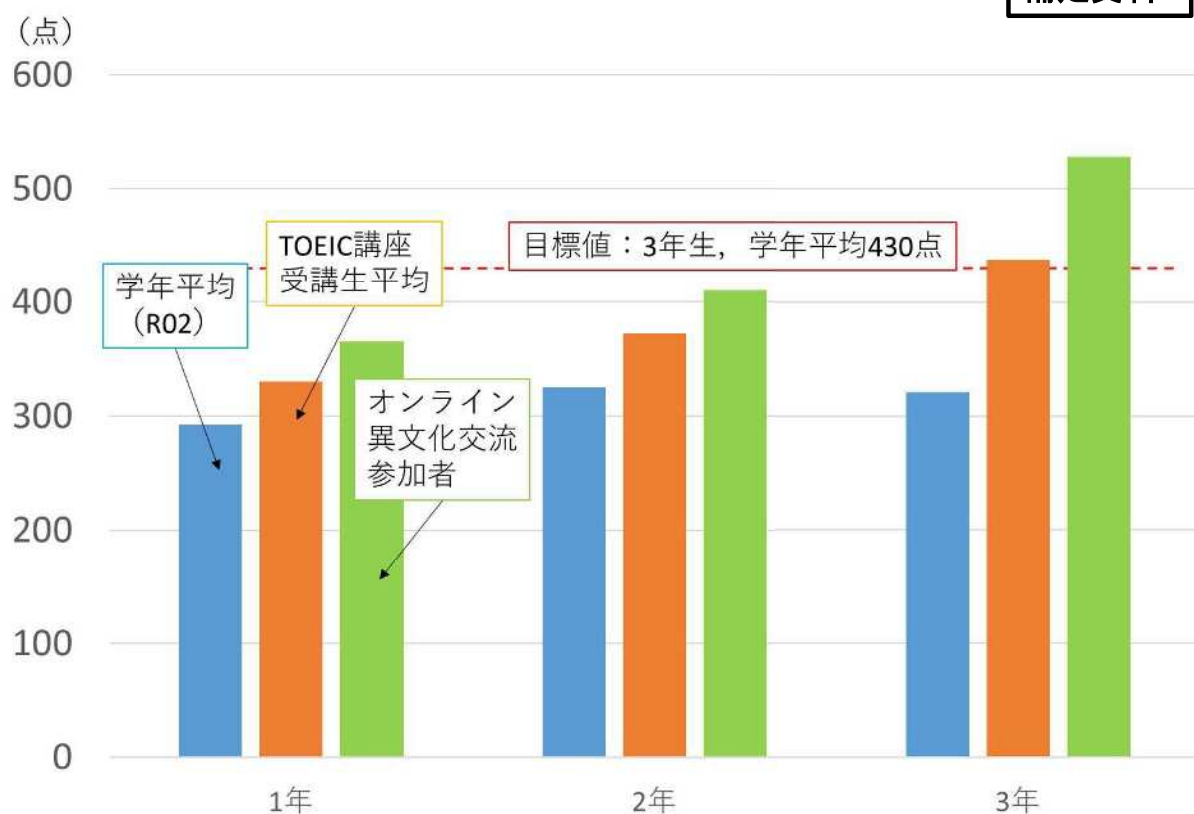
自己
評価

A

30

3-4. グローバル教育 ②TOEIC スコアによる国際交流プログラムの成果検証

補足資料1

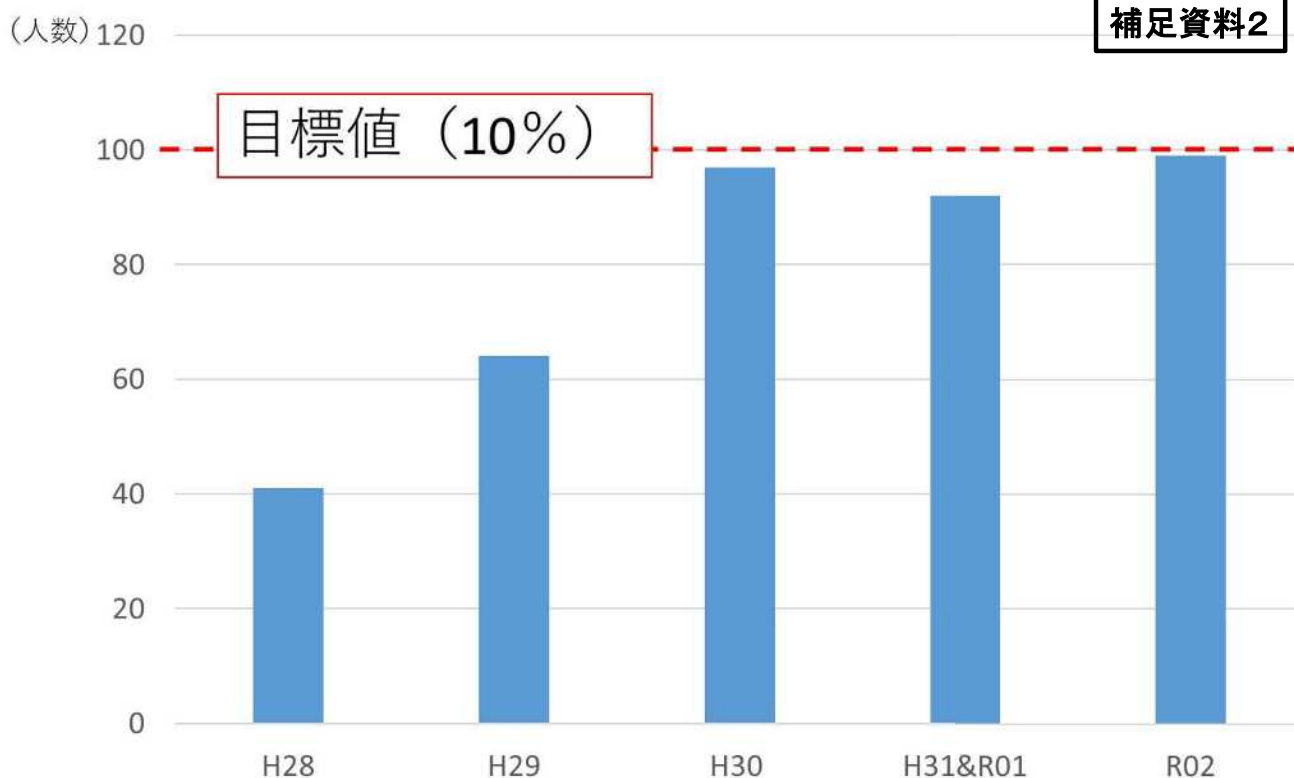


31

3-4. グローバル教育 ③低学年(1～3年次)における海外派遣者数

※R2はNITストックホルム校とのオンライン異文化交流参加者数含む

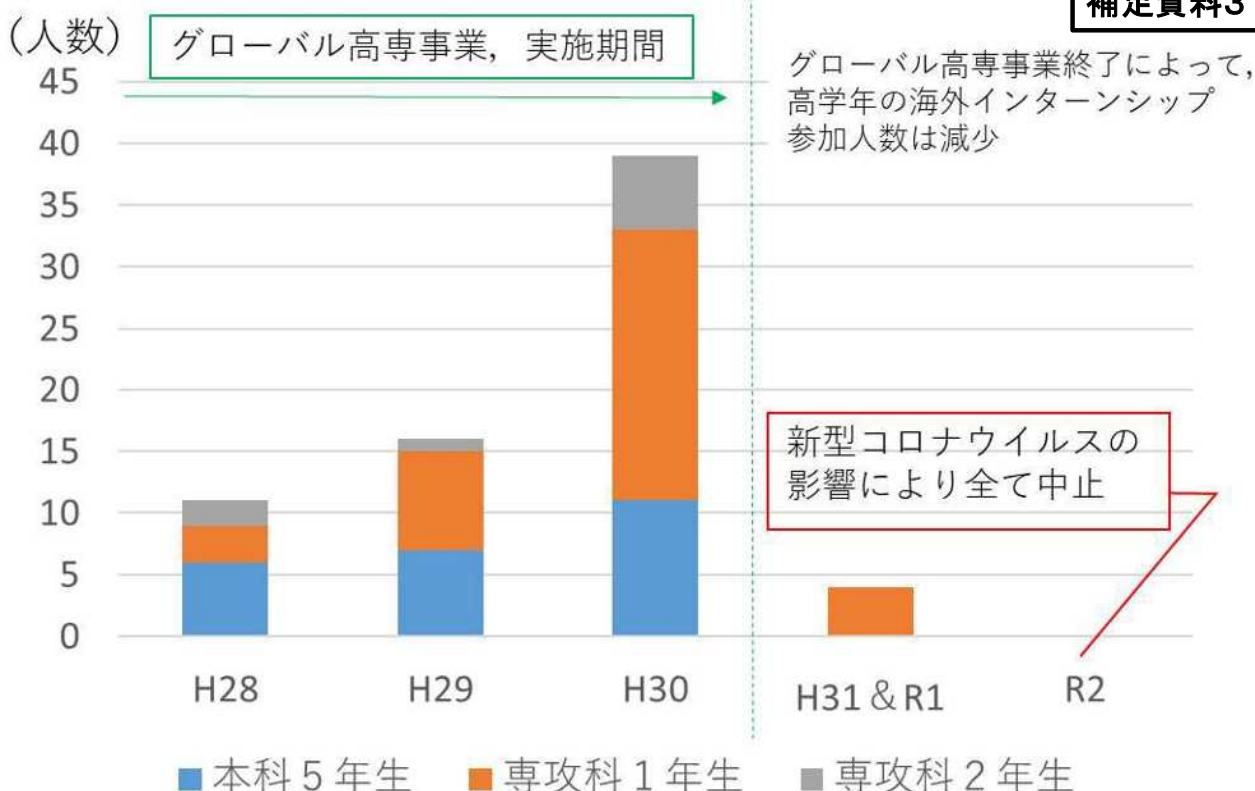
補足資料2



32

3-4. グローバル教育 ④高学年の海外インターンシップ参加者数の推移

補足資料3



33

3-5. 学生支援

※1-1-③認証評価の指摘No.9の項目と同じ

①満足度等のアンケート

No	認証評価の指摘事項(改善を要する点)	対応状況	自己評価
9	教育・生活環境の利用状況や満足度等を学校として把握し、改善するための体制の整備が十分とは言えない。	対応済み	A

詳細版: 学生支援、学生アンケート、在校生(追加:4年生以下)に対するアンケート(学生の多様なニーズの把握)

Plan	Do
7月に遠隔授業に関するアンケートを実施、10月に高専での学びの状況アンケートを実施した。	これまで、在学生に対してのニーズ調査を行ってなかったため、満足度調査アンケートを実施した。
Check	Action
学生委員会において、質問事項等を審議し、Microsoft365を活用した満足度調査アンケートを終業式までに全学生を対象に実施した。質問内容については、グローバルアクティブラーニングセンターとも協力し、図書館、ICT等についての項目も追加した。	質問事項については、今年度の回答状況等を鑑み、更新を行う予定である。初めてのニーズ調査となるため、学生からの要望に対して学校としてどのように対応すべきかを協議していく必要がある。

自己評価

A

卒業生(5年生)に対するアンケートについても対応済み

34

総括(1)

外部評価委員会からのご指摘への対応

	指摘事項	対応	自己評価
①	PDCAに基づいた評価の必要性	APチームにより自己点検・評価の確認を行うことでPDCAサイクルの構築を行った。	S
②	イノベーション人材育成への取組について	混合クラスの検討を行い、イノベーション人材育成の道筋を立てた。	A
③	企業に対する満足度調査の実施と調査結果の検証について	認証評価での企業アンケート結果を基にした検証を行った。その結果、専門知識に関しては高い評価を得ていることがわかった。一方、英語力向上については満足度が低いことがわかった。今後、グローバル教育の取組を充実させていく必要がある。	A

35

総括(2) 全体の取組

本年度は本校の教育研究活動および管理運営に関するPDCAサイクルいわゆる内部質保証システムのひな形を構築することができた。また、将来ビジョンの策定と具体策の検討を行い、本校の新たな教育の特色の道筋を立てることができた。

48項目すべての評価項目に対し、Sは5項目、Aは37項目、Bは6項目、Cは0項目であった。それぞれの項目に対するチェック、アクションについての検討もなされており、本校のPDCAサイクルは機能していると自己評価できる。

やや遅れている項目は長島町での取組や海外インターンシップなど、新型コロナウイルスの影響が大きかった。次年度は、新型コロナウイルスの対策を講じながら、本年度の体制をより本格化させ、さらなる改善を進めると同時に本校の強みを強化していく必要がある。

36

令和2年度 自己点検・評価報告書(詳細)

大項目	評価項目
1 教育の質の保証	1-1学位授与方針について
	1-2本科の教育について
	1-3専攻科の教育について
2 教育	2-1本科の教育の成果について
	2-2専攻科の教育の成果について
3 研究	3-1教員の研究業績について
	3-2科研費と外部資金について
4 社会連携	4-1自治体等との連携について
	4-2鹿児島高専テクノクラブ（KTC）について
	4-3企業との連携について
5 グローバル教育 （国際交流）	5-1英語力向上の取り組みについて
	5-2海外インターンシップについて
6 学生支援	6-1支援体制について
	6-2地域に根差した特色ある取り組みへの支援体制について
	6-3在校生学生アンケートについて
	6-4卒業生（5年生）学生アンケートについて
7 管理運営	7-1教育組織について
	7-2FD研修、表彰、SD等について
	7-3自己点検・評価

※【自己評価】のアルファベットは、S:特筆すべき進捗状況、 A:順調に進捗、 B:やや遅れている、 C：だいぶ遅れている である。

大項目	評価項目	状況改善、目標達成のための 取組事項	外部評価	【改善案】P(計画)	【対応】D（実際に行った活動）3月末分を含む。	【評価】C（評価）得られた成果および自己評価（SABCの理由）	【自己 評価】	【継続・改善】A継続する取り組みと今後の課題（改善）への対応方針	対応部署
1.教育の質の 保証	1-1 学位授与方針 について	・カリキュラムポリシーの見直し(本科)	機関別 認証評価	部署名：教務委員会、専攻科委員会 カリキュラムポリシーの見直し ・（本科）現在、高専機構の方針で、ディプロマポリシーの見直しを進めている。カリキュラムポリシーは、ディプロマポリシーが前提になるため、本年度はディプロマポリシーの見直しを終えて、その後（来年度）、カリキュラムポリシーの見直しを行う。	部署名：教務委員会、専攻科委員会 ・ディプロマポリシーについては、各学科へ原案を示し意見を聴取している。（12月末） ・今後、各学科の意見を整理し、新しいディプロマポリシーを確定させる予定である。（3月末）	・教務委員会、教務主事・主事補会議で議論を重ね、各学科のディプロマポリシー（共通フォーマット）を決め、このフォーマットへ各学科の色をつけて完成させる。	A	・カリキュラムポリシーについては、次年度、令和4年度導入予定の1年生混合学級を見据え、新しいディプロマポリシーに基づき検討する。	教務委員会 専攻科委員会 APチーム
		・社会状況、技術動向に応じた3つのポリシー ^{※1)} の見直し（定期的見直し）		部署名：専攻科委員会 カリキュラムポリシーの見直し ・（専攻科）昨年度見直しを行っており、今年度については変更は行わない。	・特になし。	・専攻科委員会で議論を重ね、次年度以降に本科の内容を踏まえ検討することとした。	A	・専攻科のディプロマポリシー、カリキュラムポリシーについては、今後、変更する必要があるかどうか、本科の内容を踏まえ専攻科委員会で検討する。	教務委員会 専攻科委員会 APチーム
	1-2 本科の教育について	・成績保管状況の把握	機関別 認証評価	部署名：教務委員会 ・成績保管状況の把握 →各教員が試験終了後2ヶ月以内に、成績管理データにアップしたかどうかをチェックシート（Forms） ^{※2)} 上で入力させ管理する。	部署名：教務委員会 ・今年度の成績保管については、学年末試験時に依頼し、卒業判定会議、進級判定会議で再度周知した上で、3月中に保管作業を終える予定である。保管作業完了後、Forms上で確認し未保管者へ催促を行っていく。（3月末）	・教務委員会、教務主事・主事補会議で議論を重ね、成績保管状況について、チェックシート（Forms）の提出を求めることとした。 ・3月末に教務委員会で成績保管状況を確認し、保管状況を確認し、督促を行っていく。	A	・次年度以降は、試験実施後2か月以内に成績保管資料が保管され、すぐに教務委員会で保管状況を確認できるシステムを構築していく。	教務委員会 APチーム 教務係
		・成績評価の妥当性の把握		部署名：教務委員会 ・成績評価の妥当性の把握 →シラバスに基づいた成績評価が行われているかどうか確認する。	部署名：教務委員会 ・成績評価の確認について、シラバスどおりに評価されているかどうかを教務委員会で確認する。確認方法は、教務委員によるランダム抽出検査（14科目）を予定している。（3月末）	・3月末に教務委員会で成績評価方法等について確認し、本校の状況を把握する。	A	・教員として基本的な部分であるため、指導を含め引き続き管理を強化していく。	教務委員会 APチーム 教務係
		・試験問題のレベル、繰り返し問題のチェックの把握		部署名：教務委員会 ・試験問題レベルの把握・繰り返し問題のチェック →科目担当者から、試験終了後にセルフチェックシートを提出させる。	部署名：教務委員会 ・試験問題の確認について、セルフチェックシートを作成し、後期中間試験から提出させている。（12月末） ・学年末試験についても同様にセルフチェックシートを提出させる。（3月末）	・教務委員会、教務主事・主事補会議で議論を重ね、セルフチェックシート（紙媒体）の提出を求めることとした。 ・3月末に教務委員会でセルフチェックシートを確認し、試験問題レベルについて確認する。	A	・教員として基本的な部分であるため、教務主事からの指導を含め引き続き管理を強化していく。	教務委員会 APチーム 教務係
		・学修単位の学修時間の把握		部署名：教務委員会 ・学修単位の学修時間の把握 →今年度は、教務主事会議で他校の情報を収集する。	部署名：教務委員会 ・学修単位の学修時間の把握については、教務主事会議（12月開催）で他高専の情報を聴取した。（12月末）その情報に基づき、教務委員会で検討する。（3月末）	・学修単位の学修時間の把握については、教務委員会、教務主事・主事補会議で議論を重ねることができておらず、現在は、各科目担当教員任せとなっている。	B	・学修単位の学修時間の把握について、教務委員会、教務主事・主事補会議で議論を重ね、対応方針等について検討していく。	教務委員会 APチーム 教務係
	1-3 専攻科の教育について	・試験問題のレベル、繰り返し問題のチェック	機関別 認証評価	部署名：専攻科委員会 ・試験問題レベルの把握・繰り返し問題のチェック →教務委員会で示されたセルフチェックシートを活用し、依頼項目について状況を把握する。	部署名：専攻科委員会 ・試験問題レベルの把握・繰り返し問題のチェックについては、教務委員会で示されたセルフチェックシートを活用し、後期末試験から実施する。	・教務委員会で示されたセルフチェックシート（紙媒体）を活用し、依頼項目について状況を把握する。	A	・教員として基本的な部分であるため、専攻科長からの指導を含め引き続き管理を強化していく。	専攻科委員会 APチーム 教務係
		・学修単位の学修時間の把握		部署名：専攻科委員会 ・学修単位の学修時間の把握 →次年度以降の実施を目標とし、検討を行う。	・特になし。	・専攻科委員会で議論を重ね、次年度以降の検討事項について整理することができた。	B	・学修単位の学修時間の把握については、講義第1週目に自学自習チェックシートを配布し、定期試験終了後、回収、確認する。試験においては講義で教授した内容に加え、自学自習が必要な発展的な設問を設け、学修時間のエビデンスとすることを検討する。	専攻科委員会 APチーム 教務係

※1) 3つのポリシー
ディプロマポリシー：「卒業認定・学位授与の方針」
カリキュラムポリシー：「教育課程編成・実施の方針」
アドミッションポリシー：「入学受入れの方針」
※2) Forms：Microsoftのアンケート作成・集計ツール

大項目	評価項目	状況改善、目標達成のための取組事項	外部評価	【改善案】P(計画)	【対応】D(実際に行った活動)3月末分を含む。	【評価】C(評価)得られた成果および自己評価(SABCの理由)	【自己評価】	【継続・改善】A継続する取り組みと今後の課題(改善)への対応方針	対応部署
2.教育	2-1 本科の教育の成果について	・留年率、退学率の改善の方策	機関別認証評価 監事監査	部署名：教務委員会 ・留年率・退学率の改善の方策 ー昨年度からの留年対策の結果、H30からR1にかけて、留年者数は約2割減少していることから、当面、これまでの取り組み(低学年自学自習教育、低学年の数学補講、部活動の対外試合や体育祭応援団への参加に対し、成績(修得単位)により一定の規制をかけること、教員に対する積極的な再試験、再評価の呼びかけ)を継続する。 ー数値目標としては、前年度比から2割減とする。 ー今年度は、新たに体育祭(応援団)の参加に、一定の成績の基準を設けた。また、APチームと連携した積極的なFD ^{※4)} の研修会を実施する。	部署名：教務委員会 ・学修状況を把握するためのアンケート調査を実施した。(12月末)	・新型コロナウイルスの影響で、低学年自学自習教育と低学年の数学補講が実施できなかった。(今年度) ・アンケート結果は、全教員へ周知しており(12月末)、各教員は、その結果を踏まえ教育指導へ繋げている。(3月末)	A	・今後、アンケート結果を分析し、今後の学習指導等へ活用していく。(3月末)	教務委員会 教務係
		・入試倍率の把握(確保)		部署名：入試広報プロジェクトチーム ・入試倍率の把握 ⇒志願者倍率の数値目標1.5倍 入試広報プロジェクトチームのメンバーによる広報活動 女子寮改修やロボギャルズの活躍をアピールし、女子学生の増加を図る。	部署名：入試広報プロジェクトチーム 本年度は、新型コロナウイルスの影響で、中学校での上級学校説明会なども、中止となった学校もあり、従来のような入試広報活動ができない面もあった。また、夏に実施している本校主催の一日体験入学も、残念ながら中止となった。その一方で、10月の学校説明会では、従来行っていなかった学科別の説明・見学を入れたり、本校HP上で、Web一日体験入学のコーナーを新設した他、googleと契約して、本校の内部をストリートビューの形で見られるようにするなど、新たな活動を増やし、中学生や保護者に積極的なPRを実施した。	新型コロナウイルスの影響で、非常に限られた範囲でのPR活動であったが、これまでにない新しい取り組みが出来た。その影響がどの程度反映したかは分からないが、当初の目標である1.5倍の入試倍率の確保ができ、女子学生の志願者数も増加した。県内の中学生人口が減少の一途をたどる中、昨年度の倍率を僅かではあるが上回ったことは、評価できる。	S	本年度は、県内の中学3年生の人口は減少していたものの、地元、始良・霧島地区は、昨年度よりは若干増加していたが、その地元の中学生も、来年度の中学校3年生人口は減少し、過去最低になるので、より積極的なPRを展開するとともに、HPの改修などで、より中学生・保護者の方にとって見やすいサイトを作っていく予定。	教務係
		・本科生の学外研究発表の推進、状況の把握		部署名：教務委員会 ー本科生の学外研究発表の把握は、年度末に教務委員を通して、各学科の参加状況を把握する。	部署名：教務委員会 ・学外研究発表の把握は、教務委員を通じて、各学科の参加状況を把握する。(3月末)	・教務委員会、教務主事・主事補会議で検討し、学外研究発表の把握について年度末に各学科の教務委員が把握することとした。	A	・特になし。	教務委員会 教務係
	2-2 専攻科の教育の成果について	・環境創造プロジェクトの取組、環境創造教育プロジェクトでの長島町関連取組の継続	機関別認証評価	部署名：専攻科委員会 ・環境創造プロジェクトの取組 ー各専攻の学生が分野を横断して複数のグループを作り、長島町の地域課題を抽出し、ものづくりを通して課題解決を目指す。本取り組みは単年度で終わらせるのではなく、継続的に実施する。成果を長島町サテライトキャンパスで発表し、発表者と参加者で情報交換を行い、問題点の改善に努め、次年度に繋げる。最終的にはパイロットスケール ^{※1)} の試作品を作成する。	部署名：専攻科委員会 ・昨年度までの課題については、単年度で終わらせることなく、引き続き実施した。 ・12月から3月にかけて、長島町へ調査を予定していたが、新型コロナウイルスの感染拡大状況を踏まえ、今年度の調査訪問は中止することとした。	・(長島町での環境創造プロジェクトの取組は、)新型コロナウイルス感染対策により、学外での活動を自粛しているため、取組は活動できなかった。 ・2月10日に発表会を実施した。発表会には学内の教職員のみ9名の参加であった。	B	・(長島町での環境創造プロジェクトの取組は、)次年度以降に実施検討を行う。	専攻科委員会 教務係
		・定員充足率、達成度の把握、満足度の把握、専攻科修了率の把握、学位取得率の把握、プログラム修了率等の把握		部署名：専攻科委員会 ー状況把握のための事項について、毎年、データを整理する。	部署名：専攻科委員会 ・例年のとおり、データ整理は行った。専攻科修了率・学位取得率についても今年度から整理した。	今年度においても、状況確認を行うことができた。	A	次年度以降も引き続き行っていく。	専攻科委員会 教務係
		・専攻科生の学外研究発表の推進、状況の把握		部署名：専攻科委員会 ー学生の学外発表数を推進するためには、教員が独創的な研究を行い、科研費などの外部資金を獲得し、学生の研究環境を整備するとともに、学生に経済的負担をかけないように努める必要がある。	部署名：専攻科委員会 ・今年度は、コロナ禍で学外発表への参加が制限されたため、例年、学内で実施している「専攻科特別研究Ⅰ・Ⅱ進捗状況報告会」へ大学の教員を数名招き、学外発表に近い形で実施した。	・専攻科委員会で議論を重ね、いい形で「専攻科特別研究Ⅰ・Ⅱ進捗状況報告会」を実施することができた。	A	・次年度以降もコロナ禍の状況を踏まえ、実施形態等について検討していく。	専攻科委員会 教務係

※¹⁾パイロットスケール：工場を建てる一歩手前ぐらいの規模の設備をパイロットプラント、ということが多いのですが、そのパイロットプラントを使った実験をパイロットスケール実験と呼ぶことがあります。

資料1-3 自己点検・評価報告書(詳細版)

大項目	評価項目	状況改善、目標達成のための取組事項	外部評価	【改善案】P(計画)	【対応】D（実際に行った活動）3月末分を含む。	【評価】C（評価）得られた成果および自己評価（SABCの理由）	【自己評価】	【継続・改善】A継続する取り組みと今後の課題（改善）への対応方針	対応部署
3.研究	3-1 教員の研究業績について	・第5ブロック ^{※1)} の共通目標達成のための取組	特例認定 教員審査 第五ブ ロック研 究推進 ボード会 議	部署名：研究主事 ・第5ブロックの共通目標達成のための取組 一次年度以降に以下の取り組みを行う。 ・第5ブロックの共通目標について、関係会議体において、周知を行う。第5ブロックの共通目標達成者数をチェックし、目標未達成者については今後3年間の研究計画書（論文投稿計画書）の提出を求める。その後、研究主事、主事補でヒアリングを実施し、目標達成に向けた支援策を検討する。	部署名：研究主事 今年度は、第5ブロックの共通目標について、関係会議体において、周知を行った。	各教員が目標を認知しており、次年度以降の取り組みの土台作りができた。	B	・第5ブロックの共通目標達成者数をチェックし、目標未達成者については今後3年間の研究計画書（論文投稿計画書）の提出を求める。	専攻科委員会 企画係（人事係）
		・特例適用教員 ^{※2)} 数の向上		部署名：研究主事 ・特例教員数の向上 一次年度以降に以下の取り組みを行う。 ・次回の特例適用専攻科 ^{※3)} の審査（2023年度）に向けて、46％程度の特例教員の割合を採用人事において研究力を備えた教員確保と若手教員（助教）の昇任により、60-70％程度まで向上させる。 ・研究活動を大学教員に頼っている教員が多く、自立できていない。論文執筆において、筆頭著者、責任著者の論文が少ない。役職（教授、准教授、講師、助教）に応じた研究力（研究業績と外部資金獲得）をチェックするシートを作成し、現時点で特例教員についても役職相当の業績のない教員については自立してもらうための研究計画書（論文投稿計画書）の提出を求める。このことは外部資金獲得にもつながる。	部署名：研究主事 ・特例教員数の向上については、特例適用教員の申請時に、研究主事及び研究主事補でヒアリングを実施し、本人たちの意思を尊重しながら、申請書類の記入方法（業績の見せ方など）について、7名にアドバイス・指導を行った。	・特例教員数の向上については、申請した7名中、6名が承認された。 結果として、特例認定教員率は58.1%となった。 （今後の課題）また、特例審査は役職（教授、准教授）に応じ求められる実績が異なる（教授の場合、継続的な研究業績、研究指導実績、学生の口頭発表など）ため、研究実績の積み上げを行うよう支援していく。	A	・特例教員数の向上については、次年度以降も継続的にヒアリングを行っていく。 ・特に筆頭著者、責任著者としての論文執筆を増やすよう指導していく。このことは外部資金獲得にもつながり、学生の研究環境を充実させる。	専攻科委員会 企画係（人事係）
	3-2 科研費と外部資金について	・科研費採択率向上	第五ブ ロック研 究推進 ボード会 議	部署名：研究主事 ・学位取得時の研究テーマだけを推進するのではなく、自身で考え、オリジナルなテーマを発掘し、研究開発に努める。また、地域課題についての研究を推進することも必要となる。	部署名：研究主事 ・科研費採択率向上については、申請のアナウンスを徹底	・科研費は、申請のアナウンスを徹底し、申請数は54件から57件に向上した。 ・一方、採択率は、11件から4件に減少した。	B	次年度以降申請のクオリティを精査し採択率の向上を行いたい。	研究・知財委員会 企画係（人事係）

※1) 第5ブロック：全国高専を5つのブロックに分けたもので、九州沖縄地区高専は、第5ブロックに所属する。

※2) 特例適用教員：専攻科の特別研究を受け持つことができる教員

※3) 特例適用専攻科：特例適用専攻科とは、認定専攻科のうち学位の授与の審査の特例の認定を受けた専攻科のこと。

※4) FD：ファカルティ・ディベロップメント大学教員の教育能力、資質の向上のための組織的取り組みのこと。

SD：スタッフ・ディベロップメント は、特に日本の大学において「教育研究活動等の適切かつ効果的な運営を図るため」、事務職員、技術職員、教員を含むすべての職員を対象に、「必要な知識及び技能を習得させ、並びにその能力及び資質を向上させるための研修の機会」を提供するなどの取り組み

大項目	評価項目	状況改善、目標達成のための取組事項	外部評価	【改善案】P(計画)	【対応】D（実際に行った活動）3月末分を含む。	【評価】C（評価）得られた成果および自己評価（SABCの理由）	【自己評価】	【継続・改善】A継続する取り組みと今後の課題（改善）への対応方針	対応部署
4.社会連携	4-1 自治体等との連携について	・教育における自治体との連携	機関別認証評価	部署名：教務委員会 ・自治体等との連携 →霧島市との連携については、現在、NECとの三者で地域共創の事業計画が進行中である。	部署名：教務委員会 ・NECと本校の2者間で会議（Zoom）を実施し、検討を重ねている。	・コロナ禍の状況ではあったが、Zoomを活用し会議を重ねることができた。	A	・NECとの三者で地域共創の事業計画については次年度以降霧島市へ相談ができるように準備を進めている。	地域共同テクノセンター 企画係 教務委員会 教務係
		・技術士会との共同教育		部署名：教務委員会 →技術士会との共同教育は、引き続き継続していく。	部署名：教務委員会 ・技術士会との共同教育は、2年生（11月）と、4年生（12月から2月）を対象に実施した。	・コロナ禍の状況ではあったが、例年通り技術士会との共同教育を実施することができた。	A	・特になし。	地域共同テクノセンター 企画係 教務委員会 教務係
		・霧島市、日置市との連携		部署名：地域共同テクノセンター ・霧島市の主催で例年開催される企業説明会に協力を行う。今年度の開催については協議を行う。 ・日置市の主催で例年開催される「企業の魅力説明会」、「異業種交流懇話会総会」等に今年度も参加予定である。	部署名：地域共同テクノセンター ・霧島市主催で例年開催される企業説明会について、10月5日に今後の方針について打ち合わせを行った。 ・日置市主催で開催される「企業の魅力説明会（6月30日）」、「異業種交流懇話会総会（7月1日）」に参加した。	・霧島市との打ち合わせにおいて、霧島市主催で開催される企業説明会に関して、協働で実施できる部分等について意見交換を行い、相互の協力体制を明確にすることができた。 ・日置市主催の各事業へ参加し、日置市の学校及び企業関係者等と意見交換を行うことで、日置市の将来ビジョンや日置市地域の企業が抱える課題等について情報収集することができた。	A	・今後も継続して霧島市、日置市と協力し各事業を行い、地方創生に繋がる活動を行っていく。	地域共同テクノセンター 企画係 教務委員会 教務係
		・委員等による自治体との連携		部署名：地域共同テクノセンター ・各自治体主催の委員会に委員として参加する。	部署名：地域共同テクノセンター ・各種外部委員会に委員として参加した。 ・霧島市ふるさと創生有識者会議 ・かごしま製造業振興懇話会 ・かごしま産業技術賞審査会 等	・鹿児島県をはじめ各自治体等から依頼のあった各種外部委員会について、全て参加することができた。参加することで学識的な知見を提供するとともに、地方自治体の課題や課題解決に向けた取り組み等について理解することができた。	A	・今後も継続して各外部委員会に参加し、「地域に根差した鹿児島高専」を情報発信していく。	地域共同テクノセンター 企画係 教務委員会 教務係
		・キャリア教育における自治体との連携		部署名：地域共同テクノセンター ・地方創生特別講義として霧島市、日置市に2年生に対して特別講義を行っていただく予定である。	部署名：地域共同テクノセンター ・地方創生特別講義として以下のとおり実施した。 ・11月18日霧島市（2年S、I、C）※1 ・12月23日日置市（2年M、E）	・新型コロナウイルス渦、例年どおりの実施が困難であったため、Webを活用した新たな実施方法を検討し、感染・感染拡大防止を踏まえた形で実施することができた。今後、様々なケースで同様の実施方法で対応できることが確認できた。	S	・今回のWebを活用した実績を活かし、来年度以降もそれぞれの場面に柔軟に対応しながら継続して事業を実施する。また、アンケート結果について分析し、次年度の実施に向けて事業内容等の改善を図る。	地域共同テクノセンター 企画係 教務委員会 教務係
	4-2 鹿児島高専テクノクラブ（KTC）※2）について	・KTC企業見学状況等のKTCによるキャリア教育の状況、成果の把握	機関別認証評価	部署名：地域共同テクノセンター ・KTC企業見学等によるキャリア教育 1年生にはKTC企業による特別講義、3年生にはKTC企業見学を例年行っているが、今年度は開催できないため、特別講義という形で代替を検討している。成果については講義の後のアンケートを実施する予定である。	部署名：地域共同テクノセンター ・KTC企業による1年生へ特別講義、3年生への企業見学の代替として特別講義を以下のとおり実施した。 ・11月4日（3年M、E、S、I、C） ・12月9日（1年M、E、S、I、C） また、講義後はアンケートの実施・集計を行った。	・新型コロナウイルス渦、例年どおりの実施が困難であったため、Webを活用した新たな実施方法を検討し、感染・感染拡大防止を踏まえた形で実施することができた。また、本取り組みをきっかけに、講演された企業に興味を持った学生に対して個別の企業見学を行うことができた。	S	・今回のWebを活用した実績を活かし、来年度以降もそれぞれの場面に柔軟に対応しながら継続して事業を実施する。また、アンケート結果について分析し、次年度の実施に向けて事業内容等の改善を図る。	地域共同テクノセンター 各学科 企画係
		・共同研究状況の把握		部署名：企画係 ・共同研究については新規の共同研究契約があった際には校務連にて報告し、企画係にて一覧を作成する。	部署名：企画係 ・共同研究について校務連で報告を行い、一覧を作成している。	共同研究の受入れ実績について、毎月の校務連で報告を行うことができた。これにより、外部資金等の現状を確認することができた。	A	継続して報告を行う。	地域共同テクノセンター 各学科 企画係
		・KTC事業の把握		部署名：地域共同テクノセンター ・KTC事業の把握については、KTCの会長、副会長、テクノセンタースタッフにて会議を行う。事業の実施方法等についてはテクノセンタースタッフ会議にて協議を行う。	部署名：地域共同テクノセンター ・5月12日、7月30日、12月1日にKTC会長、副会長と会議を行った。事業の実施方法についてテクノセンタースタッフ会議を行い、12月末時点で19回開催している。	・KTCの各事業については、その都度会長、副会長及びテクノスタッフで協議し、会長・副会長の意向を汲みながら、新型コロナウイルス渦に対応して事業を実施することができた。	A	・今回のWebを活用した実績を活かし、来年度以降もそれぞれの場面に柔軟に対応しながら継続して事業を実施する。また、アンケート結果について分析し、次年度の実施に向けて事業内容等の改善を図る。	地域共同テクノセンター 企画係
	4-3 企業との連携について	・NECとの連携状況の把握	機関別認証評価	部署名：松田先生 ・NECとの連携状況 →NECと包括連携協定を締結した。 →顔認証の実証実験や、霧島市とNECと高専の地域共創事業も計画中である。	部署名：松田先生 ・毎週TV会議でアプリケーション開発について検討を重ね、2月から図書館と女子寮において、顔認証の実証実験を開始する。 ・参加学生からフィードバックアンケートを実施した。	・実証実験について、新型コロナウイルスの影響もあったが、予定通り試験運用を開始することができた。 ・試験運用期間は、年度当初の予定より短くなった。	A	4月以降、本格的な実証実験を実施する予定である。	松田先生 入江先生

※1）学科名
S：電子制御工学科
M：機械工学科
E：電気電子工学科
I：情報工学科
C：都市環境デザイン工学科

※2）鹿児島高専テクノクラブ（KTC）：南九州地域の有志企業が、地域との連携強化を学校の理念の一つに掲げている本校と相図って、活動している産学官交流組織である。

大項目	評価項目	状況改善、目標達成のための 取組事項	外部評価	【改善案】P(計画)	【対応】D（実際に行った活動）3月末分を含む。	【評価】C（評価）得られた成果および自己評価（SABCの理由）	【自己 評価】	【継続・改善】A継続する取り組みと今後の課題（改善）への対応方針	対応部署
	5-1 英語力向上の 取り組みについて	・NTI(スウェーデンの高校)との連携	監事監査 機関別認証評価	部署名：教務委員会、英語科、国際交流委員会、国際交流室 英語力の指標をTOEICスコアおよび英語でのプレゼンテーション力とし、以下の対応方針を策定する。 ・対応方針：NTI(スウェーデンの高校)との連携 (1)NTIストックホルム校(SWE)とのオンライン異文化交流の実施 (2)NTIストックホルム校(SWE)の講師によるワークショップ開催 ー(1)、(2)ともに参加者に対し、アンケートによる満足度調査を行う。 ＜成果の検証方法＞ ①12月末までに、参加者数を取りまとめる。 ②1月のTOEIC Bridgeで参加者と全体の成績を比較する。	部署名：教務委員会、英語科、国際交流委員会、国際交流室 【1】NTIストックホルム校との連携 （1）NTIストックホルム校とのオンライン異文化交流を以下のとおり実施した。 ・第1回、2020年5月28日（参加学生：本校12名、NTI校生21名）※5月27日にオリエンテーション実施。 ・第2回、2020年11月5日（参加学生：本校10名、NTI校生28名）※11月4日にオリエンテーション、グループミーティング実施。 ・第3回、2020年12月10日（参加学生：本校24名、NTI校生28名）※11月19日にグループミーティング実施。 第3回で本校の参加学生を対象にアンケートによる満足度調査を実施した結果、『おおきに満足している』・『いくらか満足している』と回答した参加学生は70%であった。 また、2021年1月21日には第4回開催を予定していたが、新型コロナウイルスの影響により、2月25日、3月25日に延期して実施予定である。 （2）NTIストックホルム校の講師によるワークショップ開催 新型コロナウイルスの影響により中止とし、代替として以下のプログラムを実施予定である。 ①English Presentations Workshop（学生対象） 日時：3月2日（火）～3月4日（木）の3日間（予定） ※90分×4回 1st 3月2日（火） 9：00～10：30 2nd 3月2日（火） 10：40～12：10 3rd 3月3日（水） 9：00～10：30 4th 3月4日（木） 9：00～10：30 ※別途、事前オリエンテーションを実施予定。 ②鹿児島高専FDレクチャーシリーズ「英語力向上ワークショップ」（教職員対象） 日時は①と同様。	（1）NTIストックホルム校との連携（A） この取り組みの目標は、グローバルマインド育成や英語学習に関する学生のモチベーション向上である。 継続的な取組とするために、複数回（5回／1年）のオンライン異文化交流を計画・実施した。また、教員と学生で定期的なグループミーティングを実施し、内容の充実を図った。11月19日に実施した中間満足度評価では70%の学生が「満足」と回答している。「満足ではない」と回答した学生は、「ICT環境、インターネット接続の不調により、会話がうまくできなかった」、あるいは「伝えたいことを英語で表現することができなかった」等の理由である。したがって、オンライン異文化交流が目標達成のために効果的であることが確認できた。 同プログラムの参加者のTOEIC Bridge スコア（平均値）を補足資料1に示す。 1年生全体の平均：292 2年生全体の平均：325 3年生全体の平均：321 1年生（NTIオンライン異文化交流参加者平均）：365 2年生（NTIオンライン異文化交流参加者平均）：410 3年生（NTIオンライン異文化交流参加者平均）：528 ※小数点以下は四捨五入。 なお、本校の国際交流（グローバルマインド育成）の数値目標を「R04年度までに、本校在学生のうちで1～3年次に国際交流関連プログラムに参加した人数を10%にする」としている。補足資料2にH27～R02年度の本科1～3年生の国際交流関連プログラム参加人数推移（目標との比較）を示す。 （2）ワークショップの開催（B） 外国人講師（NTIストックホルム校）と3D-コンピュータグラフィックをテーマとした遠隔ワークショップに関する準備を進めたが、新型コロナウイルスの影響により、本年度は実施できなかった。 代替として、国内企業（(株)アルク）の外国人講師によるオンライン英語プレゼンテーションワークショップを企画したところ、19名の学生の参加希望があった。また、同ワークショップを鹿児島高専FD・SD研修として、教職員に対しても実施する。	A	（1）新型コロナウイルスの状況にかかわらず、オンライン異文化交流は推進する価値がある。一方で、ビデオ会議システムの不調なども生じているため、円滑なコミュニケーションを実現するためのICT環境改善は必須である。 さらに、NTIストックホルム校だけでなく、南京航空航天大学や台北科技大、ペトロナス工科大（UTP）、マレーシア国際工科院（MJIIT）との交流プログラムを充実させる（オンラインも含む）。 （2）スウェーデンから講師を招へいするワークショップは、参加希望者も多く今後も継続する予定である。人の往来が難しい場合は、オンライン形式で開催する。時差やコロナの影響により日程調整が難しい場合は、オンデマンド形式なども検討する。	教務委員会 国際交流委員会 英語科 国際交流室

大項目	評価項目	状況改善、目標達成のための取組事項	外部評価	【改善案】P(計画)	【対応】D(実際に行った活動)3月末分を含む。	【評価】C(評価)得られた成果および自己評価(ＳＡＢＣの理由)	【自己評価】	【継続・改善】A継続する取り組みと今後の課題(改善)への対応方針	対応部署
5.グローバル教育(国際交流)		・取組に参加した学生のTOEIC等の点数の把握		部署名：教務委員会、英語科、国際交流委員会、国際交流室 ・対応方針：5年間の英語力の習得計画の策定 (1)1、2年生の希望者に対するTOEIC講座の実施 →受講スケジュールの管理や自習環境の提供、小テスト・模擬試験の実施、相談窓口の開設等を通じて全面的にサポートする。それらを通して、低学年次にTOEIC学習の習慣(自学自習)の基礎を作り、継続的学習に繋げる。 <成果の検証方法> ①12月末までに、TOEIC講座受講者数、模擬試験成績をとりまとめる。 ②1月のTOEIC Bridgeで講座受講者と全体の成績を比較する。 (2)英語によるプレゼンテーションに関する低学年対象の学習プログラム(英語キャンプ等)を実施し、NTIストックホルム校との連携プログラムや1年生のPBL科目等において、実際に英語プレゼンテーションをする機会を設ける。また、参加者向けにアンケートによる満足度調査を行う。	部署名：教務委員会、英語科、国際交流委員会、国際交流室 英語力向上の取り組み (1)希望者を対象に、e-learningによるTOEIC講座を実施した。 ・参加人数(前期：32名(うち1、2年生24名)、後期：102名(うち1、2年生74名)) ・学習支援(自学自習環境の提供)：2年生は水曜日4限、1年生は木曜日4限に学習支援のための学習会を開催した。 ・上記受講状況等についてはホームページやSNSなどを活用し、積極的に発信している。 ・2021年1月Toeic Bridgeテストで成績を比較した(補足資料1参照)。 ・4年生以上の学年については、授業内でe-learning教材を活用している。 (2)英語プレゼンテーション研修 ・機械工学科1年の授業において、オンライン英語プレゼンテーション研修を計画、実施した。 ・2020年12月24日にオリエンテーション兼接続テストを実施した。 ・Zoomを利用して、4人×11グループ、外国人講師によるプレゼンテーション研修を以下の日程で実施した。 第1回、2021年1月7日(9：20～10：40) 第2回、2021年1月7日(15：10～16：30) 第3回、2021年1月21日(9：20～10：40) 第4回、2021年1月28日(9：20～10：40) ・特別学修の単位についての取り扱いについて、教務委員会で検討している。 (3)学生の英語力向上およびペトロナス工科大学(マレーシア)の学生・教員との研究交流を目的として、ペトロナス工科大学と九州沖縄地区国立高等専門学校との合同国際シンポジウム『International Symposium on Innovative Engineering 2020 (ISIE2020)』を以下のとおり開催した。 ・日時：令和2年12月19日(土) 12：30～17：30 ・開催形式：オンライン開催 ・主管校：鹿児島高専 ・場所：ペトロナス工科大学・各高専(Microsoft Teams使用) ・学生発表件数：35件(ペトロナス工科大学20件、九州沖縄地区国立高等専門学校(本科4年生～専攻科2年生)15件) ・当日参加者：74名 ※ISIE Committee Member、Special Lecture、審査員、その他教職員、補助学生等含む。	(1)TOEIC講座受講者のTOEIC-Bridgeのスコア(平均値)は以下のとおりであった(補足資料1参照)。(A) 1年生(TOEIC講座参加者平均)：330 2年生(TOEIC講座参加者平均)：372 3年生(TOEIC講座参加者平均)：437 また、受講者対象のTOEIC講座アンケート(前期末)集計結果を補足資料3に示す。 TOEIC講座は一定の成果があり、アンケートの結果、学生の満足度も高かった。 (2)英語プレゼン研修(1M)：A 満足度調査：93%の学生が“非常に良い、良い”と回答しており、高い満足度が得られた。 Excellent(非常に良い)：15/42(名)(36%) Good(良い)：24/42(名)(57%) OK(普通)：2/42(名)(5%) Not very good(あまりよくない)：1/42(名)(2%) (3)『International Symposium on Innovative Engineering 2020 (ISIE2020)』(A) このシンポジウムを通して、第5ブロック高専の連携強化、国際化推進に貢献した。また、オンライン形式という、新しい国際交流の可能性を示した。さらに本校の国際化推進に一定の役割を果たした。 円滑なシンポジウム運営を実現するために、委員会を組織し、委員会打ち合わせや参加者オリエンテーションを入念に実施した。シンポジウム当日は、トラブルもなく、全日程を終了することができた。さらに本校学生のグローバルマインド育成を意図し、学生をスタッフ(司会進行、補助員)として活用した。 さらに、第5ブロックの国際交流推進WG(主査：鹿児島高専)において、ISIEの今後の方針を検討し、第5ブロックとして、このシンポジウムを継続すること、主担当校をローテーションすることを決定した。	A	(1)学生の学習意欲をいかにして高め、維持させるかが課題である。集合学習は、この課題改善に効果的であるため、集合学習のあり方を検討する。また、英語担当教員と協力して授業と連携し、TOEICや英検に対する取り組みを進める。 (2)英語プレゼンテーションのテクニック習得だけでなく、モチベーション向上にも効果的であったため、今後も継続してこのような研修を実施する。現在は、実施クラスを限定しているため、全校に波及させるために実施形式を検討する。 (3)第5ブロックの事業としてISIEを継続するために、改善点を整理し、次回担当校に引き継ぐ。	教務委員会 国際交流委員会 英語科 国際交流室
	5-2 海外インターンシップについて	・取組に参加した学生のTOEIC等の点数の把握	外部評価委員会	部署名：国際交流室 →海外インターンシップに参加した学生のTOEIC点数を把握し、今後は同学年の学生の平均スコアとの比較を行う。ただし、今年度においては新型コロナウイルスの影響により海外インターンシップが全て中止となったため、来年度以降の海外インターンシップの実施に向けて、プログラムの整備に取り組む。	部署名：教務委員会、国際交流委員会、国際交流室 ・2021年度以降の実施に向けて準備を進めている。	グローバル高専事業がH30に終了し、R1以降は海外インターンシップ参加者が少ない。特に令和2年度は、新型コロナウイルスの影響により実施することができなかった。 過年度の海外インターンシップ参加人数の推移については補足資料4のとおり。	B	2021年度以降の海外インターンシップの実施に向けて、プログラムの整備に取り組む。	教務委員会 国際交流委員会 国際交流室

大項目	評価項目	状況改善、目標達成のための取組事項	外部評価	【改善案】P(計画)	【対応】D（実際に行った活動）3月末分を含む。	【評価】C（評価）得られた成果および自己評価（SABCの理由）	【自己評価】	【継続・改善】A継続する取り組みと今後の課題（改善）への対応方針	対応部署
6.学生支援	6-1 支援体制について	・教育、生活環境の利用状況や満足度等を学校として把握し、改善するための体制の整備、学習環境（含ICT）の把握、留学生支援に対する把握、障害者支援に対する把握	機関別認証評価	部署名：教務委員会 ・学習環境（ICT含む） →前期に実施した遠隔授業アンケートで学生のICT環境および学習状況についてを統計的に把握することができた。後期には、遠隔授業補助金を活用し、学習環境（ICT含む）整備を進める。 →今年から学修状況の把握に関するアンケートを実施する。 →アンケート結果は、学生にもMoodle ^{※1)} 上で開示し、自分たちの状況を把握し問題意識をもってもらう。 ・留学生支援 →留学研究旅行の計画を進めていく。 ・障がい者支援 →高専機構の予算を活用し、教育・研究支援整備を進めていく。	部署名：教務委員会 ・10月に遠隔授業アンケートを実施し、結果について教務委員会で報告した。その後、全教員へ共有した。（12月末） ・10月に学修及び学校生活の状況の把握に関するアンケート実施し、結果について校務連で報告した。その後、全教員へ共有した。（12月末） 学生、保護者に対しては高専だよりを通して開示した。 ・11月に来日したマレーシア政府派遣留学生2名について、必要に応じてこれまでの遠隔授業に関する補講を実施してきた。本年度の単位については、原則、来年度までに確定させることとした。 ・障害学生支援経費を活用し、教育・研究支援整備を行った。（3月末）	・高専機構からの予算配分に基づき、遠隔授業、障がい学生支援の整備を進めることができた。 ・マレーシア政府派遣留学生2名について、教務委員会、教務主事・主事補会議で議論を重ね、留学生ファーストの対応方針を決めることができた。	A	・次年度から、今年整備した遠隔授業関係機器、障がい学生支援関係機器を活用していく。 ・マレーシア政府派遣留学生の学修状況等を把握し、成績評価を行う。	教務委員会 教務係
		・キャリア支援、進路指導の全学的取組推進（キャリア支援室設置）	監事監査 機関別認証評価	部署名：APチーム 令和3年度にキャリア支援室を設置し、キャリア支援について取り纏めと実施を行う。	部署名：APチーム 令和2年度はキャリア支援準備室として、就職指導のガイドラインの作成、就職指導担当者の支援のための就職整理アルバイト雇用を実施した。	就職指導のガイドラインの作成した。 就職指導担当者の支援のための就職整理アルバイト雇用を実施した。 本校のキャリア支援の内容について調査した。	A	令和3年度にキャリア支援室を設置し、キャリア支援について施策の取り纏めと実施を行う。	APチーム
		・いじめ対策研修の実施	監事監査 機関別認証評価	部署名：学生何でも相談室 10月に実施した高専生活アンケートにおいて、いじめに関する項目を追加した。11月11日に全本科生を対象としたいじめ防止対策講演会を実施予定である。	部署名：学生何でも相談室 10月に実施した高専生活アンケートにおいて、いじめの項目を追加し、いじめの実態把握を行うことができた。 いじめ対応については、関係規則等により組織的対応が求められているため今年度から立ち上がったいじめ対策委員会で一元化して対応し、案件の対応については、いじめ対策委員会で情報共有を行っている。	今年度から、機構いじめ防止計画等の関係規則の改正により、学内にいじめ対策委員会等の立ち上げ、学内関係規則の制定、11月11日にいじめ防止講演会の実施、いじめに対するアンケート調査等年間に対応すべき事項について、完了予定のため。	A	次年度についても、いじめ対策委員会を中心として年間計画を策定し、いじめ防止対策について計画的かつ多角的に対応を行う。	何でも相談室
	6-2 地域に根差した特色ある取り組みの推進と状況把握（吹奏楽演奏訪問、メカトロ部小学校訪問、隼人錦江スポーツクラブ、ロボギャルズ、各種コンテスト参加推進）	・地域に根差した特色ある取り組みの推進と状況把握（吹奏楽演奏訪問、メカトロ部小学校訪問、隼人錦江スポーツクラブ、ロボギャルズ、各種コンテスト参加推進）	(AP チーム)	部署名：学生委員会・学生係 各部等へ地域に根差した特色ある取り組み状況について、調査を行う予定。	部署名：学生委員会 12月各部等へ地域に根差した特色ある取り組みについて調査及び実施の推進依頼を行った。3月までには実施状況について、集計が完了する。	12月に調査を行い、1月の時点で課外活動においての地域に根差した取組について、把握ができ、各部等へ活動の推進を行った。	A	コロナウイルスの関係もあり、地域の方等を含めた外部との接触が難しくなっている。 状況を鑑みながら、後援会による支援等も含め積極的に支援を行う。	学生委員会 学生係
	6-3 在校生学生アンケートについて	・在校生（追加：4年生以下）に対するアンケート（学生の多様なニーズの把握）	機関別認証評価	部署名：学生委員会 ・在校生アンケート →7月に遠隔授業に関するアンケートを実施、10月に高専での学びの状況アンケートを実施した。	部署名：学生委員会 これまで、在学生に対してのニーズ調査を行っていなかったため、満足度調査アンケートを実施した。	学生委員会において、質問事項等を審議し、Microsoft365を活用した満足度調査アンケートを終業式までに全学生を対象に実施した。 質問内容については、グローバルアクティブラーニングセンターとも協力し、図書館、ICT等についての項目も追加した。	A	質問事項については、今年度の回答状況等を鑑み、更新を行う予定である。 初めてのニーズ調査となるため、学生からの要望に対して学校としてどのように対応すべきかを協議していく必要がある。	学生委員会 学生係
	6-4 卒業生（5年生）学生アンケートについて	・卒業生（5年生）に対するアンケート（達成度、満足度、授業業改善要望）	機関別認証評価	部署名：教務委員会 ・卒業生アンケート →2月に卒業生アンケートを実施する。 →実施方法については、Moodle上でアンケートを実施する。	部署名：教務委員会 ・学年末試験の答案返却期間を利用して実施する。（3月末）	・今回の卒業生アンケートでは、高専機構からの質問に本校の質問を追加させて実施する。	A	・アンケート結果を分析し、今後の学校運営に繋げていく。	教務委員会 教務係

※1) Moodle：個人向けの学習環境を作成するよう設計された学習プラットフォーム

大項目	評価項目	状況改善、目標達成のための取組事項	外部評価	【改善案】P(計画)	【対応】D(実際に行った活動)3月末分を含む。	【評価】C(評価)得られた成果および自己評価(SABCの理由)	【自己評価】	【継続・改善】A継続する取り組みと今後の課題(改善)への対応方針	対応部署
7.管理運営	7-1 教育組織について	・女性教員の増加のための取組、体制、組織、女性教員比率の把握	監事監査 機関別認証評価	部署名：校長、(総務課) 女性教員比率 機構全体：11.1% (令和元年度第3回校長・事務部長会議資料から) 本校：4.48%(令和2年11月1日現在) 機構全体の比率を目標値とし、引き続き教員の公募文にポジティブアクションを記載し、女性教員の増加を目指す。	部署名：校長、(総務課) 11月に行った教員公募において、公募分にポジティブアクション※1)を記載して公募した。	本年度の教員公募において、計31名の応募者中、女性応募者は1名であったが、採用には至らなかった。	A	今後も引き続きポジティブアクションを記載し、女性教員の増加を目指す。	運営会議 総務課
		・女子学生の増加のための取組、女子学生の比率等の把握	監事監査	部署名：教務委員会 ・女子学生の増加のための取組 →女子寮の改修、顔認証システムの導入など(セキュリティ面の強化、点呼業務の効率化等)、女子学生にとって魅力的な学寮を目指していく。 →学校説明会等を通じて、中学生や保護者へPR活動を強化していく。また、女子学生の活躍について積極的にPR活動を行っている。 部署名：寮務委員会 寮の状況としては、昨年度の第一志学寮改修(男子寮から女子寮へ)に伴い、女子寮の定員は旧女子寮(共用寄宿棟)の48名から103名に増えた。 また、令和2年度後学期の本科女子学生149名のうち女子寮生は73名(入寮率49%)であり、本科男子学生(872名のうち男子寮生は418名(入寮率47.9%))と同等の入寮率となっており、寮としては女子の入寮希望に込えている状況である。 今後、さらに女子寮生が増加した場合も、共用寄宿棟(定員48名)を女子寮として運用する等、柔軟に対応していく。	部署名：教務委員会 ・学校説明会(10月開催)では、「在校生の声」として女子学生数名が本校での学生生活等について説明を行った。(12月末) ・昨年度末に立ち上げた「受験生応援サイト」へ、女子学生の活躍状況をアップしたり、各コーナーで女子学生の写真を多く採用した。(12月末) ・学校説明会等の広報活動では、女性エンジニアの必要性について説明を行った。(12月末) 部署名：寮務委員会 対応方針に記載のとおり、女子寮の受け入れ態勢は整っている。寮生の健康管理および相談役として、今年度(令和2年11月)より女性の学寮指導員(寮母)を任用した。これにより、女子寮生の生活面で支援が拡充した。 顔認証システムを導入するについて本年度はこの設置に係る準備を進め、来年度当初より運用できる状態にしている。	・中学生向けパンフレットや、学校説明会、受験生応援サイト等で女子学生の活動状況を多く取り入れたことにより、女性生徒の出願が例年より増加した。(参考：前年度比：約2倍)	A	部署名：寮務委員会 女子寮生への防犯体制の向上と、点呼作業の効率化を目的として、来年度(令和3年4月)より顔認証システムを導入する。	教務委員会 学生委員会 寮務委員会 教務係 男女共同参画担当
	7-2 FD研修、表彰、SD等について	・教員相互の授業参観の改善	監事監査 機関別認証評価	部署名：APチーム ・令和2年11月に公開授業(教員相互による授業参観)を実施し、教員各位の授業力向上を図る。 ・鹿児島高専FDフォーラム、鹿児島高専FDレクチャーシリーズを行い、教員の教育力の質の向上を図る。 ①公開授業(教員相互による授業参観) 11月実施予定	部署名：APチーム 令和2年11月2日(月)～20日(金)の3週間で公開授業(教員相互による授業参観)を実施した。	期間中延べ161件の参観があった。 全体の参加率(1回以上の参観)82%。 公開授業アンケートを通じて、授業実施者にフィードバックを行った。	A	総務企画委員会で、令和3年度も実施する。 令和3年度は前期6月の実施を予定する 教員全員の授業参加を目指す。	APチーム
		・教育力の質の向上のための研修等		部署名：APチーム、国際交流担当 (1)第1回「ニューフェースセミナー」 ・日時 令和2年11月25日 15:30～16:50 ・実施の内容 ①「高専の現状、取り組み、教育の事例について」の説明 ②「授業の実施例」の紹介 ③フリートーク 参加者各位から疑問点等の質問、感想を受けた。 (2)鹿児島高専FDレクチャーシリーズ「英語力向上ワークショップ」 ・日時 1st 3月2日(火) 9:00～10:30 * 2nd 3月2日(火) 10:40～12:10 * 3rd 3月3日(水) 9:00～10:30 * 4th 3月4日(木) 9:00～10:30 * プレゼンテーションの基本構成(導入、本論、結論)について理解を深める。 * 英語プレゼンテーションにおいて役に立つ表現やテクニックを身につける。 * 英語プレゼンテーションの指導法について理解を深める。 (3)第2回「若手セミナー 仕事力ブラッシュアップ」 ・日時 令和3年3月3日 木曜 14:00～15:30 ・実施内容 ①「これからの高専に期待されること」 ②参加者の先生方からの5分間スピーチ(教育、研究、学校業務に関すること) ③将来の魅力ある鹿児島高専(意見交換)	部署名：APチーム、国際交流担当 (1)第1回「ニューフェースセミナー」 ・日時 令和2年11月25日 15:30～16:50 ・実施の内容 ①「高専の現状、取り組み、教育の事例について」の説明 ②「授業の実施例」の紹介 ③フリートーク 参加者各位から疑問点等の質問、感想を受けた。 (2)鹿児島高専FDレクチャーシリーズ「英語力向上ワークショップ」 ・日時 1st 3月2日(火) 9:00～10:30 * 2nd 3月2日(火) 10:40～12:10 * 3rd 3月3日(水) 9:00～10:30 * 4th 3月4日(木) 9:00～10:30 * プレゼンテーションの基本構成(導入、本論、結論)について理解を深める。 * 英語プレゼンテーションにおいて役に立つ表現やテクニックを身につける。 * 英語プレゼンテーションの指導法について理解を深める。 (3)第2回「若手セミナー 仕事力ブラッシュアップ」 ・日時 令和3年3月3日 木曜 14:00～15:30 ・実施内容 ①「これからの高専に期待されること」 ②参加者の先生方からの5分間スピーチ(教育、研究、学校業務に関すること) ③将来の魅力ある鹿児島高専(意見交換)	鹿児島高専FDレクチャーシリーズは、ミニFD研修会を実施し、参加者主体のFD研修を行った。 各参加者の経験、知見、疑問点を参加者で共有することで、参加者の高専教育への理解を深めた。	A	令和3年度は総務企画委員会で同様の鹿児島高専FDレクチャーシリーズを行う。研修は、年代別、職名別等、さまざまな形での実施を計画して、参加者相互の理解と教育力向上を目指す。	APチーム

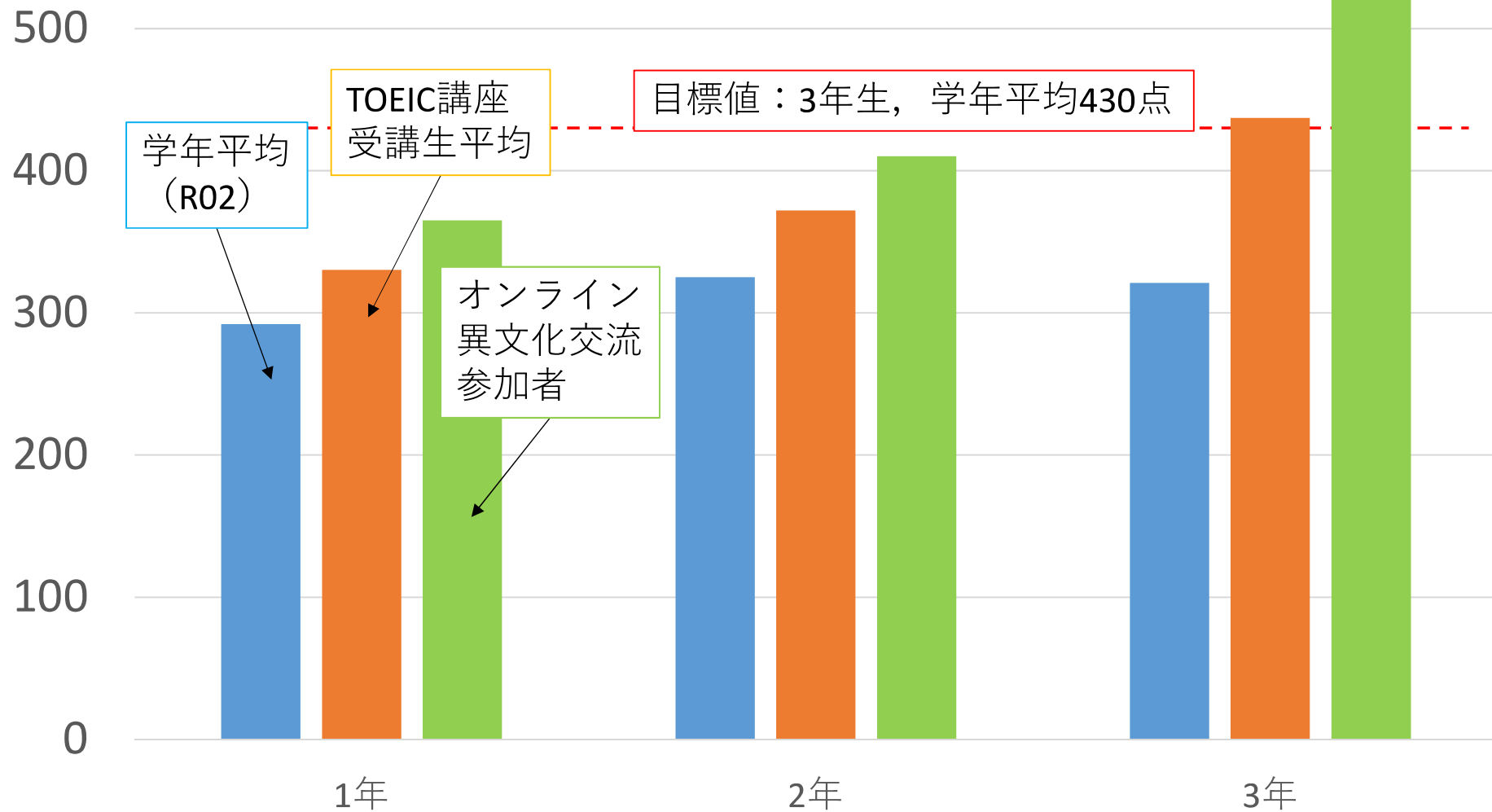
大項目	評価項目	状況改善、目標達成のための取組事項	外部評価	【改善案】P(計画)	【対応】D(実際に行った活動)3月末分を含む。	【評価】C(評価)得られた成果および自己評価(SABCの理由)	【自己評価】	【継続・改善】A継続する取り組みと今後の課題(改善)への対応方針	対応部署
7-3 自己点検・評価		・遠隔授業の質の向上のための研修等		部署名：教務委員会、APチーム ③授業力アップアクティビティ → 遠隔授業（教務委員会）	部署名：教務委員会、APチーム 前期の遠隔授業の科目の中で、学生による評価が高かった各学科の教科について、各学科教員に遠隔授業教材を公開し、教員各自が研修を行った。各教員は教材を参照するとともに、報告書を作成した。	今年初めて実施した遠隔授業に関するFDで、実際に学生の評価の高かった教員の、遠隔授業の教材を、学生と同じように遠隔授業の形式で閲覧できたことは、各教員にとって少なからず得るものがあった。	A	来年度も遠隔授業を対象にするか、従来のように授業参観の形式を採るかどうかは、新型コロナウイルス感染の状況によって変わるが、状況に応じて適切に対応していく。	APチーム
		・学生の評価による授業評価の把握		部署名：教務委員会、APチーム ④学生による授業評価アンケート（教務委員会）	部署名：教務委員会、APチーム 教科担当がMoodleで実施した。前期末と後期末に行った。対象科目は実験実習以外の座学科目とした。	これまでは、アンケート結果だけが各教員に示されていたのに対し、今年から教員自らが結果を集計し報告する形式に換えたことで、教員各自が、自分の授業評価の詳細を知ることができるようになったのは、これまでにない成果と考える。	A	今後は自分の授業評価の実情を理解し、アンケート結果を基に、各自の授業改善に結びつけられるかが課題である。	APチーム
		・FDフォーラムの開催		部署名：APチーム ⑤FDフォーラム (1)FD研修会（10月開催予定） ・授業の進め方について ・授業中の指導における共通認識について ・公開授業（教員相互による授業参観）の実施について (2)FD講演会（12月開催予定） ・モチベーションアップについて (3)FD講演会（3月開催予定） ・共通教育の実施について	部署名：APチーム (1)鹿児島高専第1回FDフォーラム 日時 令和2年10月7日 16:40～17:20 ①授業の進め方について ②授業中の指導における共通認識について ③公開授業（教員相互による授業参観）の実施について (2)鹿児島高専第2回FDフォーラム 日時：令和2年12月4日（金）16:00～17:00 ①モチベーションアップについて	鹿児島高専FDフォーラムとして、2回の研修会を実施できた。3月に3回目の研修を計画していたが、緊急事態宣言の影響で来年度に延期となった。	A	令和3年度においても総務企画委員会において、鹿児島高専FDフォーラムを実施し、教員の教育力向上、共通理解を図る。	APチーム
		・ハラスメント防止	鹿児島高専独自の取り組み	部署名：ハラスメント防止・対策委員会 ⑥SD 改正労働施策総合推進法（パワハラ防止法）の施行にあわせて、パワーハラスメントの防止、共通理解を目的に実施する。	部署名：ハラスメント防止・対策委員会 日時：令和3年2月5日（金） 内容：教職員向けハラスメント防止講演会（演題）パワーハラスメント防止等の対策にあたって	パワーハラスメントのない職場環境の構築に向けて実施した。	A	令和3年度では、総務企画委員会内に設置される専門委員会において、必要なSDを実施する。	APチーム 人事係
	7-3 自己点検・評価	・教員による自己点検評価票の改定	鹿児島高専独自の取り組み	部署名：APチーム 教員による自己点検評価票の改定 現在の自己点検評価票を改善し、ポイント制を導入し、評価される業務の明確化を図る。	部署名：APチーム 教員による自己点検評価票（案）を作成した。	教員による自己点検評価票（案）を作成した。	A	令和3年度に（案）を教員へ開示し、総務企画委員会で検討修正を行う。 令和4年4月に実施する令和3年度の教員による自己点検評価より、新しい自己点検評価票を用いる。	APチーム
		・各規定の制定	機関別認証評価	部署名：運営会議 自己点検・評価の基準・項目を定めた規定を制定する。 研究活動に関する規定を制定する。 地域貢献活動に関する規定を制定する。	部署名：運営会議 ・自己点検評価の規定を令和2年5月に制定 ・研究活動に関する規定を令和2年4月に制定 ・地域貢献活動に関する規定を令和2年9月に制定	認証評価で指摘された事項について早急に対応した。	S	自己点検・評価規定について。認証評価では卒業生、企業による教育の検証が求められており、今後、アンケートの実施時期についての記述の追加を検討する必要。	APチーム
		・PDCAに基づいた評価の必要性（PDCAサイクルの再構築）	外部評価委員会	部署名：APチーム ・各外部評価の指摘事項を整理し、改善のための依頼事項を各部署に依頼。数値目標を掲げられるものは数値目標を依頼。 ・対応方針（P）、具体的な対応（D）、自己評価（C）、今後の課題（A）を各部署で自己評価。 ・APチームでとりまとめ、自己点検評価委員会、外部評価委員会を受審する。	部署名：APチーム ・各外部評価の指摘事項をAPチームの外部評価担当メンバーで整理した。 ・9月9日の教職員会議にて改善のための依頼事項を各部署に依頼した。 ・各部署はPDCAを自己点検評価した。 ・各部署の自己評価をAPチームでとりまとめ、2月17日に自己点検評価委員会を開催した。	これまで年度計画に基づいた自己点検評価項目をミッションベースに変更し、各部署でPDCAを自己点検評価できる体制とした。各部署の自己点検評価を自己点検・評価委員会で審議することで、PDCAサイクルの構築を行った。また、外部評価委員会の様式を総括、簡易版、詳細版に区別し、成果がわかりやすい様式とした。	S	令和2年度にAPチームで行った活動を今後、総務企画委員会で継続し、本格化させていく必要がある。また、令和2年度の外部評価委員会で指摘された事項について対応する。	APチーム
		・企業に対する満足度調査の実施と調査結果の検証について	外部評価委員会	部署名：APチーム R1年度の認証評価受審対応として、H30年度に実施した企業へのアンケート結果をもとに、本校の教育に対する企業の満足度調査を再検証する。	部署名：APチーム APチームにおいて、企業へのアンケート結果の検証を行った。	本科卒業生の仕事に対する評価は89%が満足という結果であった。一方、プレゼンテーションに関しては約50%、英語に関しては、11%が満足という結果で、特に英語の満足度が低いことがわかった。2年前のアンケート結果を基にした検証ではあるが、企業の評価を再検証できた。	A	今後、企業へのアンケートを行う時期をどのスパンで定め、実施していくのかを検討する必要がある。自己点検・評価規定にも追記する必要がある。	APチーム
		・魅力ある鹿児島高専への取り組み	監事監査外部評価委員会	部署名：APチーム 令和4年度からの1年生混合クラスの実施の計画立案	部署名：APチーム ・「令和4年度からの1年生混合クラス」に関する答申を取り纏め校長に答申をした。その後運営会議で了承が得られた。	令和4年度からの1年生混合クラスの実施について決定した。	A	令和4年度からの1年生混合クラス実施WGにおいて、諸課題に対する対応を検討する。また、引き続き総務企画委員会において議論を継続する。	APチーム

※1）ポジティブアクション：積極的格差是正措置。男女間の差別を解消して、働く意欲と能力のある女性が活躍できるように、企業が自主的に行う取り組みのことである。

(点)

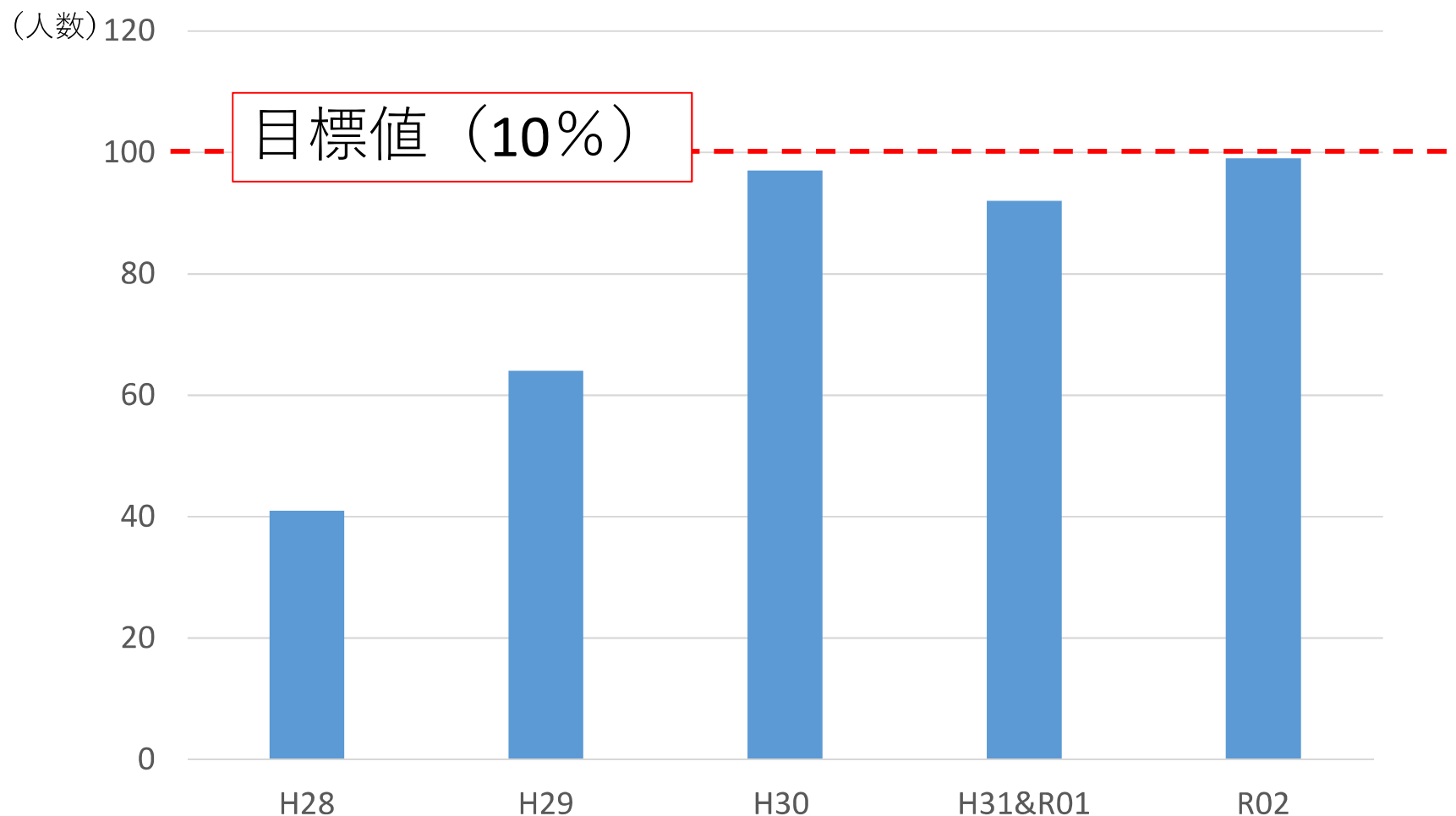
TOEIC Bridge スコアによる国際交流プログラムの成果検証

(TOEIC講座, NTIストックホルム校とのオンライン異文化交流)

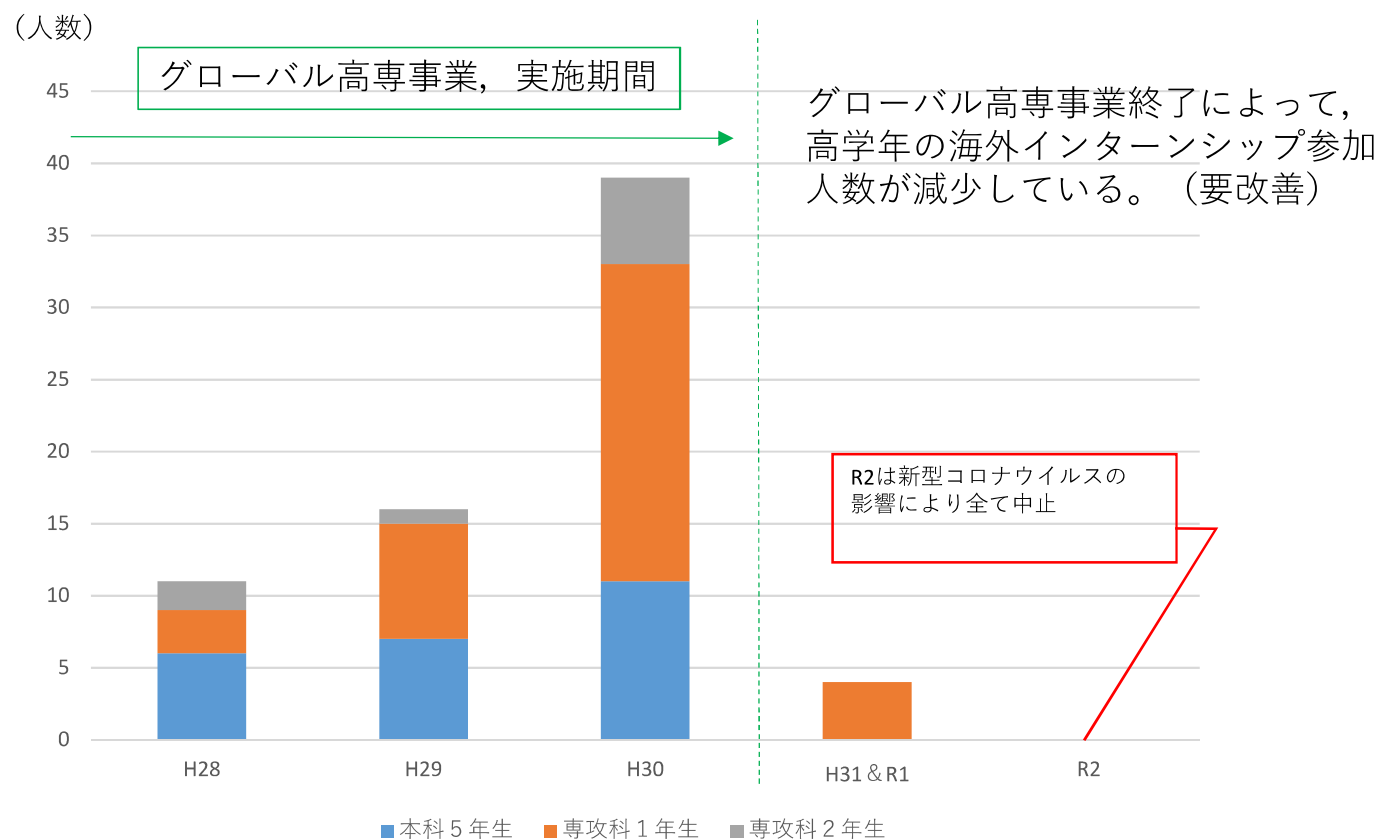


在校生（本科生）のうち、低学年（1～3年次）における国際交流関連プログラム参加者数（海外派遣者数）

※R2はNITストックホルム校とのオンライン異文化交流参加者数含む

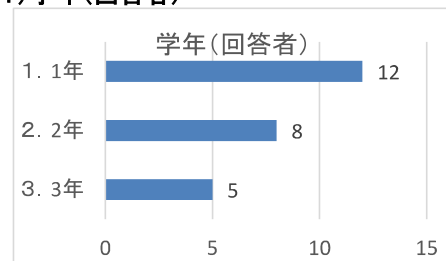


海外インターンシップ（R28-R2）参加者数の推移

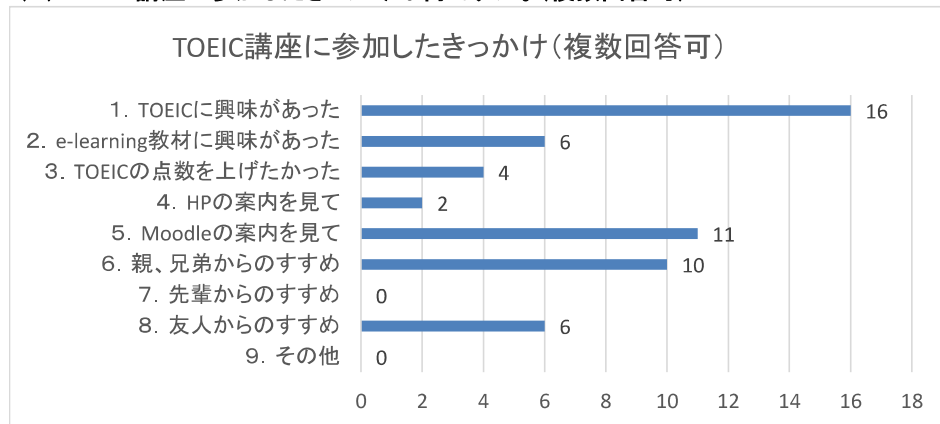


前期TOEIC講座アンケート集計結果

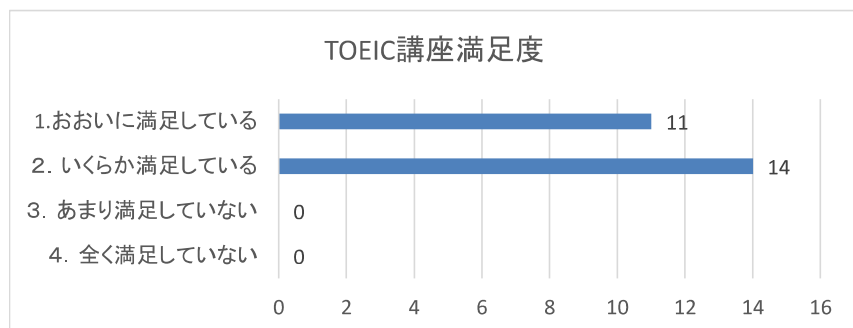
(1) 学年(回答者)



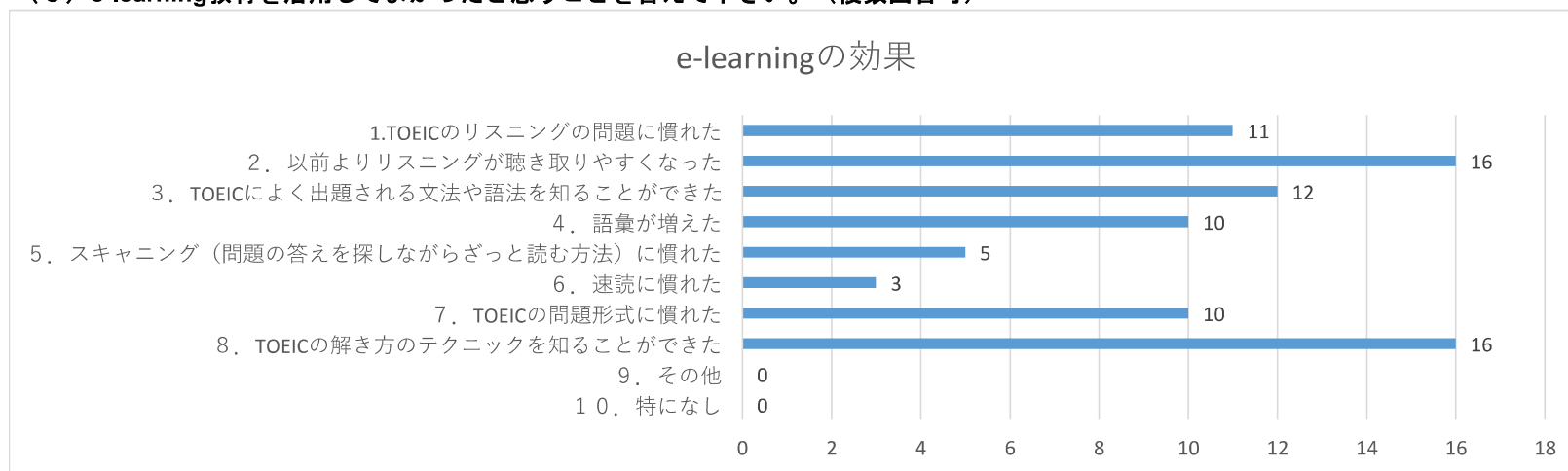
(2) TOEIC講座に参加したきっかけは何ですか。(複数回答可)



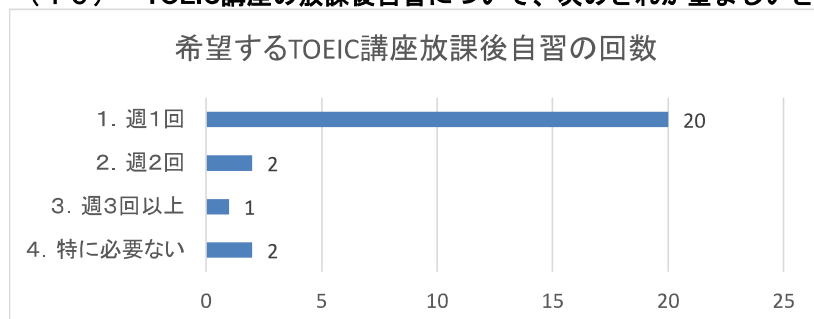
(4) e-learning 教材を使った自身の学習を振り返って、次のうち適当なものを選んで下さい。



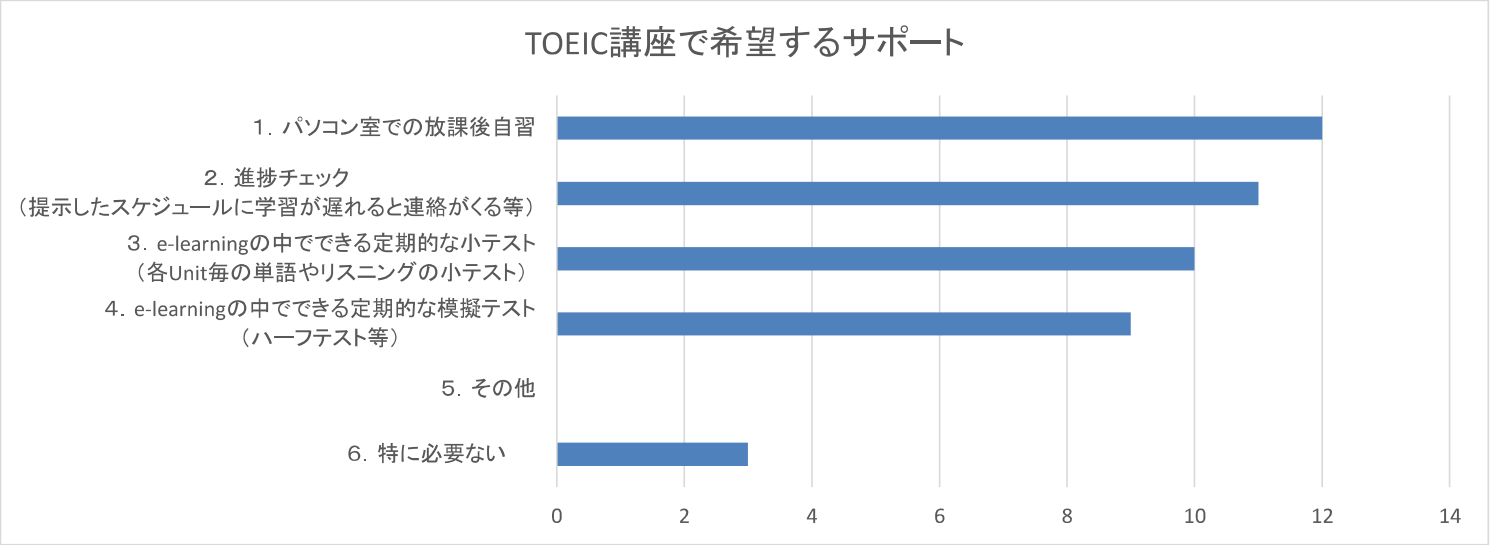
(6) e-learning教材を活用してよかったと思うことを答えて下さい。(複数回答可)



(10) TOEIC講座の放課後自習について、次のどれが望ましいと思いますか。



（ 1 1 ） TOEIC講座でe-learningを学習する時、あった方がいいと思うサポートを選んで下さい。（複数回答可）



（ 1 3 ） TOEIC講座（前期）に参加した感想、改善してほしい点などをご記入ください。

- ・toEICに興味があったので参加してみたが、他のことが忙しく予想以上に時間をとることが難しくなり、あまりtoEIC講座を進めることができなかった。
- ・まだまだ分からない単語がとてもあります。unit内で目標などが定められており学習しやすいです。
- ・後期にもあるなら、ぜひ受講したい
- ・自分のペースで進めることができたので学習しやすかったです。TOEICの問題形式になれることもできたので、よかったとおもいます。
- ・リスニングが少し聞き取れるようになりました。
- ・自分にしては、頑張ることができたと思う。これからは、自発的に英語を学んでいきたいと思った。
- ・知らなかった単語や熟語を学ぶことができました。リスニングも慣れが必要だと思うので、週一でもすると着実に力がつくと思います。
- ・TOEICの形式などを体験出来て良かった。また、listeningが以前より少し聞き取りやすくなるなど成果が少し出たので概ね満足しています。
- ・自分の実力がどれ位かを知れて良かった。
- ・私は親に勧められて参加して、最初はやる気がなかったけれど、実際やってみたら意外と楽しく、ためになったと思う。
- ・週1の学習があることでサボることも無く、計画通りに進めることが出来た気がした。
- ・参加できて良かったです。改善して欲しい点は特にはないです。
- ・今回TOEIC講座に参加してTOEICの問題になれたり、問題傾向について学ぶことが出来ました。このことはきっとこれから繋がる大事なことだと思うのでとても有意義な時間を過ごすことが出来ました。今回学んだことは実際にTOEICを受けたときなどに活かしたいです。TOEIC講座に参加させていただきありがとうございました。
- ・とてもいい環境だと思います。
- ・英語の単語を知らなさすぎるので、英単語を覚えたら、かなり点数が上がるなと思いました。
- ・とても良かったと思います
- ・リスニングが苦手なので練習ができてとても良いと思った。
- ・TOEIC講座に参加したことで、自分が苦手としていた問題形式の解き方のポイントを知ることができたので、これからの英語の勉強に活かしていきたいです。また、毎週放課後に自習時間があったことで講座に最後まで集中して取り組むことができたので良かったです。
- ・自宅でe-Learningを進めるより、水曜日放課後のTOEIC講座でe-Learningを進める方がとても集中することができたので、とてもありがたい時間だった。
- ・TOEICを受けてみたいと思った
- ・そのうち学習が進むだろうと適当に考えていると、後で全く進んでいないことに後悔することになりました。休みの日など、何もすることがない時には積極的に学習するようにしたいです。
- ・E-learningの進捗度を他の人と比べてランキング化し、ライバル意識を持ち取り組めるように意図する
- ・とくになし
- ・今の体制に満足です。
- ・TOEIC講座に参加して、リスニング能力が格段に上がったことが特に良かったところ。普段の授業ではリスニングはあまり行わないので、とても便利でした。後期もあるのなら、引き続き受講したいと思います。

令和2年度自己点検・評価報告書に対する事前質問等と回答

1. 教育の質の保証

通し 番号	評価項目	事前コメント	回答
1	1-1 学位授与方針について カリキュラムポリシーの見直し	カリキュラムポリシーはディプロマ ¹⁾ ポリシーの見直しが前提になるとのことであるが、現在の本科のディプロマポリシーの内容を教えてください。 注釈例 1) ディプロマ (diploma) とは、高等教育機関より発行される卒業証明書や業績証明書である。これらは、授与された者が完全に特定の課程を修了したこと、または特定の学科の単位を取得したことを証明する。〈ディプロマdiploma〉という語は、ギリシア語で〈二つ折りの証書〉のことである。	第10回校務連絡会（令和3年2月24日（水）開催）で、新ディプロマポリシーが報告されました。内容については、別添資料1をご参照ください。
2	1-1 学位授与方針について 社会状況、技術動向に応じた3つのポリシーの見直し	昨年度見直された専攻科のカリキュラムポリシーの内容を教えてください。	専攻科のカリキュラムポリシーについては、別添資料2をご参照ください。 ○主な内容 ・ JABEE認定プログラムの廃止に伴い一部削除 ・ 長岡技術科学大学との連携プログラム開始に伴う追記
3	1-2 本科の教育について 学修単位の学修時間の把握	【改善案】P（計画）欄に記載されている対応方針：の内容は、学修単位の学修時間の把握とは別な内容が記載されている。 正しい対応方針を記載してください。	ご指摘ありがとうございます。学修単位の学修時間の把握の対応方針については、本来、成績保管状況に記載すべきでした。 なお、令和3年度に実施することから、詳細版から削除いたしました。
4	1 教育の質の保証	本県、本地域には様々な分野における一流の技術を持った企業が多数存在しています。KTC会員企業の中にも日本トップクラスの独自能力を持つ会社がありますので、従来、実施してきた企業からの先進的な技術講習・実習をより充実させることにより、学生のみならず教員の成長にも繋がると考えられます。 目まぐるしく進化する技術革新の状況下で、先端技術を学ぶ機会は重要であると考えます。（KTC会員企業を有効に活用して下さい）	貴重なご意見、ありがとうございます。仰るとおり、KTC会員企業様の先進的な技術講習・実習を充実することは、本校にとって大変ありがたい話です。 本校では、例年、特別活動（対象：1年～3年）の時間帯を利用し、①地元企業への見学、②地元企業による特別講演、③自治体による地方創生特別講義などをキャリア教育の一環で実施しております。引き続き、企業の最先端技術を学べるようKTC会員企業様や関係自治体様と連携を深めながら、教育及び研究活動を行っていきたいと考えております。

令和2年度自己点検・評価報告書に対する事前質問等と回答

2. 教育

通し 番号	評価項目	事前コメント	回答																									
5	2－1 本科の教育の成果 について 留年率、退学率 の改善の方策	留年率、退学率については、他県の高専との比較データがほしいです。	直近3年間の全国平均及び本校の留年率、退学率をお示しします。 <table><tr><td></td><td></td><td>H29</td><td>H30</td><td>R1</td></tr><tr><td>留年率</td><td>高専平均</td><td>2.9%</td><td>2.9%</td><td>3.1%</td></tr><tr><td></td><td>本校</td><td>3.1%</td><td>3.0%</td><td>3.6%</td></tr><tr><td>退学率</td><td>高専平均</td><td>2.3%</td><td>2.3%</td><td>2.4%</td></tr><tr><td></td><td>本校</td><td>2.7%</td><td>3.1%</td><td>1.7%</td></tr></table>			H29	H30	R1	留年率	高専平均	2.9%	2.9%	3.1%		本校	3.1%	3.0%	3.6%	退学率	高専平均	2.3%	2.3%	2.4%		本校	2.7%	3.1%	1.7%
		H29	H30	R1																								
留年率	高専平均	2.9%	2.9%	3.1%																								
	本校	3.1%	3.0%	3.6%																								
退学率	高専平均	2.3%	2.3%	2.4%																								
	本校	2.7%	3.1%	1.7%																								
6	2－1 本科の教育の成果 について 留年率、退学率 の改善の方策	意見 ・留年や退学を減らす活動は、「学生の人生」をサポートする活動であるので、とても良いと思います。 ・（p26より）H30比で約2割減であり、H24からH30の間よりも低いが、H21からH22よりは高い。 ・数値目標を「前年度比2割減」とするよりも、「全学生の3%未満に留める（各クラス1名未満）」などとしたほうが良いのでは。	ここ数年、留年・退学者数が多い状況にあったため、学校全体の目標を「2割減」と決めました。次年度からは、学科ごとに目標を定めるよう方針を変更します。 留年・退学者数の合計（学科毎）について、一桁に減少させることができた学科は、今年度3学科ありました。残り2学科については、依然として二桁となったため、留年・退学対策については、学科としての数値目標を定め対応を検討し、改善に向けて引き続き努力していきたいと思います。																									
7	2－1 本科の教育の成果 について 留年率、退学率 の改善の方策	質問 ・（p14のPlan）当面の取り組み内容が「成績や学力の向上」ですが、退学や留年する原因が“特別な理由”（例えば、経済的理由や、興味が変わったためなど）のために退学や留年する学生が、①どの程度いて、②そのような学生への取組や支援は、どのような形で行われていますか？	退学する学生は、①経済的理由で退学する学生はほとんどおらず、②進路変更を理由に退学する学生がほとんどです。 現状としては、主にクラス担任、学科長、学生なんでも相談室等が学生への支援活動を行っています。																									
8	2－1 本科の教育の成果 について 留年率、退学率 の改善の方策	・“学科を変えれば、退学しなくてもしなくても学校を続ける”ような学生は、いるのでしょうか？ もしそのような学生がいる場合、学科を変えることは可能でしょうか？	コメントいただいた調査はいたしておりません。 退学の理由は、非常に複合的な場合が多く、学科を変えることで退学を回避できるかどうかは、不透明な部分が多いです。 本校には、転学科制度がございますが、1～2年に1人の割合で転学科試験を受験しております。転学科先によっては成績面でのハードルが高く、流動的に行われているとまでは言えない状況です。 令和4年度入学生から「混合学級」を実施する予定ですが、転学科制度についても、転学科しやすい仕組みを検討しております。																									
9	2－1 本科の教育の成果 について 入試倍率の把握	意見 ・鹿児島県での公立高校の平均倍率が0.8倍であり、「高校が過剰」な状況の中、また、今後も超長期間生徒数減少が続く中、生徒獲得競争に勝ち、高専の入試倍率が1.5倍であることは、とても評価できると思います。 ・コロナで入試広報活動ができない中、短期間でwebやNETを使ったPRを行ったことは、とても評価できると思います。	例年、鹿児島県内の15歳人口は減少傾向にあり、今後厳しい状況が続くことが予測されます。現状に甘んじることなく、これまで以上に 令和元年度に発足した入試広報プロジェクトチーム で熱のある入試広報活動に取り組んで参りたいと思います。																									
10	2－1 本科の教育 の成果について 入試倍率の把握	・滑り止めとして高専を受験するのではなく、「高専が本命の進学先」である学生が増えるのが理想的だと思います。募集人数に対して、どれ位の合格者を出したのか、または、合格者のうち何人くらいが入学辞退したのか、おおよその傾向を教えてください。	○令和2年度入学生 定員200名のところ301名が応募し、210名の合格 内定者 を出しました。その後、3名の入学辞退と1名の補欠合格で208名が入学しております。 ○令和3年度入学生 定員200名のところ306名が応募し、210名の合格 内定者 を出しました。その後、2名の入学辞退があり、入学予定者は208名となっております。 ○毎年の傾向 各学科定員（ 40名 ）+2名の合格者を出し（合計で210名）、例年、2名前後の辞退者が出ている状況です。 辞退する理由はとして、①他の高校に合格したため、②第1志望の学科に合格できなかったためが挙げられます。																									

令和2年度自己点検・評価報告書に対する事前質問等と回答

11	2-1 本科の教育の成果について 入試倍率の把握	・（p25より）平均値が1.5倍でも、学科によって、ばらつきが見られ、倍率が低めの学科での取組がありますか？ また、R2に機械学科が上昇した要因がありますか？	学科によるバラつきは、当然本校としても常に気にしている部分です。例えば令和2年度新入生では、電気電子工学科の倍率が1.10倍と非常に低かったため、本年度は学科長を先頭に、熱心に学校のPR活動を実施しました。 例年、10月に開催している学校説明会では、学校説明会の前後に、学科独自の公開講座を実施し、学科独自のPR活動を行いました。結果、今年度電気電子工学科の志願倍率は1.7倍となりました。 志願倍率について、本校の場合、前年度の志願状況が影響を及ぼしております。前年度志願倍率が低い学科は翌年では志願倍率が上がり、逆に、前年度志願倍率が高かった学科は、翌年志願倍率が下がる傾向もあります。 これは、例えば県立高校でも、鹿児島工業高校は、Ⅰ類とⅡ類に大きく分かれていますが、Ⅰ類の倍率が高い年の翌年はⅡ類が高くなり、その翌年はⅠ類が高くなる傾向があります。鶴丸高校と甲南高校でも同様に、それぞれの倍率が交互に高くなったり低くなったりするため、受験生の一部には、自分の学びたい学科（学校）より、前年度の倍率が低く入りやすそうに見える学科（学校）を受験する傾向が見受けられます。 令和2年度機械工学科の倍率が高くなったのは、前年度の倍率が1.15倍と低かったことが大きく影響していると推測されます。令和3年度入試では1.1倍に下がっており、本校においても、残念ながらこのような傾向にあるのは事実です。
12	2-1 本科の教育の成果について 入試倍率の把握	・超長期間、日本の子供が減少することは確定しているため、「留学生」を本格的に募集する計画や取組は、ありますか？	外国人留学生については、例年約2名程度の国費留学生、マレーシア政府派遣留学生、モンゴル派遣留学生の受け入れを行っております。次年度以降もこの水準で受け入れを行っていく予定です。また、大幅な受入計画は現在ございません。 なお、私費留学生については、高専機構で私費留学生編入学共同選抜を実施しておりますが、本校への入学希望者が少ないこと、受検者の成績の面もあり、受け入れができていない状況です。
13	2-2 専攻科の教育の成果について 環境創造プロジェクトの取組	意見 ・長島町での実証実験は、学生・教職員にとっても、町民にとっても、非常に有益であるはずで、とても評価できる取組であると思います。この取組のゴールとして、①発表会（動画）や論文や報告書として業績をまとめ、②ホームページで公開すると良いと思いました。 ・鹿児島の地域に溶け込む取組は、「鹿児島」工業高等専門学校としての大きな「力」「地域の希望」「役割」だと思しますので、今後も、末永く、長島町だけでなく、各地で続けていただきたいと希望します。	貴重なご意見ありがとうございます。環境創造工学プロジェクトの一連の流れを整理し、実証実験、成果報告、公表等、今後、議論を重ねていきたいと思っております。 また、長島町をはじめ、他の自治体へも展開していけるように取り組んで参りたいと思っております。
14	2 教育の成果	教育の成果をどのように評価するかは非常に難しいものがあります。 例えば入試倍率等は、志願者数の増減（対象年齢人口増減）やPRの仕方・範囲・頻度でも大きく変わります。実質的な教育の成果とは関係性が薄いのではないかと感じます。 本来ならば、比較的難易度の高い資格取得件数・状況などは評価し易いと思われます。 また、経年的な定量評価もさることながら全国の高専と比較した評価項目も必要かと考えます。	○一般科目 英語は、英検取得状況やTOEICスコアを基に定量的に測ることができるため、今後、取得状況の把握・分析に努め、今後の教育改善に活かしていきたいと考えております。今年度、本科2年生の学生が英検準1級（大学中級程度）に合格しました。 数学や物理などの基礎科目は、高専機構が全国の高専で実施しているCBT（コンピュータを使用した小テスト）の結果を基に分析することは可能です。 ○専門科目 都市環境デザイン工学科では、例年、技術士第一次試験に積極的に取り組んでおり、毎年20名前後の学生が合格しております。この試験は、大学卒業以上のレベルで、合格率は約35%、合格者の平均年齢は33.0歳、10代以下の合格者は全合格者の5.5%という難関資格です。 ○その他 本校は、高専機構が全国の高専を対象に公募した「グローバルエンジニア育成事業（基礎力養成プログラム）」に採択され、グローバルな視点に立ったエンジニア教育を行うために本事業に取り組んでおります。

令和2年度自己点検・評価報告書に対する事前質問等と回答

3. 研究

通し 番号	評価項目	事前コメント	回答
15	3-2 科研費と外部資金 について 科研費採択率向 上	科研費の採択が、1年ごとに増減しています。H29（12）、H30（4）、R1（11）、R2（4）偶然ですか、それとも何か要因が考えられますか。	1年ごとの増減については偶発的なものと考えますが、特定の教員が採択される傾向があります。科研費は連続した3年程度の期間で採択されますので、おおよそ3年ごとに増減する可能性はあります。 なお、参考までに科研費の新規及び継続者数・金額の合計は次のとおりです。 H29（18件、24,370千円）、H30（13件、15,590千円）、R1（19件、17,820千円）、R2（13件、11,606千円）

4. 社会連携

通し 番号	評価項目	事前コメント	回答
16	4-1 自治体等との連携 について 教育における自 治体との連携	霧島市との連携については、現在NECを含めた三者で地域共創の事業計画が進行中であるとのことであるが、どのような事業計画が進行中かを具体的に記載ください。	まだ、NECとの事前協議が始まったばかりで、具体的な内容についてはこれからという状況です。霧島市の様々なデータを活用して、Fiwareというプラットフォームで、地域に有用なシステム開発を目指していますが、それ以前の段階で、まずはFiwareというプラットフォームの利用の仕方を勉強する必要があります。手始めに、R3年4月～5月にかけて、4回ほど、本校情報工学科の5年生、NECから使用方法の講習をしていただき、その延長線で卒業研究のテーマとして取り組めるかどうかを探っていきます。他学科には、地域創生に興味のある有志を募り、Fiwareの使用方法を学ぶ一方で、霧島市の課題などを洗い出すことを、研究会のような形で実施していくことを検討しているところです。
17	4-1 自治体等との連携 について 5 グローバル教育 （国際交流）	現在、貴校の留学生に、霧島市国際交流協会が開催する「外国人との親善・交流促進事業」の各種イベントに参加をいただいている。 今後さらに、同団体が主催する「海外交流都市との交流事業」に、学生の参加や学校として協力をいただくことで、貴校の国際化に連携して取り組んでいきたい。	霧島市国際交流協会が開催する留学生向けの各種イベントについては、その都度、本校留学生へ周知しております。なかでも、霧島ふるさと祭には本校留学生が毎年参加しており、ブースの出展や、留学生の母国紹介のポスターの作成・展示等に積極的に携わっています。今年度も、新しく編入してきた3名の留学生含め、本校に在籍している留学生6名全員が同祭（R2.11.14開催）に参加しました。 また、霧島市国際交流協会だけでなく、日置市の吹上町マレーシア交流実行委員会とも活発な交流があり、同委員会が開催する留学生の歓送迎会や夏祭り、秋祭りに例年参加しています。さらに、毎年本校で開催している鹿児島工業高等専門学校外国人留学生支援懇談会においても、学内の留学生支援関係者だけでなく、霧島市国際交流協会や吹上町マレーシア交流実行委員会を含め、地域の留学生ホストファミリーや霧島警察署等、学外留学生支援関係者も多く参加している状況です。 今年度は、新型コロナウイルスの影響により、初のオンライン形式での開催（R3.2.12実施）となったものの、学内外から総勢26名が参加して交歓しました。今後もこれらのイベントを通して、継続して地域との連携強化を図り、本校の国際化に協同して取り組んで参りたいと思います。
18	4-2 鹿児島高専テクノ クラブについて 共同研究状況の 把握とKTC事業の 把握	評価項目の「共同研究状況の把握」と「KTC事業の把握」の欄の右側に記載されている内容は、それぞれ入れ違っている。 「共同研究状況の把握」については、一覧を作成されているとのことであるので、具体的に一覧表を示してください。今後資料版を設けて、そこに載せることも検討ください。	ご指摘ありがとうございます。誤って記入しておりました。 過去4年間の共同研究・受託研究費獲得一覧表は、別添資料3のとおりとなっております。 来年度以降、重要と思われる具体的な証拠書類等については、資料版の作成を検討いたします。

令和2年度自己点検・評価報告書に対する事前質問等と回答

5. グローバル教育（国際交流）

通し 番号	評価項目	事前コメント	回答
19	5-2 海外インターン シップについて	グローバル人材の育成と、学生の英語力向上のために海外インターンシップは効果的な事業と思います。実施に向けた取組を推進してください。	令和2年度は新型コロナウイルスの影響により、海外インターンシップを実施することができませんでした。令和3年度以降は、新型コロナウイルスの状況を注視しつつ、例年行っているMKウォーターテック（タイ）やIPC（シンガポール）等の企業インターンシップやIUT（フランス、トゥールーズ）等のアカデミックインターンシップを含め、実施に向けたプログラムの整備に取り組みたいと思います。

6. 学生支援

通し 番号	評価項目	事前コメント	回答
20	6-1 学生支援	新型コロナウイルス問題が起こり、学生寮の閉館と、帰国できない留学生が1名おられたので、緊急に学校と話し合い、春休みの間、同窓会館を利用させていただきました。今後、学生に対して、学校としての支援等、検討が必要	本校のライフライン工事（令和2年3/6～3/29：断水）に伴い、女子留学生1名が学生寮で生活できなくなったため、同窓会館を利用させていただきました。ありがとうございました。 また、新型コロナウイルス問題で、女子寮生1名が帰省できず、同窓会館を利用させていただきました。今後寮内で感染症等が発生した場合は、寮内に隔離部屋を配置し対応していきます。
21	6-2 地域に根差した学 生活動	隼人錦江スポーツクラブ、ロボギャルズ、各種コンテスト等、同窓会に協力要請をしていただきたい。卒業生の会社や卒業生の勤務先など、支援体制を作ります。	協力要請について、ご意見いただきありがとうございます。 本校としましても、同窓会との連携を緊密にできればと考えておりますので、協力要請についても前向きに検討させていただきます。

令和2年度自己点検・評価報告書に対する事前質問等と回答

7. 管理運営

通し 番号	評価項目	事前コメント	回答
22	7-1 教育組織について 女性教員、女子 学生に増加のため の取組	意見 ・高専における女性教員比率5～10%、本科女性学生15%は、当方が卒業した大学ととても似ているので、そのホームページを見ると、「女性を増やすことが大学の重要な目標」とされ、「そのための活動」として、次の記載がありました。既に高専でも「女性でも安心して入学できる取組」が多数あり、「女性生徒の出願も大幅に増加」していますので、とても良いと思いますが、ご参考まで。 （女性学生を増やすために） ・本学を目指す女子が少ない。 →本人（中学生など）に対する取組だけでなく、送り出し側の「保護者」が安心して送り出せる取組を行っている。 その一つが、在校生の保護者と、受験生の保護者との情報交換会。 ・男性が多いので、居心地が悪い。 →女性トイレを広く明るく豪華に、大幅に改装する。 ・本学に来ることのメリットを明確に伝える。学校説明会などでは、女子受けするようなポスターを貼る。	仰るとおり、女子学生を増やすためには、送り出し側「保護者」が安心して学校へ送り出せる「学校づくり」を行う以下の取組みが重要と考えております。 ○学校づくり ・教職員の育成 ・教育課程、教授方法及び評価基準等 ・卒業後の進路、資格等 ・女子学生に配慮した施設整備（教室、研究施設、更衣室、トイレ、学生寮） ・充実した学校生活（学校行事、授業、部活動、その他イベント） ・その他
23	7-1 教育組織について 女性教員、女子 学生に増加のため の取組	女子学生の多い少ないに関わらず、きめ細やかな、女性目線での対応が必要と思われる。	入試広報活動では、女子学生のキャンパスライフを盛り込み、女子中学生への学校紹介も行っております。本校の女子学生比率は、1997年度に16.3%と最も多く、その後、2008年度に8.1%と減少傾向となりました。 その後、女子学生に配慮した学校づくり、入試広報活動を行ってきました。結果、翌年度からようやく女子学生の比率が15%を超える状況となったため、引き続き、女子学生に配慮した学校づくりを行って行きたいと思います。 本年度は、学生共通棟に女子更衣室を新設しロッカーを250人分設置しました。この 更衣室内の設備については、全身鏡を設置する等、女性職員からの意見を積極的に取り入れました。 令和2年11月より女性の学生寮指導員（寮母）を任用し、女子寮生の悩み相談等の対応等により女子寮生の生活面での支援を行っています。今後は、さらに寮母等との連携を取り、きめ細やかな対応を行っていきます。
24	7-2 FD研修、表彰、SD 等について 教員相互の授業 参観の改善	意見 ・教員相互の授業参観やFDフォーラム講演会研修会のような機会は、「授業改善」のために、極めて重要なことだと思いますので、ぜひ、発展推進していただきたいと思います。その際、「特定の授業」だけを対象にして授業参観されるのではなく、「すべての教員」「すべての授業」が「いつでも」対象になればいいと思います。 先日テレビ番組で、群馬県立高崎高校では、いつでもどの授業でも校長先生が参観して、授業後に先生同士で「言葉をかけ合っている」とありました。 ・教育力の質を向上させる方法では、研修会だけでなく、OJTが必要だと思います。例えば、ある授業を、複数の教員で行うと、相互に新たな視点や気づきのきっかけになることがあると思います。	貴重なご意見、ありがとうございます。仰るとおり「学校づくり」の中で、教員の育成は重要な課題と認識しております。今後、校長や教務主事を含め複数の教員が全教員の授業を参観し、誰もが教育指導等を受けられるようなシステムづくりを検討していきたいと思います。そして、将来、本校もBSテレ東の「THE名門校」で紹介されるような「学校づくり」を行って行きたいと思います。 公開授業（教員相互による授業参観）につきましては、特定の授業を対象としているものではなく、すべての授業を対象として実施しています。外部評価等の評価に対して実施報告を取りまとめる必要がありますので、「いつでも」というのは導入は難しいと考えます。 今年度は、FDの一つとして、鹿児島高専FDレクチャーシリーズ「ニューフェースセミナー」を実施し、授業方法の改善の取組みを行っております。また、鹿児島高専FDフォーラムにおいても、授業の進め方について、講演をしています。OJTにつきましては、各教員の時間割の調整もあるため、すぐに導入ということではできませんが、令和3年度発足するFD専門員会において議題にあげたいと思います。

令和2年度自己点検・評価報告書に対する事前質問等と回答

25	7－3 自己点検・評価 教員による自己 評価点検票の改定	意見 ・教員による自己評価を行うことは、とても大切だと思います。ただし、マンネリになり、同じような評価が固定化する傾向があると思います。評価票を工夫しながら実施する必要があるかもしれないと思います。	教員の自己点検評価については、本年度、鹿児島高専アクションプロジェクトチームにおいて、新たな教員による 自己評価点検票（案） を作成しています。新たな 自己評価点検票（案） では、ポイント制を導入することで、教員自身が日頃行っている活動が、学校としてどのように評価されるかを明確化しています。令和３年度に教員に開示し、総務企画委員会において修正を行った後、令和４年度当初に、令和３年度の教員の活動の自己評価を新たな自己点検評価票で実施する予定となります。
26	7－3 自己点検・評価 教員による自己 評価点検票の改定	質問 ・各教員が「目標」を設定して、それに対する自己評価や達成度を評価する取組は行っていますか？	新たな教員による自己点検評価票（案）に、「目標」を設定するよう検討いたします。
27	7－3 自己点検・評価 PDCAに基づいた 評価の必要性	意見 ・自己点検・評価報告書から、PDCAサイクルによって、効果的に学校運営されていると思います。 ・PDCAという英語表記に「計画」「実行」「評価」「改善・維持」と併記すると、実感できて良いかもしれません。 ・自己点検・評価報告書の「C:評価」と「A:改善・維持」の記載が、やや具体的でなく、やや曖昧・抽象的な感じがしました。	鹿児島高専の従来の自己点検・ 評価報告書 についてはPDのみ記載にとどまっております。今年度は、鹿児島高専アクションプロジェクトチームを発足し、自己点検・ 評価報告書 においてPDに加えてCAについても実施しましたが、委員のご指摘のように具体性に欠ける面もあると思います。こういった取り組みを続けていくことで、より具体的なCAの記載や、効果のあるPDCAサイクルを実行していきたいと思います。
28	7－3 自己点検・評価 魅力ある鹿児島 高専への取り組み	意見 ・1年生混合クラスは、生徒が、広い視点を身につけることや、友人を広げることにつながり、とても良いと思います。 また、教員のタコツボ化を防ぐことにもつながるのではと思いました。	1年生混合クラスは、鹿児島高専の魅力ある教育の一つとして、令和４年度から実施します。委員のご指摘の面について効果を発揮するものと考えております。1年生混合クラスでは、一般科目の共通教育も、柱の一つとなっておりますので、先進校である有明高専から講師を招聘して、一般科目の共通教育についてのFDを令和３年度に実施する予定でおります。
29	7－3 自己点検・評価 魅力ある鹿児島 高専への取り組み	質問 ・混合クラスで勉強した結果、他の学科が自分に合っていると思った学生が、学科を変えることは、可能でしょうか？	本校では、転学科という仕組みが該当する機能になりますが、委員のご指摘の件につきましては現在においても学科を変えることが可能です。また、令和４年度からの混合クラス実施に向けて、転学科の在り方等について、次年度、総務企画委員会において継続して審議する予定になっています。
30	7－3 自己点検・評価 魅力ある鹿児島 高専への取り組み	質問 ・「混合クラス」を発展して、入学試験の時は、学科ごとに入学するのではなく、全員が一括して入学し、1年生の成績や本人の希望などで、2年目以降に各学科に分かれていくような学校運営は、可能なのでしょうか？ こうすれば、学科のことを知った上で、場合によっては学科の先生と話し合った上で、その学科に進級するので、退学が減ったり、学生の満足度が向上することが期待できると思います。	委員のご指摘の内容は、くくり入試（東京高専）、1学科制（有明高専、北九州高専等）で実施されており、本校においてもどちらかに教育組織を改正することで可能になります。現在は、令和４年度からの1年生の混合クラスを機能的に運用することを目指しており、くくり入試や1学科制については、鹿児島高専を取り巻く環境の変化に応じて 迅速 に対応すべき課題と考えております。

令和2年度自己点検・評価報告書に対する事前質問等と回答

その他ご意見等

通し 番号	評価項目	事前コメント	回答
31	—	PDCAに基づいた評価の必要性 確りしたシステムが構築されたことを確認しました。	今年度は鹿児島高専アクションプロジェクトチームにて、PDCAに基づいた評価について実施しましたが、来年度は総務企画委員会において同様に行ってまいります。
32	—	企業に対する満足度調査の実施と調査結果の検証について PDCAのCAIに対する資料として、良いデータであると考えています。	今年度は鹿児島高専アクションプロジェクトチームにて、PDCAに基づいた評価について実施しましたが、来年度は総務企画委員会において同様に行ってまいります。
33	—	イノベーション人材育成への取組みについて 鹿児島高専が目指すイノベーション人材の定義を明記された方が良いのではないのでしょうか。 例えば、最近の地域社会の求人では、めまぐるしく変化する経済発展と社会的課題の解決を両立させ、会社等の発展に寄与できる、IT、ICTに係る、数理・データサイエンス、ビッグデータ、人工知能、量子コンピュータ、IoTなどの幅広い知識・素養、さらには国際的な視野を持つ人材の育成が求められ、領域を超える行動力・発想内容の実現力と修正力・多種多様なアイデアを前向きに繋げられる姿勢を有する人材、つまり、工学系ですので、STEAM（STEAM：Science, Technology, Engineering, Art, Mathematicsの略称）人材の養成が強く望まれています。つまり、このような人材をイノベーション人材と定義し、目的達成のために、カリキュラム内容や実施形態に対する工夫を盛り込んでいるのかを明記した方が良いのではないのでしょうか。 理工学研究科では定義をした上に、カリキュラム構成を工夫しています。 あるいは書かれていて、見落としているようでしたら申し訳ありません。	イノベーション人材の育成は、高専や大学における教育目標の大きな柱となると思います。鹿児島高専では、令和4年度からの1年生混合クラス実施に伴い、1年生での共通実験、PBL等を新たにカリキュラムとして導入します。また、令和3年度においては、令和4年度からの混合クラスに合わせて、全学的なカリキュラム改定を教務委員会を中心に実施します。その際に、委員のご指摘の内容を踏まえて、一般教育科、各学科で検討をすることになると考えます。イノベーション人材の鹿児島高専独自の定義についても、教務委員会または総務企画委員会において議論をしたいと思います。
34	—	調査全般について 意見 ・“企業に対する満足度調査”だけに限りませんが、調査を「多変量解析などの統計解析」すると、隠れて見えなかったことがわかったり、何となく感じていたことが、科学的に確認できたりすると思います。 または、調査票を作成する際に、「多変量解析」を行うことを前提とした調査票を作成すると良い場合があると思います。	アンケート調査に詳しい教員がおりますので、委員のご指摘について対応可能か検討したいと思います。
35	—	鹿児島高専、志学館大学、本市教育委員会が連携して開催している「ニューライフカレッジきりしま（隼人学）」は、県内、全国でも類を見ない取組であり、令和元年度には、優れた運営と学習成果が地域に活かされていると評価され、地域の活性化に寄与するとして、全国市民大学連合から「優良市民大学」として認定された。この取組について、今後も継続してお願いしたい。 ※別添資料4（令和2年2月1日 優良市民大学認定）	令和2年度は、新型コロナウイルスの影響により全てのプログラムが中止となりましたが、令和3年度については、実施に向けて、霧島市教育委員会、志学館大学、本校で準備を進めております。
36	—	セルフアセスメントの仕組み構築について 鹿児島高専の理念・ビジョン・ミッションに基づく学校運営のあり方を目的としてAPチームを編成し独自のアセスメント仕組みを構築された事は非常に素晴らしいと思います。 今後は実用的で実効性の高いセルフアセスメントの弛まない探究を進め、全国のすべての高専におけるベンチマークとなることを大いに期待しています。	委員の激励に応えることが出来るように、取り組みを続けていきたいと思います。

令和2年度自己点検・評価報告書に対する事前質問等と回答

通し 番号	評価項目	事前コメント	回答
37	—	自己点検・評価報告書によれば、2020年度版は鹿児島高専のミッションをベースに7つの大項目で分類されており、評価項目を見ると学校経営がある程度網羅されています。今回の自己点検・評価報告書は、素晴らしい改善が行われていると思います。 これらの大項目は、上位で規定されている「目的」「教育理念」「教育理念を達成するための3つの目標」に基づいて作成されていると思われます。それであれば、「3つのミッション」は、学内への周知や、学外に対しても広報する必要がありますので、学校要覧に記載して規定として定める必要があります。 鹿児島高専のミッションは、2021年度学校要覧にどのように記載するか検討されていると思いますが、鹿児島高専の進むべきゴールを明確にするため、例えば「教育理念を達成するための3つの目標」を「教育理念を達成するための3つのミッション」に置き換えることも一つの選択肢としてあるかと思います。	委員のご指摘の内容については、学校要覧、学生便覧、HP等に反映して周知したいと思います。 委員のご指摘の点や鹿児島高専の教育理念等につきましても、令和4年度に向けて総務企画委員会において改定について検討する予定としています。
38	—	自己点検・評価報告書の作成を行う組織として、鹿児島高専アクションプロジェクトチームが結成されたことは、高く評価できると思います。今回の自己点検・評価報告書はPDCAサイクルが活用されており、その成果が見られます。 学校経営や授業改善のためにPDCAを活用する場合は、その中核部である現状認識（ディスカッションして共通理解が必要）——>問題点の把握（ディスカッションして課題抽出）——>改善策（ディスカッションして共有化が必要）のプロジェクト型改善過程が不可欠であります。その改善過程が組織的に機能するように、関係者のディスカッションが必要となります。	自己点検・評価報告書における委員のご指摘につきましては、次年度以降に活かしていきたいと思います。
39	—	自己点検・評価報告書は、簡易版と詳細版に分かれています。簡易版の方は次の三つの内容から構成されています。 （1）各外部評価の指摘事項と改善 （2）将来ビジョンの策定と具体策の検討 （3）本校のミッションに関する取組 簡易版の評価項目をどのように選択するかの方法としては、非常に評価できると思います。しかしながら、（1）の1－2 監事監査③退学率、留年率の改善（P14）と、（3）の3－1 教育の成果（P26）の内容が全く同じものになっています。更に、（1）の1－3 外部評価委員会②イノベーション人材育成の取組について（P16）と、（2）2－1 地域における『魅力ある高専』の実現（P21）も、説明内容が全く同じものになっています。異なる評価項目を同じ内容で説明されるのは、適切ではないと思います。そのため、簡易版の評価項目は、今年度採用されたミッションをベースにした評価項目で整理して、説明された方が分かりやすいと思います。 また簡易版では番号違いと思われる評価項目もあり、学外者にとっては構成が理解しにくい。	簡易版では外部評価の指摘事項の改善点、本校の将来ビジョンの策定と具体策の検討、本校のミッションに関する取り組みについて、順を追って記載しております。 簡易版（PPT）において、ご指摘のとおり同じ内容の資料が複数枚あります。委員会の説明時には、省略して説明いたします。来年度以降は、ミッションをベースにした評価項目で整理し、同じ内容の資料は使わないようにいたします。
40	—	詳細版については、学校関係者しかわからないと思われる語句が見受けられます。学外者に分からないと思われる語句については、注釈をつけるなどの方法をとってください。また、学校関係者には理解できるが、学外者にとっては説明不足と思われる箇所が見受けられますので、見る人の立場に立って記述してほしいと思います。 詳細版は表で作成されているので、重要と思われる具体的な証拠書類等については、資料版を設けて、そこに載せるなどの方策を検討して下さい。	ご指摘ありがとうございました。本校関係者にしか分からない語句について、詳細版に追記しました。 来年度以降、重要と思われる具体的な証拠書類等については、資料版の作成を検討いたします。

令和3年度 本科 ディプロマポリシー

○ディプロマポリシー

機械 工学科では、「ものづくりの根幹を支える機械工学分野全般の知識を応用し、最先端の高度な技術に対応できる技術者」および「創造性に優れ人格的に立派な国際的に通用する技術者」の育成を目標としています。さらに、開発型の教育・研究、また先端企業や地域との共同（教育、活動）をとおして、様々な問題を解決できる能力を身につけ、社会的・経済的に価値ある「ものづくり」ができるようになるための実践教育を行っております。

上記に掲げる人材となるためには、①本学科に在籍し、②以下に示す能力およびそれに関連する諸事項を身につけ、③卒業要件を満たすこと、が求められ、①～③を満たした学生に対して卒業を認定し、準学士と称することを認めます。

1. 人類の未来と自然との共存をデザインする能力

- ・現代社会を生きるための基礎知識
- ・社会の様々な事柄に関心を持つことができる知的好奇心
- ・技術と社会・自然との関連に、すすんで関心を持つ積極性

2. グローバルに活躍する能力

- ・日本語の文章の内容を正確に読み取り、自分の考えを的確に伝える表現力
- ・英語の基本的な内容を正確に理解し、自分の意図を英語で伝える語学力
- ・自国の文化の理解に基づいた、他文化への理解と許容力

3. 創造力を活かし自立的にものづくりに取り組む能力

- ・専門知識を修得する上で必要とされる数学、物理、化学など自然科学の知識
- ・コンピュータやその周辺機器を活用した文書・資料作成の技術
- ・ネットワークを通しての有用な情報収集力
- ・専門分野の学習や工学実験等を通して得られる専門分野の基礎的な知識
- ・ものづくりと自主的継続的な学習を通して養われる創造性
- ・本校で学んだ専門分野の知識に基づいた応用力

4. 相手の立場に立ってものを考える能力

- ・技術者の社会的な責任と立場に関する理解
- ・様々な文化・歴史などを通して身につける多様な価値観
- ・異文化や自分と異なる考えを学ぶことで、相手の立場に立って物事を考えることができる想像力

○ディプロマポリシー

電気電子 工学科では、「電気電子・情報通信技術の基礎を着実に修得し、ハードウェアとソフトウェアの融合技術を含めた多様な分野において、新たな社会的価値創出に対応できる技術者」および「創造性に優れ人格的に立派な国際的に通用する技術者」の育成を目標としています。さらに、開発型の教育・研究、また先端企業や地域との共同（教育、活動）をとおして、様々な問題を解決できる能力を身につけ、社会的・経済的に価値ある「ものづくり」ができるようになるための実践教育を行っております。

上記に掲げる人材となるためには、①本学科に在籍し、②以下に示す能力およびそれに関連する諸事項を身につけ、③卒業要件を満たすこと、が求められ、①～③を満たした学生に対して卒業を認定し、準学士と称することを認めます。

1. 人類の未来と自然との共存をデザインする能力

- ・現代社会を生きるための基礎知識
- ・社会の様々な事柄に関心を持つことができる知的好奇心
- ・技術と社会・自然との関連に、すすんで関心を持つ積極性

2. グローバルに活躍する能力

- ・日本語の文章の内容を正確に読み取り、自分の考えを的確に伝える表現力
- ・英語の基本的な内容を正確に理解し、自分の意図を英語で伝える語学力
- ・自国の文化の理解に基づいた、他文化への理解と許容力

3. 創造力を活かし自立的にものづくりに取り組む能力

- ・専門知識を修得する上で必要とされる数学、物理、化学など自然科学の知識
- ・コンピュータやその周辺機器を活用した文書・資料作成の技術
- ・ネットワークを通しての有用な情報収集力
- ・専門分野の学習や工学実験等を通して得られる専門分野の基礎的な知識
- ・ものづくりと自主的継続的な学習を通して養われる創造性
- ・本校で学んだ専門分野の知識に基づいた応用力

4. 相手の立場に立ってものを考える能力

- ・技術者の社会的な責任と立場に関する理解
- ・様々な文化・歴史などを通して身につける多様な価値観
- ・異文化や自分と異なる考えを学ぶことで、相手の立場に立って物事を考えることができる想像力

○ディプロマポリシー

電子制御 工学科では、「多岐にわたる電子制御工学分野の知識を応用し、最先端の高度な技術に対応できる技術者」および「創造性に優れ人格的に立派な国際的に通用する技術者」の育成を目標としています。さらに、開発型の教育・研究、また先端企業や地域との共同（教育、活動）をとおして、様々な問題を解決できる能力を身につけ、社会的・経済的に価値ある「ものづくり」ができるようになるための実践教育を行っております。

上記に掲げる人材となるためには、①本学科に在籍し、②以下に示す能力およびそれに関連する諸事項を身につけ、③卒業要件を満たすこと、が求められ、①～③を満たした学生に対して卒業を認定し、準学士と称することを認めます。

1. 人類の未来と自然との共存をデザインする能力

- ・現代社会を生きるための基礎知識
- ・社会の様々な事柄に関心を持つことができる知的好奇心
- ・技術と社会・自然との関連に、すすんで関心を持つ積極性

2. グローバルに活躍する能力

- ・日本語の文章の内容を正確に読み取り、自分の考えを的確に伝える表現力
- ・英語の基本的な内容を正確に理解し、自分の意図を英語で伝える語学力
- ・自国の文化の理解に基づいた、他文化への理解と許容力

3. 創造力を活かし自立的にものづくりに取り組む能力

- ・専門知識を修得する上で必要とされる数学、物理、化学など自然科学の知識
- ・コンピュータやその周辺機器を活用した文書・資料作成の技術
- ・ネットワークを通しての有用な情報収集力
- ・専門分野の学習や工学実験等を通して得られる専門分野の基礎的な知識
- ・ものづくりと自主的継続的な学習を通して養われる創造性
- ・本校で学んだ専門分野の知識に基づいた応用力

4. 相手の立場に立ってものを考える能力

- ・技術者の社会的な責任と立場に関する理解
- ・様々な文化・歴史などを通して身につける多様な価値観
- ・異文化や自分と異なる考えを学ぶことで、相手の立場に立って物事を考えることができる想像力

○ディプロマポリシー

情報 工学科では、「ソフトウェアやハードウェアはもちろん、それらに係わる情報セキュリティに対応できる技術者」および「創造性に優れ人格的に立派な国際的に通用する技術者」の育成を目標としています。さらに、開発型の教育・研究、また先端企業や地域との共同（教育、活動）をとおして、様々な問題を解決できる能力を身につけ、社会的・経済的に価値ある「ものづくり」ができるようになるための実践教育を行っております。

上記に掲げる人材となるためには、①本学科に在籍し、②以下に示す能力およびそれに関連する諸事項を身につけ、③卒業要件を満たすこと、が求められ、①～③を満たした学生に対して卒業を認定し、準学士と称することを認めます。

1. 人類の未来と自然との共存をデザインする能力

- ・現代社会を生きるための基礎知識
- ・社会の様々な事柄に関心を持つことができる知的好奇心
- ・技術と社会・自然との関連に、すすんで関心を持つ積極性

2. グローバルに活躍する能力

- ・日本語の文章の内容を正確に読み取り、自分の考えを的確に伝える表現力
- ・英語の基本的な内容を正確に理解し、自分の意図を英語で伝える語学力
- ・自国の文化の理解に基づいた、他文化への理解と許容力

3. 創造力を活かし自立的にものづくりに取り組む能力

- ・専門知識を修得する上で必要とされる数学、物理、化学など自然科学の知識
- ・コンピュータやその周辺機器を活用した文書・資料作成の技術
- ・ネットワークを通しての有用な情報収集力
- ・専門分野の学習や工学実験等を通して得られる専門分野の基礎的な知識
- ・ものづくりと自主的継続的な学習を通して養われる創造性
- ・本校で学んだ専門分野の知識に基づいた応用力

4. 相手の立場に立ってものを考える能力

- ・技術者の社会的な責任と立場に関する理解
- ・様々な文化・歴史などを通して身につける多様な価値観
- ・異文化や自分と異なる考えを学ぶことで、相手の立場に立って物事を考えることができる想像力

○ディプロマポリシー

都市環境デザイン 工学科では、「建設技術を通して様々な社会問題に対応できる技術者」および「創造性に優れ人格的に立派な国際的に通用する技術者」の育成を目標としています。さらに、開発型の教育・研究、また先端企業や地域との共同（教育、活動）をとおして、様々な問題を解決できる能力を身につけ、社会的・経済的に価値ある「ものづくり」ができるようになるための実践教育を行っております。

上記に掲げる人材となるためには、①本学科に在籍し、②以下に示す能力およびそれに関連する諸事項を身につけ、③卒業要件を満たすこと、が求められ、①～③を満たした学生に対して卒業を認定し、準学士と称することを認めます。

1. 人類の未来と自然との共存をデザインする能力

- ・現代社会を生きるための基礎知識
- ・社会の様々な事柄に関心を持つことができる知的好奇心
- ・技術と社会・自然との関連に、すすんで関心を持つ積極性

2. グローバルに活躍する能力

- ・日本語の文章の内容を正確に読み取り、自分の考えを的確に伝える表現力
- ・英語の基本的な内容を正確に理解し、自分の意図を英語で伝える語学力
- ・自国の文化の理解に基づいた、他文化への理解と許容力

3. 創造力を活かし自立的にものづくりに取り組む能力

- ・専門知識を修得する上で必要とされる数学、物理、化学など自然科学の知識
- ・コンピュータやその周辺機器を活用した文書・資料作成の技術
- ・ネットワークを通しての有用な情報収集力
- ・専門分野の学習や工学実験等を通して得られる専門分野の基礎的な知識
- ・ものづくりと自主的継続的な学習を通して養われる創造性
- ・本校で学んだ専門分野の知識に基づいた応用力

4. 相手の立場に立ってものを考える能力

- ・技術者の社会的な責任と立場に関する理解
- ・様々な文化・歴史などを通して身につける多様な価値観
- ・異文化や自分と異なる考えを学ぶことで、相手の立場に立って物事を考えることができる想像力

令和2年度 専攻科 カリキュラムポリシー

○カリキュラム・ポリシー【機械・電子システム工学専攻】

ディプロマ・ポリシーにて掲げた能力を育成するために、以下の科目群を用意している。各目標とすべての科目の対応は、別紙「環境創造工学」教育プログラム履修の手引きの「表2」に記載されています。

1. 人類の未来と自然との共存をデザインする技術者育成科目として、技術と社会のかかわり、環境科学、環境プロセス工学などを用意している。
2. グローバルに活躍する技術者育成科目として、国際関係論、総合英語、論理的英語コミュニケーションなどを用意している。
3. 創造力豊かな開発型技術者育成科目として、環境電磁気学、特別研究Ⅰ、特別研究Ⅱなどを用意している。
4. 相手の立場に立ってものを考える技術者育成科目として、環境創造工学プロジェクトなどを用意している。

学業成績の評価は、科目担当教員が試験の成績、平常の学習態度や出席状況等を総合的に評価して、原則として100点法で行います。各科目の具体的な評価方法はシラバスに記載している。

評価の点数60点以上及び合の科目は、修得科目となり、単位の修得が認定される。

○カリキュラム・ポリシー【電気情報システム工学専攻】

ディプロマ・ポリシーにて掲げた能力を育成するために、以下の科目群を用意している。各目標とすべての科目の対応は、別紙「環境創造工学」教育プログラム履修の手引きの「表2」に記載されています。

1. 人類の未来と自然との共存をデザインする技術者育成科目として、技術と社会のかかわり、環境科学、環境プロセス工学などを用意している。
2. グローバルに活躍する技術者育成科目として、国際関係論、総合英語、論理的英語コミュニケーションなどを用意している。
3. 創造力豊かな開発型技術者育成科目として、環境電磁気学、特別研究Ⅰ、特別研究Ⅱなどを用意している。
4. 相手の立場に立ってものを考える技術者育成科目として、環境創造工学プロジェクトなどを用意している。

学業成績の評価は、科目担当教員が試験の成績、平常の学習態度や出席状況等を総合的に評価して、原則として100点法で行います。各科目の具体的な評価方法はシラバスに記載している。

評価の点数60点以上及び合の科目は、修得科目となり、単位の修得が認定される。

○カリキュラム・ポリシー【建設工学専攻】

ディプロマ・ポリシーにて掲げた能力を育成するために、以下の科目群を用意している。各目標とすべての科目の対応は、別紙「環境創造工学」教育プログラム履修の手引きの「表2」に記載されています。

1. 人類の未来と自然との共存をデザインする技術者育成科目として、技術と社会のかかわり、環境科学、環境プロセス工学などを用意している。
2. グローバルに活躍する技術者育成科目として、国際関係論、総合英語、論理的英語コミュニケーションなどを用意している。
3. 創造力豊かな開発型技術者育成科目として、環境電磁気学、特別研究Ⅰ、特別研究Ⅱなどを用意している。
4. 相手の立場に立ってものを考える技術者育成科目として、環境創造工学プロジェクトなどを用意している。

学業成績の評価は、科目担当教員が試験の成績、平常の学習態度や出席状況等を総合的に評価して、原則として100点法で行います。各科目の具体的な評価方法はシラバスに記載している。

評価の点数60点以上及び合の科目は、修得科目となり、単位の修得が認定される。

○カリキュラム・ポリシー【建設工学専攻(先進テクノロジー実践連携教育プログラム)】

ディプロマ・ポリシーにて掲げた能力を育成するために、以下の科目群を用意している。各目標とすべての科目の対応は、別紙「環境創造工学」教育プログラム履修の手引きの「表2」に記載されています。1. 人類の未来と自然との共存をデザインする技術者育成科目として、技術と社会のかかわり、環境科学、環境プロセス工学などを用意している。2. グローバルに活躍する技術者育成科目として、国際関係論、総合英語、論理的英語コミュニケーションなどを用意している。3. 創造力豊かな開発型技術者育成科目として、環境電磁気学、特別研究Ⅰ、特別研究Ⅱなどを用意している。4. 相手の立場に立ってものを考える技術者育成科目として、環境創造工学プロジェクトなどを用意している。学業成績の評価は、科目担当教員が試験の成績、平常の学習態度や出席状況等を総合的に評価して、原則として100点法で行います。各科目の具体的な評価方法はシラバスに記載している。評価の点数60点以上及び合の科目は、修得科目となり、単位の修得が認定される。

長岡技術科学大学との連携教育プログラムでは、本校専攻科と長岡技術科学大学の双方において共同教育・指導を実施します。

第 2 部

令和 2 年度 外部評価報告書

令和2年度外部評価委員会委員名簿

外部評価委員

役職名	氏 名
第1号委員 鹿児島大学 大学院理工学研究科長	ほん ま とし お 本 間 俊 雄
第2号委員 霧島市教育委員会 教育委員	かわ の よしひろ 河 野 良 弘
第3号委員 鹿児島県工業技術センター所長	せとぐち しんじ 瀬戸口 眞治
第4号委員 (株)九州タブチ 代表取締役社長 鹿児島高専テクノクラブ会長	つるがの み お 鶴ヶ野 未 央
第5号委員 南九州ケーブルテレビネット(株) 代表取締役社長	やまぐち とし き 山 口 俊 樹
第6号委員 霧島市長	なかしげ しんいち 中 重 真 一
第6号委員 (株)相良製作所 代表取締役社長 鹿児島高専同窓会長	さが ら まさよし 相 良 正 典

鹿児島工業高等専門学校外部評価委員会規則（一部抜粋）

（組織）

第3条 委員会は、人格識見が高く、かつ、本校の発展に理解ある次の各号に掲げる学外者の中から、校長が委嘱した若干名の委員をもって組織する。

- (1) 大学、高等専門学校等の高等教育機関の教員及び経験者等
- (2) 本校の所在する地域の教育関係者
- (3) 地方自治体等研究機関の研究者等
- (4) 産業界の有識者
- (5) 報道機関の有識者
- (6) その他校長が必要と認める者

令和2年度外部評価委員会委員出席者名簿

外部評価委員

役職名	氏 名
第1号委員 鹿児島大学 大学院理工学研究科長	ほん ま とし お 本 間 俊 雄
第2号委員 霧島市教育委員会 教育委員	かわ の よしひろ 河 野 良 弘
第3号委員 鹿児島県工業技術センター所長	せとぐち しんじ 瀬戸口 眞治
第4号委員 (株)九州タブチ 代表取締役社長 鹿児島高専テクノクラブ会長	つるがの み お 鶴ヶ野 未 央
第5号委員 南九州ケーブルテレビネット(株) 代表取締役社長	やまぐち とし き 山 口 俊 樹
第6号委員 霧島市長	なかしげ しんいち 中 重 真 一

鹿児島工業高等専門学校外部評価委員会規則（一部抜粋）

（組織）

第3条 委員会は、人格識見が高く、かつ、本校の発展に理解ある次の各号に掲げる学外者の中から、校長が委嘱した若干名の委員をもって組織する。

- (1) 大学、高等専門学校等の高等教育機関の教員及び経験者等
- (2) 本校の所在する地域の教育関係者
- (3) 地方自治体等研究機関の研究者等
- (4) 産業界の有識者
- (5) 報道機関の有識者
- (6) その他校長が必要と認める者

令和2年度外部評価委員会出席者名簿（鹿児島高専）

職 名	氏 名
校 長	氷 室 昭 三
副校長(教務主事)	松 田 信 彦
副校長(学生主事)	野 澤 宏 大
副校長(寮務主事)	樫 根 健 史
副校長(研究主事・専攻科長)	山 内 正 仁
副校長(国際交流担当)	徳 永 仁 夫
校長特別補佐 (グローバル・アクティブラーニングセンター長)	入 江 智 和
校長特別補佐(地域共同テクノセンター長)	吉 満 真 一
校長特別補佐(学生何でも相談室長)	室 屋 光 宏
校長特別補佐(男女共同参画担当)	新 徳 健
アクションプロジェクトチーム リーダー	岸 田 一 也
アクションプロジェクトチーム (評価担当)	逆瀬川 栄 一
事務部長	今 村 文 昭
総務課長	安 楽 四 郎
学生課長	畠 俊 洋
技術長	原 田 正 和

令和2年度鹿児島工業高等専門学校外部評価実施要領

1. 趣旨

鹿児島工業高等専門学校の自己点検・評価について、外部の有識者により本校の教育・研究活動等の評価、助言を受ける。

2. 評価方法

外部評価は、鹿児島工業高等専門学校の自己点検・評価報告書等に基づき、教育・研究活動等について行う。

委員会終了後、各委員に外部評価結果について、報告書の提出を依頼する。

3. 外部評価委員

- | | |
|------------|--------------------------------|
| (1) 本間 俊雄 | 鹿児島大学 大学院理工学研究科長 |
| (2) 河野 良弘 | 霧島市教育委員会 教育委員 |
| (3) 瀬戸口 眞治 | 鹿児島県工業技術センター所長 |
| (4) 鶴ヶ野 未央 | 鹿児島高専テクノクラブ会長 (株)九州タブチ 代表取締役社長 |
| (5) 山口 俊樹 | 南九州ケーブルテレビネット(株) 代表取締役社長 |
| (6) 中重 真一 | 霧島市長 |
| (7) 相良 正典 | 鹿児島高専同窓会長 (株)相良製作所 代表取締役社長 |

4. 外部評価日時

令和3年 3月24日(水) 14:00~16:45
鹿児島工業高等専門学校 大会議室(管理棟2階)

5. 事前配付資料

- (1) 令和2年度 自己点検・評価報告書
- (2) 令和2年度 学校要覧

6. 日程

- (1) 開会
- (2) 校長挨拶
- (3) 委員及び本校出席者の紹介
- (4) 委員長選出
- (5) 自己点検・評価報告書の説明
- (6) 質疑応答
- (7) 外部評価委員打合せ
- (8) 講評及び閉会

令和２年度外部評価委員会日程表

1. 日 時 令和３年 ３月２４日（水）
 １４：００～１６：４５
2. 場 所 鹿児島工業高等専門学校 大会議室 管理棟２階
3. 会次第
 - （１）１４：００～１５：４５
 - ① 開 会
 - ② 校長挨拶
 - ③ 委員及び本校出席者の紹介
 - ④ 委員長選出
 - ⑤ 令和２年度 自己点検・評価報告書の説明
 : アクションプロジェクトチーム（評価担当）
 （３０分：パワーポイント等）
 - ⑥ 質疑応答（６０分）
 - （２）１５：４５～１６：４５
 - ⑦ 休憩及び外部評価委員打合せ（５０分）
 - ⑧ 講評及び閉会（１０分）

鹿児島工業高等専門学校外部評価委員会規則

（設置）

第1条 鹿児島工業高等専門学校（以下「本校」という。）に外部評価委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（目的）

第2条 委員会は、本校が行った自己点検・評価結果等について検証を行い、本校の教育・研究等の改善に資することを目的とする。

（組織）

第3条 委員会は、人格識見が高く、かつ、本校の発展に理解ある次の各号に掲げる学外者の中から、校長が委嘱した若干名の委員をもって組織する。

- (1) 大学、高等専門学校等の高等教育機関の教員及び経験者等
- (2) 本校の所在する地域の教育関係者
- (3) 地方自治体等研究機関の研究者等
- (4) 産業界の有識者
- (5) 報道機関の有識者
- (6) その他校長が必要と認める者

（委員の委嘱）

第4条 委員の委嘱は、外部評価委員会の開催に合わせて、必要な期間行うものとする。

（委員長）

第5条 委員会に委員長を置き、委員の互選により選出する。

2 委員長は委員会を召集し、その議長となる。

（報告書と公開）

第6条 外部評価を行ったときは、報告書を作成し、公開するものとする。

（運営）

第7条 委員会の運営については自己点検・評価委員会が行う。

附 則

- 1 この規則は、平成16年5月21日から施行する。
- 2 この規則施行後、最初に第3条に規定する委員となる者の任期は、第5条の規定にかかわらず、平成18年3月31日までとする。
- 3 鹿児島工業高等専門学校と有識者との懇談会要項は、廃止する。

附 則

この規則は、平成22年4月1日から施行する。

7. 外部評価委員会議事録 (一部要約)

～開会 校長挨拶～

【氷室校長】

本日はお忙しい中、外部評価委員会にご出席いただきまして、誠にありがとうございます。

つい先日、3月19日ですが、無事に卒業式・修了式を挙行できました。本科の学生181名が卒業し、専攻科の学生24名が修了しました。その様子ですが、南九州ケーブルテレビネット株式会社の山口様にご苦労をおかけしていますが、今、ケーブルテレビで見ることができるようになっています。1日3回ぐらい放映されています。それからyoutubeでも見られるようにしていただいています。華やかな卒業式・修了式にすることはできませんでしたが、よかったです。ただいただければと思います。

さて、最初に今年度の新型コロナウイルスへの対応について、少しお話ししたいと思います。昨年度の卒業式は中止したのですが、入学式は、挙行いたしました。その次の日の始業式は、通常、体育館に集まって行いますが、三密を避けるために放送で行いました。

それから、2週間ほどは、授業ができたのですが、皆さんご存じのように、4月16日だったと思いますが、緊急事態宣言が出されたので、それを受けて4月20日から5月1日までを休校とし、5月2日から5月22日まで遠隔授業を実施しました。当時、鹿児島県は比較的感染者数が少なく、小学校、中学校それに高校は5月11日に授業を再開しています。それを受けて、本校は5月25日から対面授業を再開しました。

5月24日の開寮と25日の学校へ学生が入るときは、検温、体調、県外に行ったかどうかなどを調査しました。朝の始業時間を30分遅らせ、昼休みも30分延長し、密集の緩和を図りました。

学生会も放送で、「学内から感染者を出さないという強い決意のもと、一人ひとりが常に意識して行動をしましょう」と夏休みまで毎日アナウンスしてくれました。

ただ残念なことに、今年のお正月に入ってから、2名の学生がPCR検査で陽性となりましたが、幸いにも学内には、感染は広がっていませんでした。推薦入試直前の出来事で、少し焦ったところはありませんでしたが、無事に推薦入試を実施することができました。

この入試関係ですが、全国の高専で毎年17,000人ぐらいが受検していると思いますが、今年度は2,200名ほど受検者が減少したと聞き驚いております。その中で九州地区を見てみますと、久留米高専が60名、北九州高専が87名、熊本高専が88名、隣の都城高専が60名と受検者が減少しております。

そのような中で、本校は5名増加して、特に女子学生の受検者が18名も増えています。徐々にではありますが、女子学生数が増加しています。これも松田先生を中心とする入試広報プロジェクトチームを立ち上げて、取り組んだ成果だと思っております。

この他にもいろいろなプロジェクトチームを立ち上げました。昨年度、機関別認証評価、監事監査、それにこの外部評価委員会で本校の取り組みについてたくさんのご指摘をいただきました。これらの項目について、一つひとつ改善するためと魅力ある鹿児島高専にしたいという思いから、昨年5月に岸田先生をリーダーとする「鹿児島高専アクションプロジェクトチーム」を結成し、取り組んでまいりましたので、この後報告させていただきます。

このチームの主な取り組みは、

- ・鹿児島高専の将来ビジョンの立案
- ・自己点検評価の見直しおよび改善・数値目標等提案
- ・教員による自己点検評価の改善
- ・教職員の資質向上

などですが、特に、これまでの教員の教育活動は、「講演」「学生による授業評価」「特定の教員の授業公開」など、どうも啓発的なイベントになっていました。それで、これまでの「啓発型」から自分たち自身で組織する自主的な「相互研修型の教職員資質向上の取り

組み」を実施することになりました。

具体的には、すべての教員を対象とした「相互授業参観の実施」、「鹿児島高専教育研究フォーラム」、「鹿児島高専レクチャシリーズ」を立ち上げました。鹿児島高専レクチャシリーズでは少人数で、新人教員と若手教員を分けて研修を行ってきました。今後は中堅教員、シニア教員と研修を行っていく予定です。プロジェクトチームとしては、このほかにも、「グローバルエンジニア育成プロジェクトチーム」「科研費プロジェクトチーム」を結成し、魅力ある鹿児島高専づくりに取り組んでいるところです。

特に、グローバルエンジニア育成プロジェクトチーム」の活動は、新型コロナウイルスの影響で思うようにはできませんでした。後ほど報告があるかもしれませんが、“The 4th International Symposium on Innovative Engineering 2020”は本校主催で、オンラインですが、開催することができました。

それと、ここにおられる外部評価委員の河野先生のご尽力で、南京航空航天大学との相互研究発表会をこの3月11日に開催することができました。専攻科の学生が3件、発表しております。

もう一言だけですが、今年、中国からの外国人教員を1名採用しております。これで外国人教員は2名となりました。女性教員は1名増えたのですが、機構に1名が異動になり、昨年度と同じ数になっています。

それと高専機構の教員顕彰で「産学官ネットワーク教育法による実践的技術者の育成」で山内先生が理事長賞を受賞されたことを報告しておきます。

本日は、本校の取り組みについて忌憚のないご意見を賜り、さらに改善すべきところは改善し、魅力ある鹿児島高専にしていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

～自己点検・評価報告書の説明～

【逆瀬川（評価担当）】

今年度の自己点検・評価報告書、3つの構成になっております。最初の方は、総括のご説明となります。この真ん中辺りからになりますが、昨年度本校は、機関別認証評価、監事監査、外部評価委員会による外部評価を実施いたしました。これらを踏まえまして、今年度は大きく分けて、この3つの取り組みを行いました。

1つ目は、この3つの外部評価に対する、いただいた指摘事項への改善を行うということ。2つ目は、先ほど、校長先生からありました、将来ビジョンの策定と具体策の検討。これを行いました。

また、本校のミッションを新たに作成いたしました。これに対する取り組みを行いました。これらのことを検討する組織といたしまして、鹿児島高専アクションプロジェクトチーム、以下、APチームを形成して、この中で、取り組みました。

こちらは、PDCAサイクルのイメージ図となっております。先ほどの3つの外部評価の指摘事項で共通する点といたしまして、

「PDCAをもう1度見直した方が良い」というご指摘がございました。そこで、本年度は、このAPチームを結成いたしまして、目標に対してPDCAを回し、客観的なデータを基に自己点検・評価を行う体制の構築を目標として取り組んで参りました。

自己点検の流れといたしましては、各委員会でPDCAを評価しまして、そして自己評価をしました。それを基にAPチームにおきまして、自己点検・評価報告書を作成いたしました。そして、2月中旬に自己点検・評価委員会で審議しております。そして本日、外部評価委員会を開催させていただいているということになります。

この自己評価を行うに当たりまして、本年度は独自の自己評価項目、評価方法の変更を行っております。昨年度までは、高専機構の年度計画をベースにした評価項目でございましたが、今年度は、踏み込むべき事項を明

確にするため、ミッションをベースにした評価項目といたしました。

昨年度までは、PlanとDoと評価となっておりますが、本年度は、昨年度の外部評価委員会でいただいたご提言を基にしまして、簡易版と詳細版と分け、簡易版の方では、ミッションや改善事項に対する成果を見える化するとともに、詳細版では、CとAを追加し、評価を行いました。

また、評価基準につきましても、5段階から4段階になり、分かりやすくしております。本校のミッションにつきましては、この3つとなります。

1は、「創造性豊かで人格が優れた国際的に通用する技術者を育成すること」、2は、「開発型の教育・研究に重きをおき、社会的、経済的価値のあるものを創出していくこと」、3番目は、「地域の産業文化、さらには生活を支えていく地域に根差した高専とすること」、これにつきましては、教育理念を達成するための目標とも対応しておりますので、後ほど、質問事項でもご指摘がありましたので、議論いただければ幸いです。

その結果、昨年度の年度計画ベースの評価項目が、今年度は、本校のミッションベースとなりまして、大項目だけ確認いたしますと、教育の質の保障、教育、研究、社会連携、グローバル教育、学生支援、管理運営となっております。各番号は先ほど、述べましたミッションの番号に対応しております。以上が総括の部分となります。

ここから令和2年度の自己点検・評価報告書の簡易版の説明となります。目次は、このようになっておりまして、今、概要が終わりまして、自己点検の評価としましては、この3つとなっております。それぞれ説明させていただきます。

まず、外部評価の指摘事項の改善につきましては、3つの外部評価をさらに、3つ、3つ、3つと分類しておりまして、機関別認証評価は、後ほど示しますように、10の項目があるのですが、それを3つの種類に分類しております。監事監査につきましては、6つの項目から3つ、その中から3つを抽出している

ということになります。外部評価委員会につきましては、昨年度の講評でいただきました項目を3つあげさせていただいております。

それではまず、機関別認証評価の項目から説明いたします。まず、機関別認証評価につきましては、10の項目があるのですが、その10の項目を1と2と3で、1は、「自己点検評価、研究活動、地域貢献活動に関する規定の必要性」ということで、定められていないという内容です。2番目は、教育に関する内容、3番目は、学生のアンケートに関する内容です。

まずこの1番についての取り組みと評価につきましては、今年度の4月、5月、また、9月に関係する規定を制定いたしました。また、PDCAサイクルが構築されたということで、自己評価としましては、1番高いSという評価にしております。続きまして、この2に関するものですが、この中で最も重要と思われる8番について説明させていただきます。

8は、成績資料の保管状況、成績評価方法など、教育の質の保障の改善に関するものです。「学校として、成績評価の妥当性の自己チェック、複数年度に渡り同じ試験問題が繰り返されていないことのチェック及び試験問題のレベルが適切であることのチェックに取り組んでいないなど、成績評価の客観性、厳格性を担保する措置が十分とはいえない」という、このような厳しい指摘でございました。これに対しまして、この詳細版のPlan、Do、Check、Actionをここに示させていただいております。

計画といたしましては、試験問題レベルの把握、繰り返し問題のチェックを行うということと科目担当者から試験終了後に、セルフチェックシートを提出していただく計画になっております。

実際の実行といたしまして、試験問題の確認について、セルフチェックシートを作成し、後期の中間試験から提出いただいております。

Checkといたしましては、教務委員会、教務主事、主事補会議で議論を重ね、セルフチ

ェックシートの提出を求めました。3月末に教務委員会でセルフチェックシートを確認し、試験問題レベルについて、確認するところまで、しっかりと体制を整えていくということになります。

アクションとしましては、教員として基本的な部分であるため、教務主事からの指導を含めて、引き続き管理を強化していくということで、順調に推移しているということで、Aという自己評価になっております。

続きまして、学生のアンケートに関するものです。こちらは、「教育、生活環境の利用状況や満足度等を学校として把握し、改善するための体制の整備が十分とはいえない」ということで、以下につきましては、時間の都合上、DoとCheckを基本的に説明させていただきます。

これまで学生に対してのニーズ調査を行っていなかったため、満足度調査を実施しました。Checkといたしましては、学生委員会において、質問事項等を審議し、マイクロソフト 365 を活用した満足度調査アンケートを終業式までに全学生を対象に実施したということで、評価としては、Aをつけさせていただいております。

ここから監事監査の外部評価になります。監事監査からいただいた最初の指摘としましては、「キャリア教育及び進路指導の学校全体としての取り組みの必要性」ということで、どのような指摘があったかと申しますと、「本校のキャリア教育と進路指導が学科単位または、就職指導の担当がメインで行っている」という指摘がございました。そこで「学校全体の取り組みが必要です」ということで、Doといたしましては、就職指導のガイドラインを年度当初に作成いたしました。

また、担任が1人で600社程度の求人情報を整理しておりましたので、学生のアルバイトを雇用して、負荷を軽減いたしました。また、1年生から5年生までのキャリア支援マップを作成したということになっておりまして、来年度も引き続きキャリア支援室でこの活動を継続していくということで、自己評価としてはAとさせていただいております。

監事監査から2つ目といたしまして、「相

互事業参加の改善の必要性」がございました。こちらは、「ある教員、あるいは、ある1部の科目だけが授業参観を受けている」というご指摘でございましたので、令和2年11月2日から20日の約3週間で公開授業を実施しております。こちらがその結果となっております。3回以上出席した教員が67パーセント、2回以上が9パーセント、1回が6パーセント、0回が18パーセントという結果となっております。公開授業チェックといたしましては、公開授業実施報告を校務連で行っております。

また、アンケートを事業担当者に送付し、APチーム会議において、公開授業の反省を行い、非常勤教員への案内等の不備も確認しております。ということで、評価をAとさせていただきます。

監事監査からの3番目としましては、「退学率、留年率の改善」となります。こちらは、高専機構全体でも問題になっていることとございまして、数値目標としましては、前年度から2割減ということに教務委員会で行っております。こちらのグラフは、平成17年から昨年、令和元年までの14年のグラフになっておりまして、ピンクが5年生以下、それから青が4年生以下、そしてこの緑が4年生以下のうち単位不足による留年者ということになります。そして、この1番下が1年生ということになっております。

実際、こちらはPlanの方が多すぎて、こちらで説明させていただきます。これまでの取り組みとしましては、低学年の数学、国語などございましたが、今年度新たに行ったこととしましては、体育祭の応援団の参加に一定の成績の基準を設けたということを行っております。

Checkといたしましては、コロナウイルスの影響で、自学自習、補講等はできませんでしたが、行ったこととして、学習状況を把握するためのアンケートを実施いたしました。そのアンケート結果を全教員周知しており、その結果を踏まえて教育指導に繋げており、これは、3月末にしております。ということで、今年度は、コロナウイルスの影響もあり

ましたが、このような活動をしたということで、Aとさせていただきます。

続きまして、ここから外部評価委員会にいただいたご指摘に対する取り組みになります。まず、1番目が「PDCAに基づいた評価の必要性」ということで、「数値目標を掲げて定量的な評価をしてください」というご指摘でした。先ほども示しましたこのPDCAサイクルを構築することとアクションプロジェクトチームを結成いたしまして、PDCAが回るようにしたということと、ミッションに基づいた評価項目、それと簡易版、詳細版、それとPDだけではなく、CAも含めた評価ということで、システムが構築されたと考えておりますので、自己評価をSとさせていただきます。

続きまして、外部評価委員会からいただきました指摘としまして、2番目が「イノベーション人材への取り組みについて」ということで、本校がこの答えになる取り組みとして今、計画していることが1年生の混合クラスです。

この1年生の混合クラスとは、機械、電気、電子制御、情報、都市環境デザイン工学科で入学してくる学生の1年生を8人ずつ均等に分けまして、1組から5組として分けます。そして、専門科目で共通実験、PBL、Project Based Learning等を行うことで、目的としましては、広く工学に興味を持ってもらうことで、イノベーション人材の育成を検討することとを目的としております。

現段階の状況といたしましては、令和4年度から1年生の混合クラスを実施することを決定しております。これにつきましても「イノベーション人材の取り組み定義」というご指摘をいただいておりますので、後ほど、ご議論いただければ幸いです。評価といたしましては、Aとさせていただきます。

3番目に外部評価委員会からのご指摘といたしまして、「企業に対する満足度調査の実施と調査結果の検証について」ということで、「高専は期待されておりますが、企業からどのような期待があるのかを再検証をした方がいい」というご指摘をいただきました。

この検証を行うために昨年認証評価受けましたが、その前に認証評価を受けるために企業からのアンケートを取っておりまして、結果を基に再検証を行いました。アンケートを送付させていただいたのは、平成28年、29年度の就職の企業先に送付させていただいております。

159通を送付いたしまして、回答数は108通で回答率は、67.9パーセントでございました。本科の卒業生の仕事に対する評価としましては、満足が89パーセントという結果を得られました。また、採用希望としましては、96パーセントという高い結果が得られております。

では、卒業生の知識と能力についてお答えくださいという項目があるのですが、このうち専門知識に関しましては、81パーセントが満足という結果が得られております。注目していただきたいのは、プレゼンテーション能力に関しては、50パーセント、英語につきましては、11パーセントしか満足が得られていないということです。これにつきましては、現在、グローバル教育ということで、取り組んでおりますが、充実させていく必要が引き続きあるということです。以上を踏まえまして、再検証をすることができたということで、自己評価としては、Aをつけさせていただいております。

続きまして、ここまでの外部評価に関するものでしたが、本年度新たに取り組んだ2番目といたしまして、「将来ビジョンの策定と具体策の検討」とあります。こちらがAPチームで取り組んだ内容となっております、3つございます。それぞれご説明いたします。

「この地域における魅力ある高専」、こちらも外部評価委員会で「継続的に鹿児島高専の魅力、教育の特色を出してください」ということがございましたので、こちらは、重複する項目となりますので、説明は割愛させていただきます。同じ取り組み内容になるのですが、いただいた外部評価からの異なるということで、それを明確にするためにあえてここに示させていただきました。

2番目といたしまして、「社会的課題を解決し新たな価値を創出する教育研究機関の

実現」ということで、これに関する取り組みといたしまして、NECと協力し機能的な顔認証システムの構築を行うということで、こちらは、NECとの協定を締結したという写真になっております。

その顔認証システムを図書館と女子寮に展開していこうという計画になっております。実際に行った内容としましては、テレビ会議でアプリケーションについて検討を重ねて、2月から図書館と女子寮におきまして、実証実験を開始しているということになります。チェックといたしましては、新型コロナウイルス影響もございましたが、予定通り試験運用を開始することができております。ということで順調に進んでいるということで、Aという評価をつけております。

3番目といたしまして、「地域創生への貢献」ということで、本校は長島町と共同のプロジェクトを行っておりまして、長島町を実証実験の場として、地域の活性化を行っております。こちらは、専攻科1年生の「環境創造プロジェクト」という授業でもものづくりを行っています。こちらは発表会の風景になりますが、テーマといたしましては、みかんの収穫、じゃがいもの収穫、水稻栽培など、長島町の特産に関するもののテーマをすべて行っているということになっております。

昨年よりも前は、単年度で終わっていたようなテーマもございましたが、今年度からは単年度で終わらせることなく引き続き実施するというので、ものづくりを継続的に行うという取り組みを始めております。しかしながら、今年度はコロナウイルスの影響がございまして、現地に行くことができませんでしたので、評価としては、Bとなっております。

最後にミッションに関する取り組みとなります。評価項目のうち、これに関する内容を説明させていただきます。まず入試倍率についてです。こちらの図は、平成27年からR2年度、現在の1年生までの5学科の入試倍率です。今の1年生は1.51倍ということで、志願倍率の数値目標は、1.5倍となっております。こちらのほうは5学科のグラフになっておりまして、情報が1番よいという状

況になっております。今年度の取り組みとしましては、10月の学校説明会では、従来行っていなかった学科別の説明や見学、本校のホームページ上でウェブ1日体験入学のコーナーを新設した他、グーグルと契約して本校の内部をストリートビューの形で見られるようにするなど、新たな活動を増やして、中学生、保護者に積極的なPRを実施することができたと、コロナの中でもこのように柔軟に対応することができたということで、自己評価としてはSをつけさせていただいております。

時間の都合上、次に進ませていただきます。留年率、退学率につきましては、先ほど、説明させていただきましたので、とばさせていただきます。

続きまして、研究の項目です。まず1番目といたしましては、特例認定教員率というのがございまして、これは専攻科で特別研究を担当できる教員の数を示しております。こちらのグラフは、平成28年から令和3年までのその教員率の割合を示しております、昨年度までは、46.5パーセントだったのですが、来年度は58.1パーセントまで上昇することができているということになります。

行ったこととしましては、特例適応教員の申請時に研究主事及び研究主事補でヒヤリングを実施し、本人の意思を尊重しながら、申請書類の記入方法、アドバイス、指導を行ったということになっております。これより自己評価としては、Aをつけさせていただいております。

こちらのグラフは、その資格に必要な研究業績になりまして、ジャーナル、国内学会発表、それとプロシーディングペーパー、国際会議発表、レターということになっておりまして、国内学会につきましては、コロナの影響もあって少なくなっているかなと思います。

続きまして、その研究の2つ目といたしまして、科研費です。こちらは、申請率と採択数になっておりまして、1番上が応募です。2番目が継続、赤が新規の採択となっております。応募数につきましては、申請のアナウンスを徹底することによって増えました。54

件から57件に増えておりますが、新規の採択については、下がっているということになっておりまして、自己評価としては、まだまだということでBという評価をつけております。

続きまして、社会連携の項目になります。KBC事業に関するもので、こちらにつきましては、これもコロナの影響を受けたのですが、実行といたしましては、KTC企業による1年生の特別講義、3年生への企業見学の代替として、特別講義を以下のとおり3年生と1年生に実施しております。

Checkといたしましては、コロナウイルス禍の中で、例年通りの実施が困難であったため、ウェブを活用し、新たな実施方法を検討し、感染拡大防止を踏まえた形で実施することができたということで、自己評価としては、Sをつけさせていただいております。

4番目にグローバル教育とあります。こちらで説明させていただきますと、計画といたしましては、スウェーデンのNPIストックホルム高校との異文化交流、ワークショップを実施しております、グラフがありますので、それで説明いたします。こちらは、下が1年生、2年生、3年生、そして上は、TOEICの結果になります。水色は、1年生の学年平均、オレンジは、TOEIC講座の受講生の平均、そして3番目は、オンラインの異文化交流に参加した学生のTOEICの点数ということで、オンライン異文化交流に参加した学生は、上がっているということが各学年いえるかと思います。

また、「海外派遣者数についても目標を設定した方が良い」というご指摘を昨年度もいただきました。目標値をいたしましては、全学生数の10パーセントとなっております、今年度は目標値である100人の参加をすることができているということになっております。

こちらのグラフは、海外インターンシップの参加者数の推移でして、ご存じのとおり、コロナウイルスの影響で昨年、今年度、全て中止になっているという状況になっており

ます。コロナウイルスの影響もありましたが、先ほどのワークショップ、異文化交流などはできておりますので、評価としては、A をつけさせていただいております。

最後に学生支援ですが、こちらにつきましては、同じですので、省略させていただきます。以上が説明となりまして、総括 1 いたしましては、外部評価委員会からのご指摘への対応についてのまとめになります。

まず 1 番目といたしまして、「PDCA に基づいた評価の必要性」につきましては、AP チームにより自己点検評価の確認を行うことで、PDCA のサイクルの構築を行うことができたということで、S をつけさせていただいております。

2 番目といたしまして、「イノベーション人材への取り組み」につきましては、混合クラスの検討を行い、イノベーション人材育成の道筋を立てたということで A をつけさせていただいております。

3 番目といたしまして、「企業に対する満足度調査の実施と調査結果の検証」につきましては、認証評価でのアンケート結果を基に再検証することができたと、英語力について特に引き続き取り組んでいく必要があるということで、A をつけさせていただいております。

総括 2 といたしまして、全体の取り組みのまとめになります。今年度は本校の教育研究活動及び管理運営に関する PDCA サイクル、いわゆる内部統制システムのひな型を構築することができました。また、将来ビジョンの策定と具体策の検討を行い、本校の新たな教育の特色の道筋を立てることができたと考えております。

48 の項目の全ての評価項目に対し、S は 5 項目、A は 37 項目、B は 6 項目、C は 0 項目でした。それぞれの項目に対する Check、Action についての検討もなされており、本校の PDCA サイクルは機能していると自己評価できると考えております。やや遅れている項目は、長島町での取り組みや海外インターンシップなど、新型コロナウイルスの影響が大きかったと考えております。次年度は、新

型コロナウイルスの対策を講じながら、本年度の体制をより本格化させ、更なる改善を進めると同時に本校の強みを強化していく必要があると考えております。

以上で私の説明は終わります。ありがとうございました。

～質疑応答～

【本間議長】

今まで説明されました事項は、事前配布資料等に基づいています。説明事項につきましてはあらかじめいただいておりますご質問を含め、委員の方々からご意見をいただきたいと思ひます。そのご意見、ご質問を受けまして、鹿児島高専の方から回答や意見を伺いたいと思ひます。委員、お1人当たり3分程度で質問をいただき、それに高専側から回答をするという形式で進行していきたいと思ひますがよろしいでしょうか。

それでは、最後に私が質問をさせていただくこととしまして、順番として、最初に中重委員からご質問お願いいたします。

【中重委員】

霧島市の中重です。よろしくお願いいたします。質問は事前に1度、流しておきましたので、私の担当は、社会連携、自治体との連携、グローバル教育というところでございました。昨年は、私が思ったことを結構、語ったのですが、今回、高専との連携について、どういったことを思っているかということ、担当課に流して今回は準備をして参りました。

市民環境部の市民活動推進課の方から現在、高専の留学生に霧島国際交流協会が開催する外国人との親善交流促進事業の各種イベントに参加をいただいていると、今後もさらに当団体が主催する海外交流、都市交流事業に学生の参加や学校として協力をいただくことで、貴校の国際化に連携して取り組んでいきたいという意見があったところでございます。

前回もお話しした内容ですが、ぜひまた霧島市が取り組んでいる海外への交流、ホームステイ等の国際交流にも、時期的に少し難しいというお話しではございましたが、また上海の方との交流は、世界中から集まるホームステイ等の活動がありますので、ぜひそういったところには逆にある程度英語力をもった子が行かないとなかなか交流もできないというところもございますので、ぜひそういったところも学生の育成のために一緒に協力して行っていければと考えているところです。

社会教育課の方から、鹿児島高専、そして志学館大学、本市教育委員会が連携して開催しているニューライフカレッジ霧島「隼人学」は、県内、全国でも類をみない取り組みであり、令和元年度、優れた運営と学習成果が地域に生かされていると評価され地域の活性化に寄与するとして、全国市民大学連合から優良市民大学として認定をされたということでございます。この取り組みについても、今後も連携して行っていきたいということでございますので、これからも高専さんと高専さんがある自治体の霧島市としっかりと連携しながら子供たちの育成、そしてまたそれぞれ得意分野、不得意分野がございますので、そういった中でお互いがウィンウィンになるような活動が進めていければと思ひますので、よろしくお願いいたします。

私の方からは質問というよりも今後の取り組みをより連携をして行っていきたいという夢の要望という形になりましたが、今後ともよろしくお願いいたします。

【本間議長】

ありがとうございました。只今の中重委員からのご要望に対しまして、鹿児島高専の方からコメント等、お願いいたします。

【氷室校長】

ありがとうございます。私どももぜひ一緒に海外交流事業等を展開していただけるのはありがたいと思っております。ニューライフ隼人学、これも私ども、いろいろな先生が参加して、さらに発展させる方向で取り組んでいきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

【徳永副校長】

国際交流担当の徳永の方からもコメントをさせていただきます。ご指摘ありがとうございます。

留学生に関しましては、様々なイベントに参加させていただいて、ありがとうございます。来年度以降もぜひ参加してもらいたいと思ひます。本年度、留学生だけではなく、本校の学生によるグローバルクラブを立ち上げまして、学生によってキャンパスの国際化、グローバル化を推進していこうという組織を立ち上げて、学生の方が中心になって活

動しておりますので、留学生だけではなく、グローバルクラブを中心に市の様々なイベントにも今後も積極的に参加したいと思っております。よろしくお願いいたします。

それから国際交流、実際、アメリカなどに行くような、その目的、やはり学校行事、試験と重なっているのですが、何とか参加できるようにしたいと思っております。今後ともよろしくお願いいたします。

【本間議長】

続きまして、外部評価委員会、規則第3条に規定の第1号委員から順にお願いしたいと思えます。続きまして、河野委員からお願いいたします。

【河野委員】

この内容を見せていただきまして、感じたことを4点、質問という形で出しております。

まず、全般についてのことなのですが、自己評価報告書を見まして、2020年度、鹿児島高専のミッションをベースに7つの大項目で分類されており、評価項目を見ますと、学校経営がある程度、網羅されています。今回の自己点検・評価報告書は、非常に素晴らしい改善が行われているなど感じております。この中で3つのミッションというのが書かれていますが、この3つのミッションについては、やはり学内での周知、あるいは学外に対しても広報する必要があるかと思えます。これをどのような形でなされるのかということを質問しております。

2点目ですが、自己点検・評価報告書の作成を行う組織として、今回、アクションプロジェクトチームが結成されたことは高く評価できると思います。今回、自己点検・評価報告書というのは、PDCAサイクルを活用して、プロジェクトチームの成果がみられるという感じがいたします。

3点目ですが、今回、自己点検・評価報告書は簡易版と詳細版に分かれています。それで、簡易版の項目について①各外部評価の指摘事項、②将来ビジョンの策定と具体策の検討、それから③本校のミッションに関する取り組みから今日、報告していただきました、

簡易版はどの評価項目を選択するかということにつきまして、十分検討され発表されたということで、非常に内容としては、分かり易いという感じがいたしました。

4つ目が詳細版について、学校関係者しか分からないと思われる語句が見受けられますので、説明不足ということを指摘いたしました。

この詳細版につきましては、先ほど、提出されました資料を見ますと、その指摘に対してすぐ対応されたということについても高く評価できるのではないかと思います。

ただ全体的に少し誤りが見受けられます。もう少し報告書を推敲してもらって、誤りがないような形で最終的に仕上げる必要があるかという感じがいたします。この自己点検につきましては、組織構成上最終判断を決定する評価委員会があるようです。その評価委員会がどうすればうまく機能するのか、委員の構成や運用面で、どういう形で作成していくかという過程のところで、改善が必要になっているのではないかと思います。

私の質問項目について、今その回答のところを見せていただきました。適切な説明がされておりますので、私としては、理解できたと思っております。

以上です。

【本間議長】

ありがとうございました。只今の河野委員からのご質問、ご意見に関しまして、鹿児島高専からの回答をお願いいたします。

【氷室校長】

ご丁寧にコメントをいただきまして、誠にありがとうございます。本当に感謝しております。誤りに関しては、本当に申し訳ないと思っておりますが、彼らの仕事が多すぎたことに起因するもので、どちらかと言うと私の責任だと思います。今後こういうことがないようにしたいと思います。岸田先生からお願いいたします。

【岸田リーダー】

アクションプロジェクトチームとして、今回、外部評価も含めた評価機関からの点検について取り組ませていただいて、簡易版と詳

細版の2つを作るということで、逆瀬川先生が主担当として頑張ってくださいましたが、河野委員のご指摘のとおり、少しチェックが甘く、委員の先生方には見づらい評価報告書になってしまったことは、ここでお詫びしたいと思います。来年度に向けてそういうことがないように今後も改善に努めていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

【氷室校長】

ミッションにつきましては、学内周知はかなりやっています。私は、何度も何度も話しているつもりです。外部に対しては、確かに若干希薄かもしれませんが、今回のコロナ禍ということがあります。今後の課題として展開していきたいと思っております。どうもありがとうございました。

【本間委員長】

それでは続きまして、瀬戸口委員からよろしくお願いいたします。

【瀬戸口委員】

最初に感想としまして、この取り組みとして、PDCAの評価ということで、こういったことでかなり前向きに取り組んでいらっしゃるということ、最初にそれを強く感じました。よくやっておられるなという感想でございます。

私の担当でいいますと、質問というよりも、1つは科研費の外部資金についてというところですが、毎年、採択の状況が増減していたということを少し気にしまして、通常、結構、特定の先生方がとっていくという現象があるのかなと思ったものですから、その辺りがどういう状況なのかということで質問させていただいたのですが、基本的には偶然だということで書かれておりまして、しかし、できるだけ色々な先生たちが採択されるように努力していただければいいのかなと、分野も広くとっていけるといいのかなと思っております。

それからグローバル教育ということで、色々努力をされておりますが、やはり国際的に通用するということですが、そこまでいなくてもやはり英語というのはどこでも必要になってきますので、それをしっかりと

教育をしていただくということで、海外のインターンシップが今回、厳しい状況になりましたが、ぜひ状況が良くなりましたらしっかりと立ち上げて交流をやっていただきたいと思います。そのこと自体が、学生も興味を持ちやすいということだと思いますので、ぜひまた始めていただきたいと思いますということがお願いでした。

あともう1つ、私の担当とは違うかもしれないと思ったのですが、留年率、退学率について、高専自体というよりも、高専の中で各高専、各学校の皆さん努力をされていると思うのですが、それと比較してどうなのかなということを感じまして、質問させていただいております。通常の大学や高校もあります。そことの比較というのはなかなかしづらいものがあるかなと、高専自体、独特なところがありますので、ですから、今度は同じレベルでどうだったのかなというところで、定義されておりますが、その辺りが自分たちでどう評価されているのかなというところが少し教えていただければと思っております。以上でございます。

【本間議長】

ありがとうございました。只今の、瀬戸口委員のご質問、ご意見に対しまして、高専側から回答をお願いいたします。

【氷室校長】

ありがとうございます。科研費に関しましては、科研費プロジェクトチームを結成して、山内先生を中心にかなり取り組んできました。山内先生、何かございますか。

【山内副校長】

科研費については、大体、先ほど委員の方から話がありましたように、これは3年に1回くらいで大きな波がくるのかなと思ってます。採択される教員が決まっている状況です。ですので、もう少し書き方や地域に密着した研究をやる、テーマで提出してもらう、基盤研究ですと、単独で申請するのではなくて、例えば、鹿児島大学さんと連携してなど、複数で申請するという、そういった形にもっていきたいと思っています。

あともう1つ、これは科研費だけではなく

て、省庁予算、色々な競争的資金がございます。そういうものにも積極的に応募していきたいと思います。以上です。

【氷室校長】

高専は英語が弱いといわれることがありますが、平成16年頃から比べるとかなり英語の成績は上がってきていると思います。平成16年の高専が独立行政法人になった頃ですが、当時は、専攻科を修了するときにTOEICで400点をとらせて修了させることを目指していました。

今は、本科の3年生で400点をとらせようという動きになってきておりますので、徐々にではありますが、上がってきているとは思っています。

もちろん、努力が足りないところがありますが、今後は、混合学級などを含めて教育のあり方も新たな展開をしていこうと思っています。具体的には、年齢に応じた英語教育のあり方というのを専攻科まで工夫したカリキュラムを作っていきたいと思っています。

次に留年率と退学率ですが、これは全国的には本校は平均ぐらいかなと思っているところですが、高専では、高校に比べると確かに割合は高いと思います。もちろん、我々は「入学させた以上、全員合格させるぞ」という思いで取り組んでいますが、そこにはいろいろな要因があります。

スマートフォンが大きな要因の一つかなと思っています。夜中にスマートフォンに夢中になって、睡眠時間が少なくなっている学生が増えてきているといった状況があります。

そうすると、昼間どうしても授業中に寝てしまうという学生が出てきます。そういった問題への対策等を含めて、今後の教育のあり方等を検討したいと思います。特に、1年から3年までは、高校に沿った形の対応となるように工夫していきます。来年度の留年率と退学率はおそらく減ると思っています。

松田先生の方からコメントいただきましょうか。

【松田副校長】

本日の資料は、2月に作成しておりますので、実は、本年度、つい最近3月に入りまし

て、進級判定会議、卒業判定会議ございまして、その結果が反映されていないのですが、残念ながら本年度に関しては、全体でいうと横ばいです。それを受けまして、高専機構の方からも今、厳しく「留年をできるだけさせないように」と要請もきておりますので、来年はより一層、単位ということに関してももう少し積極的に教員の方も、どちらかというと今までは、古い考え方で、勉強しない学生はいいのだという風潮はまだ本校の中にも残っているのですが、そこは教員の方の意識改革をして、勉強させられない教員の方が悪いというように意識を変えて、単位を取らせられないのは、教員の責任だ、学生が勉強しないからではなくて、教員の指導不足というところをもう少し教員の意識の中に植え付けながら来年度は新たな取り組みを今、考えているところです。

積極的には、留年生対策、今までもやってないわけではないのですが、今まで以上に積極的に取り組んでいきたいと思っています。今年は横ばいだったのですが、来年は、2割以上減らせるように頑張っていきたいと思っています。

【本間議長】

ありがとうございます。続きまして、鶴ヶ野委員からよろしくお願いいたします。

【鶴ヶ野委員】

鶴ヶ野でございます。よろしくお願いいたします。この評価委員会というのもかれこれ5、6年、毎年参加させていただいてまいして、過去を言っただけなのですが、どちらかというと高専機構が定めた評価項目にのっとしてやるということで、実際この地域で深く鹿児島高専に携わっている者からすると、何かしらこの評価をする意味があるのかなのかということが過去の外部評価だったように思います。

そういう意味では、今回、プロジェクトチームが編成されて「独自のセルフアセスメント」と言うのでしょうか、自分で自己評価をする仕組みをしっかりと構築されたというのは、本当に素晴らしい事だと思っています。初年度にしては、と言うとまた失礼なのかもしれないのですが、スタートとしては、うま

くしっかりと出来上がってきたのだなという印象がございます。

しかもそれを、おそらく校長先生のトップリーダーシップで色々なメンバーを入れて、様々な角度から議論されて作られたのだらうなというところが垣間見られるアセスメントの仕組みになっています。非常にこれは素晴らしい事なので、是非これをもう少し肉付けしたり、色々な意味でストーリー性がしっかりと通るような評価項目であったり、また評価の仕方であったり、それはこれからブラッシュアップしていけばより本校が成長していく 1 つの大きな仕組みになるのだらうと思います。

この仕組みが一旦出来上がったから「これでいい」というのではなくて、毎年、毎年、評価項目を含めて見直されていけば、おそらく将来においても素晴らしい学校になっていくのだらうなと言うことを予感されるような想いで今回は読ませていただきました。

委員の中で唯一民間企業の私も社長をしていますので、一般的な民間企業でどんなことをやっているかといいますと、我々がやっているのが、世界 100 ヶ国以上であらゆる企業組織が採用し、経営を評価するアセスメントツールとして。「経営品質向上プログラム」と言うものがあります。これはグローバルスタンダードになっていまして、日本でも日本生産性本部が中心になって、全国 22 拠点ぐらいでこういった経営の質を評価するプログラムの中で自己点検、いわばこれは「組織の健康診断」という意味で実践しています。その最初に出てくる評価項目の 1 つにリーダーシップというのが出てきます。

リーダーシップとは何かといいますと、まさしく今回掲げられた「理念」「ビジョン」や「ミッション」がどれくらいその組織の中で浸透して、それが言葉として単に記憶するのではなくて、組織として「ありたい姿・なりたい姿」に向けてどう行動していますかという意味で、この浸透度合いを評価する項目であります。皆さんがどう理念を共有して、またそれを共感して、そしてそれを校長先生が言わなくても、副校長の方々や、それぞれの先生から、先生へという意味で共鳴していく。更には、どなたかがおっしゃいましたように、学校の外にも高専の理念が共振してい

くような浸透があると AA 以上の評価になります。「共有」「共感」「共鳴」「共振」と我々言っていますが、その範囲がどれくらいまで広がっていくのかということが今後の組織の成長に繋がっていくと思いますので、先生方の会合で今年のミッションは、「こうだ」、「ああだ」、という「これを共有しました」というだけではなくて、常にミッションに向けてどう行動しているのか、どう考えているのかというところまでをしっかりと共に共感、共鳴、共振していくというような動きが、また仕組みの中にあるのか、と言うところが重要なかなと思ったりしました。

大体全体を見させていただいて、偉そうなことを言うつもりは一切ないのですが、ミッションを 3 つ掲げてありますが、その到達点というイメージと言いますか、どこまで行ったらこのミッションは概ね「実現できたね」という到達イメージが薄いように感じます。また、そのミッションに到達するための具体的な施策に纏わるプロセスの指標として、適切な評価指標になっているのか、そういうところをじっくりと見ていくと、少し関連性が薄かったり、本当にこれでこのミッション実現と言えるのだらうかというところが見える気がします。その辺は追々見直されたいのではないかなと思います。

先ほども申し上げたとおり、この外部評価の機会は高専というこの 1 つの組織の健康診断だと思っていまして、どちらかというと外部評価を受けると、自己評価としては「これをやりました」、「あれをやりました」と言う「良く魅せよう」という感じになっていくものです。そうなっていくと、本質的な課題が見過ごされたり、あるいは外部評価に指摘されないようにという自己防衛機能みたいなものが働くので、せつかくこういうアセスメントの機会は、真の課題が本当にあぶりだされてくるような、そういう自己評価をしていくことが次なる成長につながるポイントなのだらうなと思います。

また、高専としての強みを伸ばすのか、見つけた課題として出てくる部分を補強するのかという、どちらに軸足を置くかを考えた時に、「何故高専が選ばれるのか」「どうして高専にこんなに学生が寄ってくるのか」「どうして高専の学生を企業が欲しい」と言うのか、それそのものが鹿児島高専の強みな

のだろうと思います。その強みを更に伸ばすための施策、あるいは、本当はできていないといけないのですが、まだまだベーシックな部分も出来ていないなという、一般的に弱みの部分に力を入れて、それを補強するのか、その辺りは考え次第だと思います。やはりどちらかというと私は、強みに重点をおいて、全国の高専の中でも鹿児島高専 No1 という強みをどんどん磨きをかけて作っていただいた方がより魅力がある学校として、長く続けていくのかなという気がしますので、その辺は参考にさせていただきたいと思います。

最後にもう1つ。先ほどの経営品質向上プログラムは、評価項目8つのカテゴリで組織の成熟度を全て評価出来ます。後日、プロジェクトチームの方には、その評価基準書を差し上げますので、参考にさせていただければと思います。また、学校組織が全くやっていないかというとは実はあるのです。金沢工業大学はやってます。評価項目、評価内容、着眼点など、アセスメントの仕組みとしてベンチマークしていただくとまた来期は組織として進化できるのかなと感じます。以上です。

【本間議長】

ありがとうございます。ただ今の鶴ヶ野委員からのご質問、ご意見に対しまして高専側から回答お願いいたします。

【氷室校長】

たいへんありがとうございます。本当におっしゃるとおりだと思います。確かにミッションに対する具体的な到達目標をきちんと決めていないところがありますので、今後はおっしゃるとおりやっていきたいと思えます。

高専の強みは、私もそのように考えていますが、本校が世界の鹿児島高専と言われるように、そういう強みをこれから作り上げていきたいと思っています。今後ともどうぞよろしくをお願いいたします。どうもありがとうございました。

【本間議長】

それでは続きまして、山口委員、よろしくをお願いいたします。

【山口委員】

私は小さい会社を応援させていただいておりまして、今回はこの資料を読ませていただいている中で、自分のところではできていなかったところが積極的にやられているなと非常に感銘しました。

私の担当範囲の事前質問等々で送らせていただいたのですが、その中で2つだけ質問をさせていただきます。

1つ目は、通し番号9、2-1に関係するのですが、今後、中学生が減っていくことは確定していて、今のやり方をやって、10年間はもつと思うのですが、10年越えたらもう非常に生徒が今の2割、3割減ってしまうので、そういうときにどうやって学生を採用するかという、女子というマーケットを開発したり、留学生という選択肢もあるのか、その辺りをどう考えていらっしゃるかなということです。

例えば、ライバルとしては、中学校の子どもがいるので、N高という高校が最近、すごく伸びている、そこも十分ライバルになるのかなと思うので、その辺をお聞かせ下さい。

2つ目の質問なのですが、24に関係すること7-2です。私が院生のときにも非常勤講師をしていることがありまして、そのときに1度も誰も私の授業を見に来なかったということが、自分のやっていることがいいのか、どうすればいい授業できるのかということが全く分からない状態が続きました。学生のアンケートだと、授業を向上させることには繋がらないので、こういった今高専がやられている活動というのはとても大事だと思います。そういったことをやって質を上げれば、高専の発展に繋がるということになると思いますので、その辺をお聞かせいただけたらと思います。以上です。

【本間議長】

ありがとうございます。只今の山口委員からのご質問、ご意見に対して高専からの回答をお願いいたします。

【氷室校長】

ありがとうございます。まず、少子化の問題ですが、今、全国で15歳人口は県平均で

約 20,000 人です。鹿児島県は 16,000 人ぐらいいますが、鳥取県は最も少なく約 5,000 人で、鹿児島県の 3 分の 1 以下です。

そういう状況ですが、米子高専の今年の志願倍率が 2.3 倍で、全国的に志願者が大きく減少した中、57 名も志願者が増加していました。高専に魅力があるとおのうに志願者が増加してくることがわかります。ですから、我々も努力をして、これからは先ほどお話しがありましたように、世界に打って出るような魅力ある高専にすることでゆるぎないものにしたいと思っています。

確かに女子学生の数、もう少し増やす必要性はあると思っています。女性が活躍できるものづくりというのが、これから大きく展開していく気もしています。

それと授業に関してですが、どんな授業も授業のあり方というのがあると思いますが、これまでの授業や試験のあり方は、見直す必要があると思っています。

これまでは、学生が授業に参加して初めて新しいことに触れることになっていますが、そうではなくて、授業でその内容が完結するような、その授業に出席するとすべて理解できているような、そういうシステムをつくりたいと思っています。もちろん、高専ですのでいかに実践力を身につけるかということで、解のない問題に答えていくような授業、あるいはものづくりに直接結びつくような授業を展開したいのです。今やアクティブラーニングが浸透していますが、文系の科目でも、何か従来とは違って、学生が主体的に学ぶような学習法を展開していきたいと思っています。

【松田副校長】

入試に関して、教務主事の人は、入試の担当になっていますので、今後の中学 3 年生の人口が少しずつ減っていくということについては、危機感をもっております。

今、校長が申しましてように、今年、少し女子学生の受験生が伸びたおかげで、去年より倍率が微増で、逆に言えば、男子学生がもう伸びしろがない状況になっています。そういう意味では、今までの常識をちょっと越えて、新しいところにどんどん開拓していく。そういう意味では、留学生というのも 1 つの

選択肢なのだろうと思うのですが、質問でもお答えしたように、現在は、高専機構というフィルターを通して本校に留学して派遣されてくるので、こちらの方で独自に幅広く受入れるというシステムにはなっていないということが 1 つ、難点だと思います。

僕が本当は答えるべきではないのかもしれませんが、目標のところですが、目標を定める前にまず自分の現実を授業に対する、知ってもらうためには、従来から学生による授業評価アンケートをとっていたのですが、ちょっとした小細工といったら悪いのですが、少し変えたのは、今までは担当主事補が全て集計をして、結果だけ、つまりあなたのこの項目に対して学生の平均は、5 段階評価で、4.0 でした、3.8 でしたという平均値だけを教えていたのですが、今年から担当指導の負担を減らしていくことも含めて集計は各教員がする。いわゆる遠隔事業のシステムを使って、各教員がアンケートをとる、集計も各教員がやって、結果を逆にこちらに連絡しました。

そうすると 5 段階で仮に 4 という平均点が出たときに、全員に 4 をつけたのか、それとも 5 と 3 が半分ずついたのかなど、自分の状況がより明確に見えるようになって、今年自分もやってみて、なるほどこういう評価だったのかということが、ただ、平均値をポンとみせられるよりも、随分教員の意識改革にも繋がっているのではないかなと期待しているところで、そういったものをベースの今度は、来年自分はどのように改善していこうか、そういったものと教員相互授業参観なども含めて、教員がより明確に自分のやるべきことを定められるようにという意味で、少し小さな改革ではあるのですが、僕は大きな改革に繋がるのではないかなと個人的には思っております。以上です。

【本間議長】

よろしいですか。それでは、最後に本間の方から質問をさせて下さい。私は、大学にいますので、同じように色々な評価を毎年のようにやっております。その観点からお話をさせていただきます。

まず、この評価委員会の指摘の 3 点からですが、1 つの PDCA に基づいた調査の必要

性に関して、前回、PD はしっかりしていたのですが、CA が少し見えなかったかなということで、この内容が出てきたのだと思います。今回 PDCA という大きな枠組みができたと思います。

AP チームによりそれをやっているのですが、実は AP チームがない方が本当はいいのです。各個人、個人が PDCA ということを考えていかないといけないと思います。ですからある時、全体の AP チームが必要ないという方向で、教員間の教育の実施や申し合わせの作成が必要ではないかということです。せっかくなので、次回どのように PDCA が回っているのかという具体的な内容が示されたいと思います。

2 番目のイノベーション人材、育成の取り組みについてです。イノベーションというのは、非常に幅が広いのです。回答の方にもありましたが、鹿児島高専独自のイノベーションというのは何なのか明確に見えなかったことにあります。私が文科省に説明して指摘されることに、「イノベーションって何ですか」とよく言われることに関係します。色々なキーワードがあります。例えば、STEAM という言葉が今、しきりにもてはやされています。STEAM をどう捉えるかといいますと、人により随分違います。そのようなキーワードの捉え方をどう表現するかを考えられた方がいいと思います。

3 番目は企業に対するアンケート調査の実施等、調査結果の検証についてです。これも、私どもが対応した文科省では、必ず「アンケートをとりなさい」と言われます。アンケートの中に色々な試みをしています。そこに自由記述欄をたくさん作りました。そうすると自由記述欄というのは、会社によって随分書き方が違います。生の声が出てきます。その生の声をグループ分けして表示すると、実は色々なことが見えてきます。

今回のアンケート、どのようにやられたか分からないのですが、その自由記述欄があったならばそれをご紹介していただきたいと思いました。それによって、どのように高専側に対して要望をしているのかが見えてくると思います。

この 1 から 3 には入っていませんが、高専間の違いの比較ができないかということです。先ほど、瀬戸口委員の方からも「比較したらどうだ」とお話しされましたが、色々なものがあります。特例教員の話しや留年など、色々なものを比較すると高専の弱点や優位な点、強みも見えてきます。その強みをさらに強化するようなことを行えば、鹿児島高専の特色が表れてくると思いました。

気になった点は、1 番最初のところに時間外学習が B という評価でした。授業よりも時間外学習が多いわけですね。非常に気になったのですが、それに対するコメントがいただきたいと思います。

それから先ほど見せていただいたそれぞれの GPA ですが、みな同じ基準の評価になっていますでしょうか。それを見ることによって教員側が次年度どのように考えるかと話しをされていましたが、一つの考え方にディプロマ・サプリメントというものがあります。

ディプロマ・サプリメントによって学生は何を習得したかということが今注目されています。ディプロマ・サプリメントの考え方で、むしろ教員ではなくて学生がどのように授業を学んだのかという見える化をすると生徒たちがもう少し自分のやる気というものが出てくるイメージがあります。以上でございます。

【氷室校長】

ありがとうございます。アンケートの記述に関しては、松田先生、お願いします。

【松田副校長】

教務関係のアンケートに関して、今年は高専機構の方から「こういう形でマイクロソフトのフォームズを使ってやりなさい」と評価項目も含めて指定が今年初めて参りました。そこを削ってはだめですが、付け加えることは構わないということで、一応、20 項目くらいさらにこちらの方で付け加えて出しました。

その中に自由記述の項目は、入れてはいるのですが、どちらかというと自由記述部分は「いい、だいたいいい、あまりよくない、悪い」、というときの「悪い」を選んだ人にだ

け、どのような部分が悪かったですかということについての自由記述で、全体的な意見の集約にはなっていない部分があるので、来年度以降のアンケートに関しては、そこを反映させて、また改善に取り組んでいきたいと思っております。ありがとうございました。

時間外学習、これは、本当に今年はこちらの方の力不足でまだ十分に把握できておりませんので、特に授業によっては授業時間これだけに対して、何時間分の自学自習の時間を要するという指定がある授業がございまして、そこを以前、ちゃんと把握していますかという指摘はあったのですが、他の高専がどのように取り組んでいるかという把握の仕方を今年色々、よその高専の教務主事などに伺って、「このようにやっています」とよそもなかなかうまくできていないところが多かったのですが、その辺りの意見を集約して来年度しっかり状況を把握できるようにつめて参りたいと思っております。

本当にそこがなかなか進んでおりませんで、大変申し訳ございませんでした。

学生に対して自分が何を身につけたか、これはパッと案が浮かぶわけではないのですが、教務委員会、また新しく総務企画委員会ができますが、そういうところとも連携しながら、学生は自分がどのように学習に向き合ったのかということは、高専機構の方からもポートフォリオ教育ということで、推進しなさいということで、課題が出ております。そういったものを導入しながら、小中学校の方では、それとは違うのですが、自分たちの活動記録のようなものをもって、ファイルしていくということが、今年の中学校3年生から去年1年間つけたものを持って高専に入ってくると思いますので、そういったものとも連携しながら、自分がどういった能力を身に付けてきたかということを高専としても仕組みをつくっていききたいと考えております。

【氷室校長】

独自のイノベーションがよく見えないということをおっしゃっていますが、確かにここに視点をおいてなかったこともあるのですが、我々高専は、どちらかというと開発型の研究を通したイノベーションをやっているつもりです。

現場でどのように役に立つのか、現場でとにかく我々の技術をどう展開していくの

かといったところに重きをおいておまして、そういったところで得意な分野ではあるのですが、それがなかなか見える化ができていなくて、少しこれから工夫していきたいと思っております。

高専独自の技術というのもございしますので、そういったものを展開していきたいと思っております。

ちなみに他の高専との比較は、これも元々、高専というのは、弱点ではあるのですが、文科省がすごく指導していて、どこの高専も同じような教育が大学と違って展開されてきたのです。非常に高専というツールの教育の指標に従順であったという、文科省に、ですからどこも本当に似たような学生を育てて、なかなか他の高専との違いを出すのは、これまで難しかったような気がします。

特に最近では、モデル・コア・カリキュラムを出してきて、ある一定までは同じ教育を展開するという仕組みになっております。その中で、どのようにそれぞれの高専の特徴を出していくのかということが、我々に与えられた課題なのですが、これは、我々先ほど言いましたが、世界の鹿児島高専にするためには、どのように我々の魅力をそのモデル・コア・カリキュラム以外のところを出していくかということが、非常に大きな課題であろうかと思っています。

これに関しては、これから我々がどのように改革していくかにかかっているかと思いますが、是非、これは出していきたいと思っておりますので、今後ともご指摘いただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

8. 外部評価委員講評

【本間議長】

それでは、講評の方に移させていただきます。最初に、キーワードを言います。「議論と新たな課題発見」です。これは、教員間の議論をしないと新たな課題発見がないだろうと、それは外部評価委員会の方で指摘されたことを何かするというのは、ただ宿題をやるということになるので、そうではなくて、内部で議論をして新たな課題を発見することが重要であろうということです。

これに関しては、先ほど言った報告書にミスイクがあるということに関連し、出てきたものに対して、しっかりと読み合わせをする、あるいはフィードバックにつなげているのかの疑問です。

それでは指摘を3点申し上げます。

1 番目です。ミッションに対する評価項目の成熟化と PDCA の実質化、現状把握と議論を継続すること。2 番目です。数値目標ではなく、数値目標の評価と具体化、重点項目の設定をしていただいて、次年度はこの重点項目に対して議論を進めること。今回、素案的な事項が色々示されていますが、何を重点的にやったのかということが見えてこなかったということです。

3 番目です。自己評価委員会の責任体制の構築を議論すること。これは先ほど言いましたが、まとめるだけではなくて、フィードバックの必要性が重要であろうということです。せっかくまとめたのに、そのまとめたものを実際に教職員が見直しているかということが議論に多くあがりました。

以上、3つの指摘点です。その他に自己評価書の詳細版の分かり易い工夫を考えてくださいということです。どのようにするかは、議論して考えてみてください。

それからSの意味。S、A、B、Cとありましたが、Sは100パーセント、100パーセントでしたら何もやらなくていいのかという話なので、Sの意味をもう少し明確にした方がいいだろうという意見がありました。どのような意味でSなのか、ハードルを越えれば全部Sなのか、その辺りのところが曖昧であったということです。

以上です。付け加えることございますか。

【会場】

ありません。

【本間議長】

最後に外部評価委員会規則に基づき評価書を作成しますが、最終的な内容の確認については、私に一任していただき、事務局とともに作成するという事でよろしいでしょうか。尚、委員の皆様には、発言内容については、確認や照会がありましたら、協力をお願いいたします。本日は皆様の協力で円滑に委員会を進行することができました。委員長としてお礼を申し上げます。

それではこれもちまし令和2年度鹿児島工業高専高等学校外部評価委員会を閉会いたします。ありがとうございます。

【氷室校長】

皆様、本日は本校の取り組みについて、いろいろと貴重なご意見をいただきまして、誠にありがとうございました。

特に印象に残っているのは、高専におけるイノベーションというキーワードでございます。日本では、イノベーションを起こす必要性があると言われながら、それが長い間できていないという問題があります。この問題はその核心部分で技術者教育と地域に根ざした高専づくり、技術づくりの問題と結びついていると思っています。

半導体、電気産業の衰退の問題は、高専における技術者教育をどのように行うべきかという問題に重要な関わりをもっており、

- ・日本における技術イノベーションを持続的にどう起こしていくのか。

- ・そのために人材育成をどのようにするのか。

- ・地域の衰退を防ぎ、地域の人々と地域に根ざした高専づくりをいかに行うのか。

といったこれらの課題の探求を行い、総合的な研究を行い、その成果を社会に示していかなければならないと思った次第です。

皆様からいただいたご意見を参考にさせていただき、さらに魅力ある鹿児島高専にしていきたいと思っております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

本日はありがとうございました。